

学生研究助成金論文集

22

学生研究助成金論文集

わたしたちの論文

齊藤 裕也

闘病記から見られる精神病からの成長

松田 青那

フィンランドにおけるファミリーセラピストとはなにか
— Open Dialogue を手がかりにして

和光大学・かわ道楽研究班 代表者 土谷 杏季

「かわ道楽」体験と自然の関わり方

蒲原 羽純

高田誓女の語りの世界
『山椒太夫—舟別れの段』を読む

2014

和光大学

 和光大学

わたしたちの
論文

2014

 和光大学

学生研究助成金論文集

22

和光大学の
論文

2014

 和光大学

目 次

委員長講評	1
闘病記から見られる精神病からの成長	3
齊藤 裕也	
指導教員のコメント 伊藤 武彦	19
フィンランドにおけるファミリーセラピストとはなにか	21
— Open Dialogue を手がかりにして	
松田 青那	
指導教員のコメント 杉浦 郁子	29
「かわ道楽」体験と自然の関わり方	31
和光大学・かわ道楽研究班 代表者 土谷 杏季	
指導教員のコメント 堂前 雅史	63

[縦組]

高田瞽女の語りの世界『山椒太夫一舟別れの段』を読む……………1 (86)

蒲原 羽純

指導教員のコメント 山本 ひろ子…………… 22 (65)

和光大学学生研究助成金規程……………88

和光大学学生研究助成金事務取扱要項……………89

和光大学学生研究助成金委員会規程……………90

学生研究助成金委員会……………奥付

「わたしたちの論文」題字 本学名誉教授 川添 修司

講評に代えて

2014年度 学生研究助成金委員長

星野 菜穂子

2014年度学生研究助成金研究論文集が刊行の運びとなった。今年度は以下の4点が掲載されている。

- ・ 斉藤裕也氏「闘病記から見られる精神病からの成長」
- ・ 松田青那氏「フィンランドにおけるファミリーセラピストとはなにか - Open Dialogueを手がかりにして」
- ・ 蒲原羽純氏「高田瞽女の語りの世界『山椒太夫 - 舟別れの段』を読む」
- ・ 和光大学かわ道楽「『かわ道楽』体験と自然の関わり方」

論文掲載に先立って、2014年12月に研究報告会が開催された。蒲原氏は「瞽女のうたの世界 - 瞽女の担った芸能と信仰をさぐる」、他の3名（うち一つはグループ）は論文と同タイトルでの報告が行われている。それぞれの報告及び論文内容自体の講評については読者の皆様に読んでいただくこととし、ここでは研究報告会の様子をご紹介し、研究助成金事業の意義とこれらに向けての課題を述べて講評に代えたい。

報告会は12月3日（水）15：40からA棟第2会議室において、各報告者30分の予定で行われた。例年通り「報告」、「質問」、「推薦教員による講評」の構成であった。報告者の方々は、それぞれ熱心に準備をされ報告会に臨ま

れたと思われ、その緊張と熱意が伝わるよい報告会であった。報告会の参加者数（聴きに来てくださる方）が気になるころであったが、実際には当初予定よりも多く、A棟会議室に急遽補助椅子を準備するほど入れ替わり多くの方に足を運んでいただいた。和光大学同窓会をはじめ学外からもお越しいただいた。昨年より報告会会場を通常の教室から会議室に変更したとうかがっているが、熱気が伝わりやすい環境が提供できて会場変更は功を奏したといえよう。報告会後は、懇親会に会場を移し和やかな雰囲気会で会を終えることができた。報告会にご参加いただいた方には改めて御礼を申し上げたい。

和光大学学生研究助成は、他大学にはない和光大学に固有の学生研究支援の制度である。学部生、大学院生を対象に、申請書や計画書の提出を求め審査委員会が審査、採択をし、採択された研究には助成金が支給され、報告会での報告、論文作成と掲載という枠組みで学生研究支援のために運用されている制度である。和光大学同窓会からも毎年ご寄附をいただいている。この制度の助成をつうじてさまざまなかたちで研究支援が可能になっている。これまで助成を受けた多くの学生が体験してきたように、全国各地に出向きフィールドワークを行う機会を提供している。一方、「かわ道楽」は助成金を受けて、

毎年岡上地区流域の環境調査を継続的に行い、そのことは地域交流にもつながる重要な活動として誰しも認めるものになっている。また研究自体への支援というだけでなく、学生自らが申請や計画書を策定すること、また報告会に向けて報告の準備を行い、発表を行うこと自体が、若い学生諸君に大きな成長の機会を与えるものになっていると思われる。

しかしながら、今年度については応募者数が4件しかなかったことが本助成金制度最大の課題となった。学生研究助成金委員会としては、本制度の周知をはかること、とくに近年、芸術学科の学生の応募がないことから、芸術学科の作品も制度の対象となることの周知、他学科においても直接教員から学生に声をかけていくなどの働きかけが必要という認識で一致している。すでに助成金研究を体験した学生にアンケート調査を行い、改善点も探ろうとしている。

昨今は、学生の就職を取り巻く環境が厳しくなっていることから、学生時代にインターンシップをはじめとした就業体験を行うことに注目が集まっている。しかし学生時代に研究に没頭する、その報告の機会を得られるという体験はまさに学生の本分であり、就業体験に勝るとも劣らない学生時代の財産となるものである。こうした機会が積極的に利用されないことは大変残念なことでもある。来年度にむけては、是非多くの多様な学科の学生が研究助成金に応募し、研究の機会を得ることを期待して講評に代えたい。

闘病記から見られる精神病からの成長

11P030 齊藤裕也

■ 第1章 ある女性の闘病生活から得たポジティブ思考：『ともし火』のテキストマイニング

■ 問題

統合失調症 (schizophrenia) は、うつ病とともに二大精神病の内の1つである。春日 (2008) によると、この精神病は100人に1人が発症すると言われており、珍しい病気ではない。発症した者は、妄想や幻聴、幻覚に苦しむことから日常生活を営むことが困難となる。そして、当事者にしか分からない苦痛から家族と周囲の人間との関係にも大きな影響を与えるのである。なお、この病気を発症する原因は未だにはっきりとは分かっていないが、ストレスや遺伝、環境など、複数の要因が重なって発症すると考えられている。治療は、主に薬物療法が行われ、時には電気ショック療法も用いられることがある。しかし、この病気は完治することは難しいとされている。そのため、当事者は長い期間に渡って、統合失調症と付き合わなければならないのである。

また、統合失調症学会の岡崎 (2013) によると、今日では、精神科医が統合失調症の症状は一路進行という考えに疑問に感じている。統合失調症当事者に向けてSST (Social Skill Training: 社会技能訓練) を行うこと

によって、症状の改善が明らかにされている。SSTとは、統合失調症学会の向谷地 (2013) によると、認知行動療法をベースとしており、当事者が主役となって活動する。北海道の浦河べてるでは、統合失調症の当事者と町民有志によって活動拠点を立ち上げ、当事者たちが日高昆布の事業を運営している。昆布の発注や商品の受注・配送、メンバー同士のコミュニケーションなどの日常場面から生まれた生活感のある練習課題において、積極的にSSTが活用されている。また、第二世代抗精神病薬の導入によって、表情の硬さや反応の鈍麻、抑うつ気分などの多くは第一世代抗精神病薬などによるものであったと明らかにされている。統合失調症学会の福田 (2013) によると、抗精神病薬は現在、2種類に分類される。第一世代抗精神病薬は以前から用いられた薬物、第二世代抗精神病薬は最近になって用いられるようになった薬物である。両者の名称の違いは、脳の神経伝達物質に対する作用の違いから来ている。第二世代は、第一世代の副作用の軽減を目的として開発されている。抗精神病薬は、精神症状の緩和と再発を予防する効果がある。抗精神病薬による治療で症状が緩和しても、継続して薬を服用しない場合は数年で60%から80%の患者が再発するとされるが、薬の服用を継続した場合の再発率は低減する。

そして、門林（2000）によると、闘病記とは病気と闘っている（向き合っている）プロセスが書かれた手記を指す。なお、門林（2000）は、「闘病記からは病気を体験した人でなければ書けない衝撃や事実が伝わってくる」、「読み手にとって、闘病記は病気や看病の体験を共有することにより、勇気を与え、治療や生き方の選択の上で重要な指針を与える役割を果たすと考えられる。」と述べている。小平・いとう（2012）によると、偏見低減のために講義で闘病記を活用する実践・研究の際に、当事者が病気の体験を記した闘病記などを「ナラティブ教材」と定義している。

本研究の分析対象とする吉田美保子（2002）著の『ともし火一心の回復―』は、統合失調症を発症した著者の闘病記である。吉田は26歳の時、突然統合失調症を発症した。それは部屋に吉田が1人でいた時のことで、幻聴や幻臭、体感幻覚、幻視に襲われた。吉田の身内や周囲の人に統合失調症の当事者がいなかったこと、吉田が統合失調症についての知識がなかったこと、発症前に毎日読んでいたSFマンガの影響が重なって、発症した当初は自分が超能力者、または神に近い存在になったと思い込んだ。あとがきで吉田は、今は「自分の力で前向きに生きる」ことを大前提とし、統合失調症の「病状の中で悪意とも思われる部分を取り除いた残りの病状は、今一生懸命に生きている私への応援のように受け止めています。」と述べている（吉田美保子、2002, p.115-116）。

統合失調症は多くのネガティブな概念を有しているが、同時にポジティブな点も存在しているのではないだろうか。本研究では、吉田著の『ともし火』をテキスト・マイニング

して、「統合失調症の闘病」と「ポジティブな考え」との関係性を探ろうと考えている。

■ 目的

『ともし火』の著者である吉田美保子が述べる統合失調症とポジティブな考えとの関係性を分析する。統合失調症は完治が難しい病気であり、誰でも発症するリスクを持っている。無論、この病気を発症しないことにこしたことはない。しかし、仮に発症した時、病気に対してネガティブな気持ちよりもポジティブな気持ちで向かい合う方が症状を良くすると考えられる。また、斉藤（2013）によれば、統合失調症の闘病生活を経たことで、当事者にポジティブな変化をもたらすことがあると示されている。統合失調症の闘病記の分析によって、闘病生活の中からポジティブな点を見つけることで、病気と向き合う時の手助けになるだろう。

■ 方法

1. 分析対象

今回は、吉田美保子（2002）『ともし火一心の回復―』を分析の対象とした。

2. 分析手順

吉田美保子（2002）著の『ともし火一心の回復―』のPDFファイルをPCソフト「読取革命」で文章ファイルに変換、タブ区切りテキストにしてExcelファイルにしたものを「Text Mining Studio ver.5.0」で分析した。それに加えて、八木剛平の『手記から学ぶ統合失調症』を参考にして、全15章の内の第1章「予兆」から第10章「回復への道のり」までの内容を『ともし火』の内容と照らしあわ

せて章の順にまとめた。

はじめに、吉田著の『ともし火』を裁断し、スキャナーでPCに読み込んでPDFファイルにする。さらに、そのファイルを「読取革命 ver.14」で読み込んで文章ファイルに変換した。次に、その文章ファイルを「Word2013」に読み込み、目次など不要な部分を取り除き、誤字や脱字、文字化け、乱丁の部分を変更した。そして、文章の前に章と番号、章タイトルを加えて、それぞれの間にタブを入力してタブ区切りテキストにした。それらの文章をコピーして、「Excel2013」に1行空けて2行目から貼り付けのオプションの「貼り付け先の書式を合わせる」を指定、ペーストした。そして、空けた1行目のAには「章」、Bには「番号」、Cには「章タイトル」、Dには「文章」と入力した。吉田の著書の「まえがき」と「あとがき」には章タイトルが無かったため、その2つの章タイトルの項は空欄にした。

「Excel97-2003ブック」の形式で保存した前述のファイルを「Text Mining Studio ver.5.0」で読み込んで、テキストの基本統計量、単語頻度分析、係り受け分析、注目語情報分析、対応バブル分析の順に行った。その際、単語頻度分析では上位20を抽出、係り受け頻度分析では単語フィルタの係り元単語で「病気」と「分裂病」を「含む」、属性を「テキスト名」と選択し、上位20を抽出した。注目語情報分析において、注目語設定タブで「注目することば」の単語を「病気」と「分裂病」、共起抽出設定タブで「抽出単位」を「文章単位」と設定した。対応バブル分析において、動作を「属性とことばの関係を図示する」、属性を「章」と設定し、上位20を抽出した。なお、これら以外の設定は変更せずに分析を

行った。

『ともし火』は2002年に出版されたため、現在では「統合失調症」と改名された病名が「精神分裂病」と表記されていた。これにより、今回は改名前の「精神分裂病」という表記を用いて分析を進めた。また、著者の父親は著者の実母と離婚し、別の女性と再婚している。著書内では、継母のことを実母と同様に「母」と表記している。著書内で語られる「母」のほとんどが継母を示していることから、分析に表れる「母」は継母と解釈して進めた。

また、先行研究である八木剛平の『手記から学ぶ統合失調症』を参考にして、全15章の内の1章「予兆」から10章「回復までの道のり」までを抽出して、吉田の『ともし火』のテーマ分析を行った。八木の著書は統合失調症の当事者が記した手記を複数用いて、予兆や発症など章ごとに内容をまとめている。吉田の『ともし火』もその手記の中に含まれ、一部の章に内容が引用されていた。今回は予兆から回復までの章の内容を吉田の著書の内容と照らしあわせて、章の順にまとめた。

■ 結果

1. 基本情報

表1は吉田(2002)の『ともし火』の基本情報であり、ここでは総行数、平均行数、総分数、平均文長、延べ単語数、単語種別数、タイプ・トークン比を示す。まず、総行数は分析対象の吉田の著書の項数を表しており、46項であった。次に、1項あたりの文字数を表す平均行長(文字数)は383.4文字であった。この著書の総文数は814文、その平均文長(文字数)は21.7であった。内容語の延べ単語数は7,174個、単語種別数は2,732個だった。そ

して、語彙の豊富さを表す指標であるタイプ・トークン比（Type-Token Ratio, TTR）は、 $TTR = \text{単語種別数} / \text{述べ単語数}$ から算出したところ0.381と示した。数値が比較的高いことから、吉田の著書に用いられている語彙は豊富であることが示された。

表1 吉田美保子(2002)『ともし火』の基本情報

	項目	値
1	総行数	46
2	平均行長（文字数）	383.4
3	総文数	814
4	平均文長（文字数）	21.7
5	延べ単語数	7,174
6	単語種別数	2,732

2. 単語頻度分析

図1は吉田（2002）の『ともし火』を単語頻度分析し、上位20の単語を横棒グラフで表したものである。この分析を行うことで、著書の中ではどの単語が多く用いられているか

を明らかにし、著者の考えを汲み取る。図1を見ると、「自分」が最も多く、それに次いで統合失調症に関連する「病気」が著書内で多く用いられていた。また、「病気」以外に統合失調症を示す単語として、「発病」、「分裂病」、「病状」が上位20位内に入っていた。この他に、ポジティブを連想させる「良い」が5番目に多く使われていることが示された。そこでグリッドを表示してより具体的な数値を見たところ、最も多く用いられた「自分」は28個であり、次いで「病気」が24個であった。また、「病気」以外に統合失調症を示す「発病」と「分裂病」は15個、「病状」は13個であった。そして、「良い」は著書内で21個使用されていることが分かった。そこで、『ともし火』のWordファイルを用いて「良い」という単語を検索した所、著者が闘病生活の経験から得た、病気に対する対処法の部分に多く用いられていた。また、その対処法はポジティブな思考を伴っている。その一部を抜粋すると、「住んでいる地域の保健所を

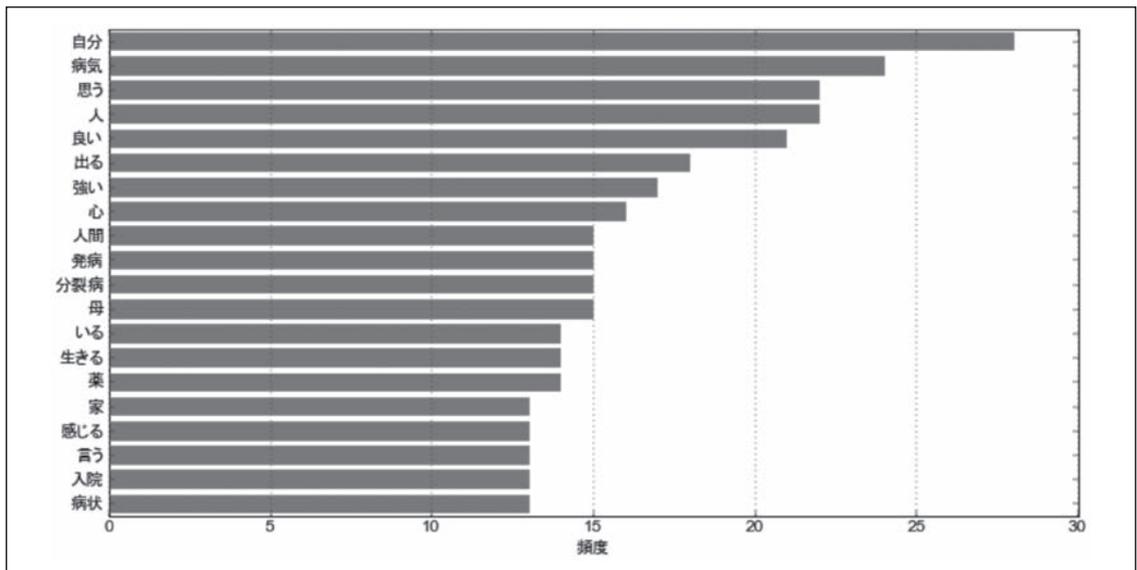


図1 吉田美保子（2002）『ともし火』の単語頻度分析

利用して、生活を楽しくするのも良いことです。」(吉田, 2002, p.43) や「自分を映す鏡は、あまり値の安い物ではなく、少し奮発しているものにした方が良いと思います。」(同, 2002, p.59)、「私も自分に強く言い聞かせているのですが、完全なんてこの世にないのだから人間一生未完成、死ぬまで神にはなれない、人生三十～五十%できれば良いとする、そういう気持ちを心のどこかに持っていれば楽になります。」(同, 2002, p.71) がある。生活を楽しくすること、充実させること、完璧を求める必要は無いことを闘病生活の中で心がけることは、病状を良くする効果があると考えられる。

3. 係り受け頻度分析

図2は伝記内で使われた単語の中で、どの単語との係り受けが多いのかを係り受け頻度分析を行って横棒グラフにして表したものである。グラフの横軸の数値は、係り受け関係にある単語の出現項数(頻度)を表している。この分析を行うことで、特定の単語との繋が

りを明らかにし、どのようなことが著書の中で語られているかを見出す。図2を見ると、「病氣—ひどい」と「病氣—安定」が最も多く、3項であった。「ひどい」は病気の症状や症状によって振り回された時の言動を示し、「安定」は症状を安定させることや安定したこと、薬のことを示すことが分かる。この他に「分裂病—わかる」、「病氣—知る」があり、著者が病氣に対して理解しようとしていることが見られた。また、闘病生活から分かったことや知ったことも含まれるだろう。これらから筆者が病氣に対してポジティブな姿勢が見ることができる。著書には、「そして、普通するときでも、人間、細かいことをあれこれと思わずらうのは、心が神経質になっていて状態が良くないんだということを知っておくのも生きていく上で大切なことだと思います」(吉田, 2002, p.30)、「このようにある程度、薬のことを知っておくのも大切なことだと思います。」(同, 2002, p.65) と述べられている。

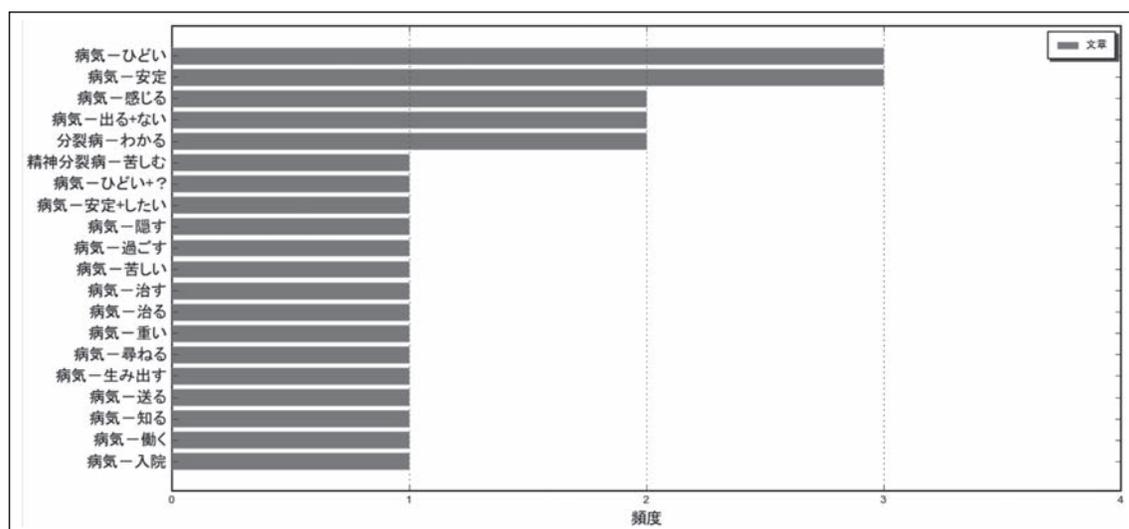


図2 吉田美保子 (2002) 『ともし火』の係り受け頻度分析

4. 注目語情報分析

注目語情報分析では、「病気」と「分裂病」という単語について分析をする。著書の中で「病気」、「分裂病」という単語が、どのような単語と係り受け関係にあるのかを明らかにし、結果を図3に示した。この分析を行うことで、特定の単語と結ばれている単語群を明らかにし、関係性を探る。図3を見ると、「病気」は「いろいろ服用」、「おしゃれ+ない」、「する+ない」、「やせ細る」につながっている。「いろいろ服用」は複数の薬を飲んでいたことを示し、「おしゃれ+ない」、「する+ない」、「やせ細る」は病気の症状や薬の副作用によってやる気がでないことを示しているだろう。著書には、「病気してからたくさんの薬を服用し、体がだるくなり、おしゃれもしなくなった私に、妹は小学校の修学旅行で、小さなパールのかわいらしいイヤリングを買ってきてくれたこともありました。」とあった（吉田美

保子, 2002, p.20)。その他に「おしゃれ」という単語を『ともし火』の文章ファイルで検索した所、吉田は自室に大きな鏡を置いて、そこに映った自身を見てから美容室に通うようになったという一文も見られた。吉田は鏡を見た時、病気の影響で以前の自分とは違うことにため息をついた。しかし、吉田はそのことに悲観せず、自分の気に入る部分を見出した。著書には、「でも、“もう”ではなく“まだ”三十四歳ではないか……しかも独身。」「いい鏡は、自分の姿を映したとき、きれいに見えるものですし、時々、外見をかまって、外に出かけるのもいいことです。」「また誰にでも、自分の容姿の中で一カ所は、とても美しいと感じるところがあるはずです。その部分を自分で心からほめたたえ、強調するようにしていくのも、一つのテクニックだと思います。」（吉田, 2002, p.58-59）とあった。

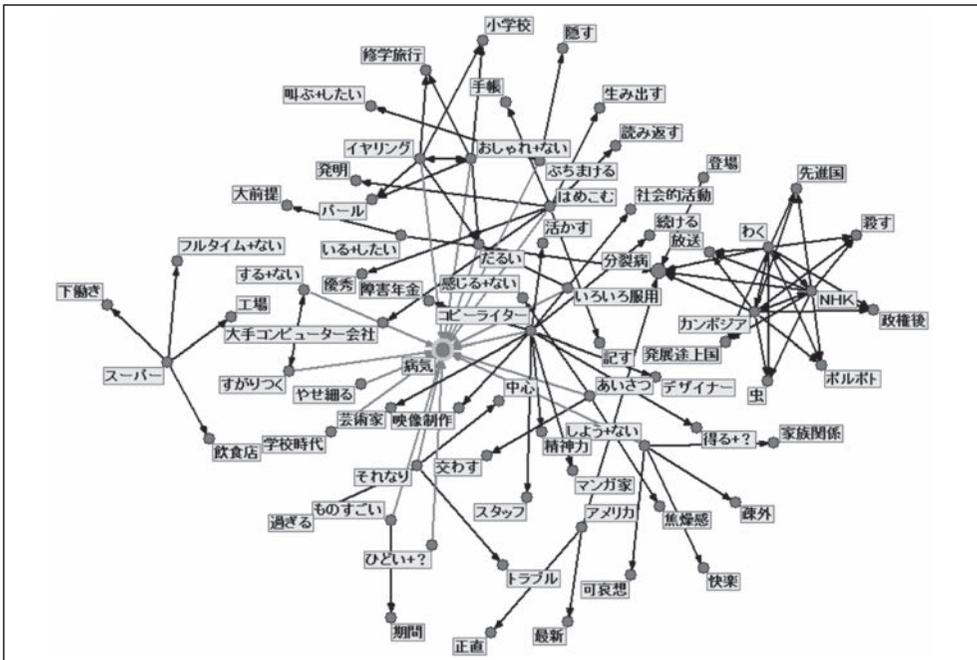


図3 吉田美保子 (2002) 『ともし火』の注目語情報のネットワーク図

5. 対応バブル分析

対応バブル分析では、1章から3章と単語や表現の関係性を分析する。著書の中で用いられる単語や表現がどの属性に近いのかを示したものが図4である。対応バブル分析を行うことで、1章、2章、3章で使われる単語を明らかにし、章ごとの話題を見出す。図4を見ると、第1章は「症状」、「発病」、「入院」が近接しており、第2章は「病気」、「分裂病」、「薬」、「家」が近接しており、第3章は「母」、「強い」、「生きる」が近接していた。これらからは、第1章では病気の発病と入院について語られ、第2章では実家での闘病生活について語られ、第3章では生き方について語られていることが分かる。また、第2章、第3章に「人間」と「人」が近接していることから、著書の中では病気について人間についても多く語られていることが分かる。第3章で生き方について語られることから、ポジティブな様子が見られる。

6. 八木剛平の著書から見るテーマ分析

八木（2009）は全15章の内、第1章「予兆」から第14章「現状—病気との共生」について闘病記の分析をしているので、本論文でもこの各テーマに沿って吉田（2002）『ともし火』を分析した。今回の研究では発病から回復までを取り上げたため、14章の内、1章「予兆」から10章「回復までの道のり」までを抽出して分析を行った。

(1) 予兆

八木（2009）では、統合失調症が発症する前兆を示す。統合失調症を発症した人は、それ以前にさまざまな出来事や言動などがあり、ネガティブな考えや不安を抱いている。

吉田は思春期の頃に拒食症になった。それは思春期の女性に起きる体型の変化に嫌悪感を抱いていたからである。著書には、「もし、今十代に戻してあげると言われても、私は「いいえ結構です」と言うでしょう。」と述べて

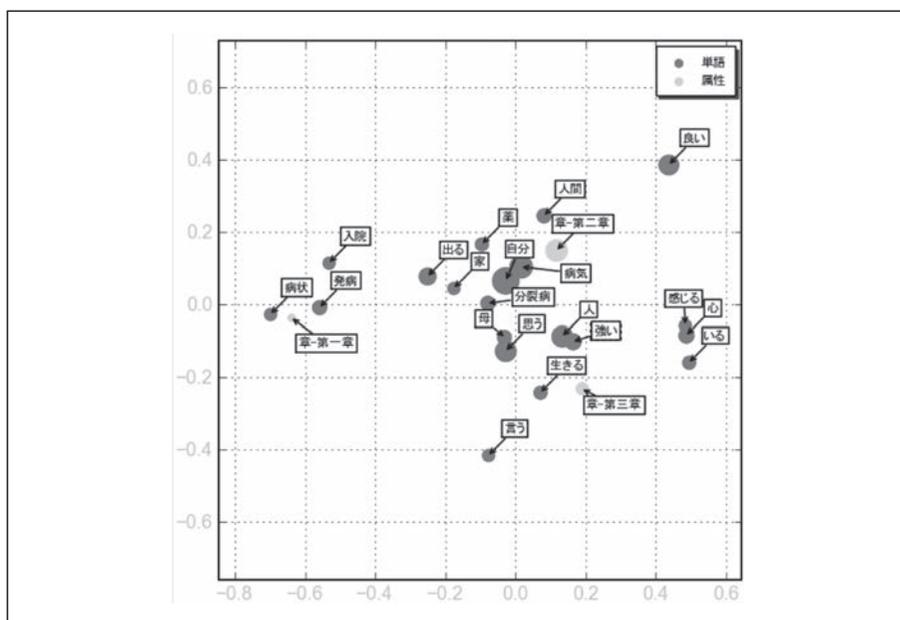


図4 吉田美保子（2002）『ともし火』の対応バブル分析図

いる（吉田美保子，2002，p.98）。

(2) 発病

八木（2009）では、統合失調症の発症と状態を示す。統合失調症を発病すると、妄想や幻覚、幻聴にとらわれ、健常者には分からない苦痛に襲われる。例を挙げると、誰かに24時間監視されている、組織に狙われているなどである。それによって、家族や友人、恋人を疑うようになる。

吉田は26歳の時に突然精神病を発症した。部屋に1人でいた時に幻視、幻聴、体感幻覚、幻臭に襲われた。部屋の中をめちゃくちゃにし、食事も取らずに1日中布団の中で震えて過ごした。彼女の身内に精神病患者がいなかったため知識がなかったこと、発病直前まで毎日読んでいたというSF漫画の影響が重なって、自分が進化した人種、超能力者、神に近い存在となったと考えた。発症後、彼女は幻聴や幻覚に振り回され、親や弟妹、友人に感情を爆発しそうになるまたは爆発することがあった。発症して半年ぐらいの時に「友人はNASAのスパイだ」という幻聴があり、電話で友人に対して暴言を言ったことがあった。また、2回目の入院中、病院の公衆電話から実家にいる妹に暴言を言ったこともあった。吉田の家庭は、17歳と12歳の就学中の妹と病気を持った著者を抱えて、父親が1人で家族を養い、母親は家事を行うという状況であった。著者は金のことが気になり、実現が困難な稼ぎ方を電話口で下の妹にまくし立てていた。最後には父親が妹に電話を切るようにと言い、電話を切ったところ、筆者はカッとなって再度電話をかけて、留守電で暴言を残した。そして、発症から6年経って筆者が

32歳の頃に、父親に激しい言葉をぶつけた。筆者が風呂に入っていた時、手が勝手に動き出したことに苛立ちを感じ、怒鳴り声をあげた。それを聞いた父親は静かにするようにといい、筆者が風呂から出た後に父親は再度、風呂場で騒ぐなと言った。それに対して筆者は手が勝手に動いたと言い返して部屋に戻ろうとすると、父親は待つようにと言った。父親は筆者に入院して治せと言いい、筆者は入院の辛さは父親にはわからないと怖い顔をして叫んだ。怖い顔をしたことを父親に指摘された時、筆者は自分の顔つきが狂人の顔になっていると指摘されたと感じた。それ以降は、父親と会話をするのがほとんどなくなった。風呂場で手が勝手に動いたのは妄想であったが、当時の筆者の手帳には、家の近所にある大手のコンピュータ会社が病気を生み出す機械を作り、それが原因であると記していた。通院先の医師もこのような説明を真顔で話した。発病後、実家に連れ戻されて病院で診察を受けたある日、父親は筆者に何を考えているのかと尋ねた。筆者は「ヒトラーとドイツ軍が潜水艦で世界中の海底を調べていて、それが終わって地上に戻ったら、私も元に戻る」などと真剣に答えると、父親は涙ぐんで病院に行こうと言った（吉田美保子，2002，p.24）。病状がづらいことから、酒を飲み、タバコを吸っていた。その他に、薬を服用する際に「薬は毒だ」という幻聴が聞こえ、飲もうとしなかったことや「きみはブロードウェイのミュージカルスターである」と囁かれ、病院で踊りだしたことが闘病生活中にあった。

(3) 入院

八木(2009)では、入院後の精神病院で行われた対応や治療のことを示す。精神病院には、保護室という部屋が存在する。この部屋には、症状が重いと判断された患者が入られる。

吉田は入院の際に保護室に入ったという描写は見られなかったが、勝手にタバコを吸ったことで保護室に入れられた描写は見られた。吉田は14年間の内、4回入院した。発病して7年の間に3回、それぞれ6ヶ月入院したが、ひどい状態であったと著書に記されていた。7年目以降は病気が小康状態になり、37歳の時に3ヶ月入院したことを最後に、現在は薬物療法を続けている。現在、症状はたまに幻聴と幻覚が現れる程度であり、疲れすぎると症状が重くなることがある。しかし、そのようなことは稀であり、食事と睡眠を取ることですぐに収まると記されていた。

(4) 寛解

八木(2009)では、統合失調症の症状が落ち着いて安定に向かった状態のことを示す。寛解はあくまで症状が安定したことであって、病気が完治したことではない。寛解に至るには薬の効力、病院の質、家族の協力などが関係している。

吉田は薬の服用の他に、会話をする、嗜好品や食事、おしゃれ、睡眠を楽しむ、動物を飼う、音楽を聞く、病院を変える、医師から励まされる、生活リズムを整える、自分を大切にするなど寛解に至らせたと考えられる。吉田の著書には、闘病生活を経て悟った、病気を良くする方法が記されていた。例えば、一般的にはタバコを吸うことは良くないとさ

れるが、当事者は幻覚などのストレスからタバコを欲するため、大目に見る必要性を述べていた。

(5) 精神病院という「異世界」

八木(2009)では、約1950年代から90年代ごろの精神病院で行われていた患者の待遇のことを示す。病院では、看護師たちが患者を下の名前で呼ぶことや時には患者を罵倒する言動などがあった。また、病棟の窓には鉄格子がはめられ、あらゆる扉に鍵がかけられていた。このことから病院を「刑務所」や「独房」と感じる患者がいた。

吉田は、4回目の入院は以前に通院していた病院を変えて、別の大学病院に入院していた。当時、吉田はガリガリに痩せていて、衰弱した状態であった。入院して2日目に、看護師に連れられて検査室に向かった。検査室には20代の検査技師が2人いて、吉田を連れて看護師は職務に戻るためその場を去った。検査技師は吉田に胸部のレントゲンを撮るために薄いタンクトップを取るようと言った。薬の効果から意識が朦朧としていた吉田は、金具がついたブラジャーではないのにと疑問を抱きつつ、上半身裸になった。その時、吉田は自分がズボンも脱いでいたことに気づいた。そして、もう1人の検査技師はパンティーも脱ぐようと言った。驚いた吉田は検査技師たちに反論して、服を着たあとに看護師と主治医に訴えた。しかし、謝罪の言葉はなかった。その後すぐに、最上階の開放病棟に移ったが、喫煙室の窓からはパンティーを脱ぐようと言った検査技師が毎日見えた。後にその検査技師はコネで働いていて評判の悪い人物であることが分かった。その検

査技師に対して、吉田は激しい怒りを抱いていた。著書には、「ばかにしやがって！病気前の私なら、学生時代、卓球で全国大会に二度出たこの運動神経と体力で、グチャグチャになるまでなぐり、けり倒してやったのに」と述べている。その病院の主治医や看護師はとても素晴らしかったため、検査技師の一件はこれまで公にしなかったと述べていた。また、この他にも大学病院などの看護師を置かない診察室の中で、主治医に性的ないやがらせを受けたことがあると記されていた。

(6) 「開放」からの退院

八木（2009）では、患者たちが開放病棟に移動し、退院後の喜びと今後の生き方を示す。開放病棟では、他の患者と接することや一時的な外出などが許可されている。また、開放病棟への移動は症状が以前より良くなり、退院に近づいていることを意味している。その時、自分と今後について考えることになる。

吉田には開放病棟から退院した際の心境は語られていなかった。吉田の著書では、自宅での闘病がメインで語られており、病院での治療や生活の語りは少なかった。

(7) 就労、居住、結婚、出産をめぐる

八木（2009）では、退院後、元患者の就労などや当事者への社会と人間の対応について示す。精神病や発症した人に対して偏見などを抱く人は存在する。精神病への偏見から当事者に対して攻撃的な発言や忌避する態度を表す人がいる。これが元患者の就労などに対して大きな影響を与えるだろう。

吉田は10年以上付き合った男性と結婚した。夫とは何でも話せる仲であり、夫は妻を

サポートしている。夫は吉田に対して、「一＋一＝二じゃなく、三にも四にもなれるんだ」と言った（吉田，2002，p.105）。また吉田の両親も彼女と子どもたちのために働いている。そして、吉田は「同様に私も家庭で最も責任のある妻として生きていくんだと、夫を助け、これからは笑いのある生活を送っていきたいと思っています。」と述べている（吉田，2002，p.106）。

(8) 烙印

八木（2009）では、精神病の発病によって患者が感じるレッテルや生き恥を示す。「烙印」は、スチグマ（拭いがたい汚名）とも呼ばれ、無知や偏見、差別の問題である（八木剛平，2009，p.91）。スチグマには3つあり、1つ目は当事者に対する偏見、2つ目は当事者自身が感じる生き恥や汚点、3つ目は当事者に対する社会の差別的待遇である。

吉田の著書にはスチグマに関する記述が見られなかった。吉田は自身の病気がなかなか治らないこと、将来への不安などから「四人姉妹の中で自分は自然淘汰である」と酔った勢いで父親に言った。しかし、著書の中で吉田は、どんなに弱い人間でも必要な存在になることを意識して、幸福になろうとする欲を持つことが生きる力であると述べている。

(9) 病気の辛さ、苦しさ、恐ろしさ

八木（2009）では、統合失調症の苦痛による患者の心境の変化のことを示す。統合失調症の幻聴や幻覚、幻味は患者の心境に否定的な影響を与えることから、患者は自殺の衝動に駆られることがある。

吉田は飛び降りろという幻聴があったと著

書に記されていた。吉田の場合は、2階の病室のベランダから飛び降りることで足の骨を折り、入院しなくて済むと声が聞こえた。吉田は下の方をしばらく見て、骨折では済まないと思い、幻聴を振りきった。この内容は、八木の著書の「病気の辛さ、苦しさ、恐ろしさ」でも引用されている。

(10) 回復への道のり

八木(2009)では、統合失調症からの回復のプロセスを示す。病気から回復する過程としては、薬物や自然治癒、ひきこもりなど様々なものが挙げられる。

吉田は頭で考えたことを口に出すことは良いことだと述べている。最初は母親にはラジオをつけていると言いついたが、後に独り言であることが知られた。そこで、吉田は頭で思いついたことを整理して自分で分かるように口述することでストレスを解消していると母親に説明した。母親も納得して夜遅くならず、大声を出さないことを約束させ、吉田の行動に理解を示した。また、吉田は著書で「病状の中で悪意とも思われる部分を取り除いた残りの病状は、今一生懸命に生きている私への応援のように受け止めています。」と記している(吉田, 2002, p.115)。これらの内容は八木の著書の「回復への道のり」でも引用されている。

■ 考察

1. 『ともし火一心の回復—』におけるポジティブ思考

今回の分析によって、統合失調症の当事者である著者が記した闘病記からはポジティブな考え方が明らかにされた。闘病記の中にあ

るポジティブな考えの存在は、単語頻度分析と対応バブル分析によって明らかにした。単語頻度分析では「良い」という単語が上位に入り、対応バブル分析では第3章で「生きる」ことについて語られていた。統合失調症を発症したとしても絶望せず、前向きに生きることを示唆していると考えられる。そして、前向きに考えて生きることが病気からの回復を促すだろう。統合失調症は精神病であり、一般的にはネガティブなものとされている。しかし、これらの分析からも分かる通り、統合失調症にはネガティブな面ばかりではなく、ポジティブな面も存在している。精神病のポジティブな面を探ることが、病気との共存を成功させているのだろう。

2. 八木(2009) および斉藤(2013)の先行研究との比較

八木(2009)の研究と比較して、「ともし火」にはポジティブな記述が多かったことが明らかとなった。八木の著書を用いたテーマ分析からは、吉田は病気に理解を示す男性と付き合い、結婚したことで、夫をサポートしながら笑いのある生活を送りたいこと、悪意を取り除いた残りの症状は自分への応援のように受け止めていることが見られた。これにより、吉田が統合失調症に対してポジティブな対応をすることは、病気との共存のために必要であると分かった。

斉藤(2013)の研究と比較すると、吉田も闘病生活を経たことでポジティブな変化をしたことが明らかとなった。斉藤の研究で用いられた『ビューティフル・マインド』の分析からは、伝記の主人公が闘病生活を経て、傲慢であった性格から他者に思いやる性格に変

化したというポジティブな結果が得られた。今回の研究で用いられた『ともし火』の分析からは、吉田が病気と共存しようとするポジティブな結果が得られた。当事者が統合失調症との闘病生活を経験することで、ポジティブな変化をすることが分かった。

3. 本研究の意義：統合失調症を持っていてもポジティブに生きられる

統合失調症をポジティブに捉えることで、当事者たちが絶望せずに生きようとする力になるだろう。統合失調症は完治が難しく、健常者では分からない苦痛が存在する。しかし、苦しい闘病生活を経たことで、当事者の心がポジティブな変化をすることがある。この可能性を信じて、前向きに生きようとすることで、統合失調症と共存することができるだろう。本研究はその手助けになると考えられる。

4. 本研究の限界：闘病記と実生活のギャップ

今回の研究では、闘病記のポジティブな面を主に取り上げ、ネガティブな面をあまり取り上げられなかったことから、闘病生活の全体に触れることができなかった。統合失調症の闘病生活においては、病気の症状による苦痛だけではなく、他者の無理解や偏見による苦痛も伴う。それらを乗り越えたとしても、生きづらさを感じる当事者は存在するだろう。しかし、今回の分析によって、苦痛を乗り越えたことでポジティブな考え方を抱いて、これから生きていこうとする当事者が存在することを明らかにした。また、自身の闘病生活から得た病気に対する向き合い方を発信することで、病気に苦しむ当事者たちを支援する動きが明らかにされた。

■ 第2章 心的外傷後成長 (PTG)、 援助者セラピー原則 (HTP) と闘病記の関連

心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth以下PTG) とは、危機的な出来事や困難な経験と向き合った際、精神的なものがき闘いの結果で生じるポジティブな心理的変容の体験であると定義されている。また、これに加えて、「固定的な結果のみだけではなく、プロセス全体を含む」とされている (宅, 2013)。人は誰もが様々な価値観を持っている。そのような当たり前の価値観のことを「基本的世界観 (Assumptive World)」と呼び、「自分自身や世間について、自分が信じていることを中核的信念 (Core Belief)」と呼ばれている (宅, 2014)。宅によると、客観的に見ると大きな出来事ではないことでも、主観的には大きな出来事であり、基本的世界観と中核的信念が揺さぶられることがある。それらが揺さぶられて、崩れ去った後に、その崩れ去ったものを新たに作りなおすプロセスに入る。このプロセスがPTGと呼ばれる。また、PTGはストレスフルな体験から生成された変化に対する意味づけを指している。堀田, 杉江 (2012) によると、ストレスフルな体験から生成された意味に関する研究では、研究ごとに生成された意味を示すものが異なる場合が多くあったことから、意味を体系的かつ実証的に研究できるように概念化されたものが、PTGであると述べている。Lieblich (2015) は、「心的外傷 (トラウマ) という用語は、命を脅かすようなネガティブな出来事と、それに対する反応の両方を指すと定義されてきた。」と

述べている。トラウマは、ネガティブなものであると捉えられる。しかし、トラウマを乗り越えたことで、ポジティブな変化をするケースが闘病記からは見られた。Lieblich (2015) によると、「テデスキとカルフーンは、トラウマに関する言説をPTSD（心的外傷後ストレス障害）からPTG（心的外傷後成長）へと変化させた研究者である。」「テデスキとカルフーンや他の学者たちは、トラウマがそうした結果とは異なる結果をもたらす可能性もあると主張した。」と記されている。また、トラウマを乗り越えたことから「社会における自分の立場だけでなく、自分自身の自尊心や自己イメージを恒久的に変えてしまうこともあるだろう。別の言葉で言えば、トラウマの犠牲者は、逆境を乗り越えた結果として、何らかの成長を体験することもあるだろう。」とも記されている。

援助者セラピー原則（Helper therapy principle：以下HTP）とは、Riessmanが1965年に提唱した、人が他者を援助することによって、最も援助を受けることである。他者を援助することで、援助をする自身も援助される（井上, 2015）。Lewis他（伊藤・石原訳, 2006）によると、「Skovholtは、援助を受けることに利点はあるが、援助を与えることはそれ以上に利点がある」と記している。他者の援助をする人は、「他者の生活に影響を与えることで、対人関係能力のレベルが上昇したと感じる。」「他者との間で、与え受けることによって平等の感覚を持つ。」「他者を援助することにより自分も貴重な学習をする。」「援助した人々から社会的な承認を受ける。（p.62）」とされている（Lewis他, 伊藤・石原訳, 2006）。そして、Ganer & Riessman

はこれら4つに加えて、「援助する人はより自立的になる。」「似た問題を抱える人の援助をすることで、距離を置いて自分の問題を考えることができる。」「援助の役割を持つことにより、社会的有用性の感覚が得られる。（p.20）」を述べている（Lewis他, 伊藤・石原訳, 2006）。

闘病記は、PTGとHTPの双方に関連していると考えられる。精神病との闘病生活によって、『ともし火』の吉田美保子は「どんなに弱い人間でも必要な存在になることを意識して、幸福になろうとする欲を持つことが生きる力である」と述べているように、ポジティブな気付きをした。これは、精神病との闘病の末に生じたPTGであると見られる。闘病記をテキストマイニング分析することにより、当事者の語りからPTGを見出す。いとう（2015）には、東日本大震災の被災者の語りを分析する際、「質的な方法で、被災者の語りを分析することにより、「探求の語り」がPTGにつながっていく可能性を論じている。」と記されている。そして、自身の体験を闘病記として出版することで、他の当事者を支援していると見ることができる。闘病記の出版によって他者に影響を与えて、支援した他者から社会的な承認を得られることから、闘病記の出版はHTPに当てはまると考えられる。

■ 第3章 浦河べてるの家の 当事者たちによる活動

浦河べてるの家では、毎年夏に統合失調症の当事者たちによる「べてるまつり」を開催しており、私はそのイベントに参加して当事

者たちの活動を見学した。イベントの内容は、「幻覚妄想大会」などといった、当事者が中心となっているものである。交流会では、べての家のメンバーが「当事者研究」の歌を披露し、当事者たちと参加者たちが一緒になって場は大いに盛り上がった。私はこのイベントに参加するまでは、統合失調症の当事者との交流はなかった。統合失調症の当事者については、闘病記を読み、映像資料を見たことからのイメージしかなかった。そのイメージとは、当事者は統合失調症の症状に悩み苦しんでいるというものであった。しかし、イベントに参加して当事者たちと交流すると、イメージとは異なり驚かされた。統合失調症の当事者であるメンバーたちは皆明るく、伸び伸びとした雰囲気であったからだ。自身の症状と向き合い、ある時には仲間の力を借り、またある時には仲間を助けることによって、このような明るく伸び伸びとした雰囲気を生み出すことができるのだろう。自身の幻聴や幻覚などを研究して仲間とともに解決の道を探る「当事者研究」によって生み出される変化はPTG、他のメンバーを助けることで自分も援助を受けることはHTPに該当すると考えられるだろう。

■ 終章 本研究全体のまとめと今後の課題

1. 本研究の意義：統合失調症を乗り越えたことでの成長

統合失調症は当事者を変化させるきっかけを抱えていることが考えられる。この病気は当事者の人生を狂わせ、周囲の人たちや対人関係にネガティブな影響を与えるとされている。当事者と家族、親しい人たちは苦しみ、

将来に希望を抱くことが難しくなる。しかし、統合失調症を発症しても、必ずしも絶望するばかりではないことが明らかとなった。本研究によって、闘病生活を乗り越えたことで当事者自身が成長すること、病気に対して前向きな気持で向き合うことで病気と共生することができると考えられるだろう。

2. 今後の課題

今後の研究では、女性の闘病記をより多く取り扱って男女間の比較、当事者の闘病生活による家族や知人の変化を明らかにしたいと考えている。本研究で取り扱った闘病記は、当事者の男女比が男性よりに偏ったことにより、病気に対しての男性の考え方と女性の考え方が比較できなかった。また、統合失調症の当事者に焦点を当てたため、家族や友人などの見方や変化などを取り上げることができなかった。しかし、統合失調症には当事者を成長させるきっかけ、前向きに考えることで統合失調症の症状を良くすることが本研究で明らかとなった。これらに加えて、男女間の違い、家族や友人の変化や影響を分析することで、また別の側面が明らかになるだろう。

謝辞

本論文の土台となった、テキストマイニングによる研究において、学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、「Text Mining Studio」を使用させて頂きましたNTTデータ数理システム様に感謝いたします。また、本論文を作成するにあたり、指導教官の伊藤武彦教授から丁寧かつ熱心なご指導を賜りましたことに感謝いたします。

■文献

- 服部兼敏 (2010) 『テキストマイニングで広がる看護の世界』 ナカニシヤ出版
- 八木剛平 (2009) 『手記から学ぶ統合失調症』 金原出版
- 吉田美保子 (2002) 『ともし火：こころの回復』 文芸社
- 井上孝代 (監訳) 伊藤武彦・石原静子 (訳) (2006) 『コミュニティカウニング：福祉・教育・医療のための新しいパラダイム』 ブレーン出版 (Lewis, J. A., Lewis, M. D., Daniels, J. A., & D'Andrea, M. J. (2003). *Community counseling: Empowerment strategies for a diverse society (3rd ed.)*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.)
- Liebllich, A (いとうたけひこ・山崎和佳子 訳) (2015) 「心的外傷後成長 (PTG) 研究におけるナラティブ・アプローチ：苦勞体験学 (Suffering Experience Research) に向けて」『東西南北2015：和光大学総合文化研究所年報』
- いとうたけひこ (2015) 「テキストマイニングによる被災体験学 (Disaster Experience Research) への混合研究法アプローチ：死に関する表現と心的外傷後成長 (PTG)」『東西南北2015：和光大学総合文化研究所年報』
- 井上孝代 (2015) 「東北被災者における援助体験学 (Helper experience research)：援助者セラピー原則 (Helper therapy principle: HTP) に着目して」『東西南北2015：和光大学総合文化研究所年報』
- 岡崎祐士 (2013) 「統合失調症の過去・現在・未来」福田正人・糸川昌成・村井俊哉・笠井清登 (編) 『統合失調症』 医学書院 pp.3-7
- 向谷地生良 (2013) 「当事者研究」福田正人・糸川昌成・村井俊哉・笠井清登 (編) 『統合失調症』 医学書院 pp.613-625
- 福田正人 (2013) 「統合失調症の基礎知識・診断と治療についての説明用資料」福田正人・糸川昌成・村井俊哉・笠井清登 (編) 『統合失調症』 医学書院 pp.25-36
- 中原さとみ・飯野雄治・甲田烈・尾崎真奈美 (2012). 「Posttraumatic Growth：痛みを伴った成長として」『ポジティブ心理学再考』 尾崎真奈美 (編) ナカニシヤ出版 pp.31-47
- 宅香菜子 (2014) 『悲しみから人が成長するとき：PTG』 風間書房
- 堀田亮・杉江征 (2012). 「ストレスフルな体験の意味づけに関連する研究の動向」『筑波大学心理研究』 44, 113-122.
- 門林道子 (2000) 「闘病記と死」河野友信・平山正実 (編) 『臨床死生学事典』 日本評論社 pp.14-15.
- 門林道子 (2011) 『生きる力の源に：がん闘病記の社会学』 青梅社
- 春日武彦 (2008) 『よくわかる最新医学新板 統合失調症』 主婦の友社出版
- 糸川昌成 (2013) 『統合失調症からの回復を早める本』 法研
- 糸川昌成 (2013) 『臨床家がなぜ研究をするのか：精神医が20年の研究の足跡を振り返るとき』 星和書店
- 糸川昌成 (2014) 『統合失調症が秘密の扉をあけるまで』 星和書店
- 野中猛 (2011) 『図解 リカバリー』 中央法規出版

- 職場のメンタルヘルス対策 メンタルヘルス対策支援者のための基礎知識— [ストレスケア・コム]
<http://www.stresscare.com/info/mhfw02.html> (2014年10月22日取得)
- 統合失調症ナビ
<http://www.mental-navi.net/togoshicchosho/rikai/shojo.html> (2014年11月25日取得)
- 小平朋江・いとうたけひこ (2012). 「統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する」『心理科学』 33 (2), 64-77.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2014). 「統合失調症の闘病記における回復の語りのテキストマイニング：ナラティブ教材としての教育的意義」『日本看護学教育学会第24回学術集会講演集』 224.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2014). 「精神障害者の回復の語り：浦河べてるの家における当事者研究の記述のテキストマイニング」『日本心理学会第78回大会論文集』 p.305.
- 斉藤裕也 (2013). 『ある数学者の精神病との闘い』 株式会社NTTデータ数理システム 学生研究奨励賞
http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu13contents/stu13_saito.pdf (2015年2月1日取得)
- 斉藤裕也 (2014). 『ある女性の闘病生活から得たポジティブ思考』 株式会社NTTデータ数理システム 学生研究奨励賞
http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu14contents/muc14_tms_saito.pdf (2015年2月1日取得)
- 横澤直文 (2013). 「統合失調症者に対する

臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー」井上孝代 (編) 『臨床心理士・カウンセラーによるアドボカシー：生徒、エイズ、嗚咽・精神障害者、性的・民族的マイノリティ、レイプ・DV被害児 (著) の声を聴く』 風間書房pp.173-194.

指導教員のコメント

伊藤 武彦（現代人間学部）

斉藤裕也君は、東京都の出身で、ちょうど2011年3月の東日本大震災の直後に和光大学現代人間学部心理教育学科に入学して、縁あって私のプロゼミに参加した。その入学の頃からプロゼミなどを通して精神医療に興味をもったようで、3年生から私のゼミに入り、ポジティブ心理学や東北被災者の声の学習をしてきた。また、3年生と4年生の時、数理システム社（現、(株)NTTデータ数理システム）の学生研究奨励賞に応募し、佳作入選し、斉藤（2013, 2014）としてWeb上に作品が紹介されている。

本論文の一部すなわち、『ともし火』のテキストマイニングの章は、斉藤（2014）として既に公開されている。本論文では、その後、心的外傷後成長（PTG）と援助者セラピー原則（HTP）の観点、さらには浦河べてる家の当事者研究を踏まえた考察をおこない、闘病記におけるポジティブな側面についてまとめている。

実は、統合失調症をもつ人たちの場合、なにもをもって「回復」したかということは、まだ決定的な理論が無いのが現状である。このような理論的状况の中で、闘病記に学ぶことには大きなヒントがある。闘病記を書くまでに至るそれぞれの著者の生き方の道筋がそこに具体的に省察を持って現れている場合が多いからである。今回、斉藤君が取り上げた、『と

もし火』の著者も、病気が治らないままではあり、再発の恐怖もかかえながら、ポジティブな家族生活と内面の尊厳を保ちながら執筆していることがよく推察される。自分の苦勞の経験をふまえての積極的生き方の記述や、現在進行形で苦しんでいる患者や家族に対する提言も、まさにPTGとHTPを表現している文章と言える。

このような闘病記を発見し、また、テキストマイニングと原文の参照によるテーマ分析により、そのポジティブな内容を明らかにした斉藤論文の成果は大きい。細かい点で改善すべき内容がないわけではないが、意欲的な論文として評価したい。なお、本論文と斉藤（2013）の成果を統合した斉藤君の卒業論文『闘病記に見る精神病からの回復と成長』は、心理教育学科から授けられる2014年度林真一郎賞の受賞作品であったことも付記しておきたい。斉藤君の今後の発展とますますの活躍を期待している。

【文献】

斉藤裕也（2013）ある数学者の精神病との闘い 2013度 VMStudio & TMStudio 学生研究奨励賞 結果発表

http://www.msi.co.jp/tmstudio/stul3contents/stul3_saito.pdf

（2015年2月12日取得）

齊藤裕也（2014）ある女性の闘病生活から得たポジティブ思考 2014度 VMStudio & TMStudio 学生研究奨励賞 結果発表
http://www.msi.co.jp/tmstudio/stu14contents/muc14_tms_saito.pdf
(2015年2月12日取得)

フィンランドにおけるファミリーセラピストとはなにか — Open Dialogueを手がかりにして

11P053 松田 青那

■第一章 はじめに

■1-1. 本研究の背景と目的

突然だが、筆者は「抑うつ状態」の経験者である。後述する理由により、あえて「うつ病」とは表現しない。大学三年生の春、新学期がはじまったころ、食欲不振や睡眠障害が出現し、悪夢にうなされる日々が続いた。はじめての経験だった。教科書をめくると、それは典型的な急性期のうつ病の症状であるという。食欲と睡眠欲を一度に失い困った筆者は、大学の近くに最近できた精神科クリニックに駆け込んだ。いまの自分自身の状態を考えると「見守り」が必要だと思ったからである。クリニックの扉を開け、一通りの経過を説明すると、そこにいたセラピスト（精神科医）は、時おり質問をはさみながらもただただ人間として対等に話を聴いてくれた。「うつ病かもしれないけど、いまは診断しない」とも言った。これによって、筆者は「うつ病」にならずに済んだ。

そんな日々がしばらく続いたが、あるとき、ひとりで寝込み続けることが怖くなった筆者は「入院させてほしい」とセラピストに訴えた。週に一度、クリニックにいる数十分はいいのだが、それ以外の時間に客観的な視点が

ないことが怖くなったからだ。セラピストは「しばらく、毎日夕方に来て。話をしよう」と言った。「入院を避けるためには、落ち着くまで短期的なスパンで会い続けることもある」という。筆者は翌日から、おぼつかない足取りで大学に行き、夕方にはクリニックに通い続けた。おぼつかない足取りでも大学に行けたのは、夕方の「話し合い」があったからである。こうした日常を繰り返すうちに、回復することができた。

この、筆者自身の経験から感じ、推測することは、そのときの「状態」についてともに語り合い、評価せず、ゴールを決めずにただ見守ってくれるセラピストは、人生のクライシスにおいて重要だということである。そして、クライシスはだれにでも起こりうる短期的なスパンで会い、見守りつづけてくれるひとがいれば、クライシスにおいても入院せずに自宅などで暮らせる可能性が高いのではないか。やさしく見守ってくれる「時間薬」と、寄り添ってくれる「人薬」があれば、服薬も最低限で済むのではないだろうか。

上述したような筆者が享受したようなケアは、『システム』としては存在しないのだろうかと気になり、調べてみると、フィンランドのラップランドという地域で似たようなケ

アがシステム化され、しかも大きな効果をあげていると知った。「オープンダイアログ」、直訳すると「開かれた対話」というプログラムであった。フィンランドのファミリーセラピスト（家族療法家）たちがつくった、精神科の急性期に対応するプログラムであるという。筆者の支えられた方法論に似ているオープンダイアログについて深く知りたいと思ったことが、本研究をはじめるといったきっかけである。

詳細は後述するが、オープンダイアログのなかにいるファミリーセラピスト（心理士）は、多職種との連携を行いながらも地域のなかで「関係性」を構築、維持しつづける。セラピストとクライアントという関係性以前に、まずは人間同士の対等な関係性において語り合いを行う。こういった哲学に基づくアプローチは、フィンランドだけでなく日本においても必要なのではないだろうか。よって本研究では、フィンランドのファミリーセラピストがどのような哲学をもってケアを行っているのか考察し、日本においての応用について検討することを目的とする。

■1-2. 本研究の構成

本論文は全四章からなる。第一章では、本研究の背景や目的、構成、方法を提示する。第二章では、オープンダイアログについての解説、フィンランドと日本のファミリーセラピストの違いを明らかにして整理する。第三章では、オープンダイアログが日本にもたらず新たなケアの可能性について、オープンダイアログと共通する哲学をもつと考えられる「べてるの家」との比較から検討する。

■1-3. 本研究の方法

文献研究に加え、べてるの家でのフィールドワークを行った。

■第二章 オープンダイアログ —家族療法との関係性

■2-1. オープンダイアログとはなにか

オープンダイアログとは、フィンランドの西ラップランド地方に位置するケロプダス病院の治療チームによって行われている、おもに統合失調症への治療的介入の手法である。向精神病薬の使用を極力控えたにもかかわらず、二年間の予後調査で初発患者の82%の症状を、再発がないか、ごく軽微なものに抑えるなど、目覚ましい効果が得られていると報告されている（精神看護, 2014）。日本における実践はまだないが、新たなコミュニティケアの試みとして注目されているアプローチである。

斎藤（2014）によると、手法そのものは、きわめてシンプルであるという。セラピストは複数の専門家（多領域にわたることが望ましい）からなるチームを作り、クライアントに即座に会いに行く。OPD（筆者注：オープンダイアログ）のミーティングはしばしばクライアントの自宅で行われる。全員が一つの部屋に車座になって座り、やりとりが開始される。そこでなされることは、まさに「開かれた対話」である。このミーティングは、危機が解消するまで毎日続けられる。基本的にはたったこれだけで重篤な統合失調症が回復し、再発率も薬物療法の場合よりはるかに低く抑えられるのだという。フィンランドではこのサービスは無料で提供されるが、治療

費自体も伝統的な精神科治療より安価であるという（斎藤，2014）。また、オープンダイアログは統合失調症への救急対応であるが、本来は普遍的であるとも指摘されている（seikkula, 2003）。

以下は、オープンダイアログの特徴を、オープンダイアログを大きく紹介した雑誌『精神看護』の特集記事（斎藤，2014）を参考に、筆者が再構成したものである。

・オープンダイアログの特徴

- a) 言語とコミュニケーションが社会的現実を最初に構成するという考え方（バフチン）。
- b) 危機においては症状が言語的装いのもとで表され、新たな物語が生成する機会となる。
- c) 対話式討論法（dialogism）は、傾聴と理解が共進化する過程である。
- d) 最初の質問は、家族や関係者の発言の機会を最大にするように、可能な限り開かれたものでなければならない。
- e) そのためには、前もってテーマは決めない。
- f) 初めから対話を可能にすべく、インタビュアーは患者の発言に問いかけの形で答える。
- g) オープンダイアログは、あらかじめ目的を設定しないで開始される。
- h) 家族療法のように、家族力動を見い出したり、家族への介入を目指すものではない。
- i) 病的体験から新たな言語が生成してくるような対話を生み出すことが目的。
- j) そのためにはグループ内で歴史の共有が必要。
- k) 参加者のそれぞれが、最も切実な体験に言葉を与えることから開始される。
- l) 患者さんにとっては幻聴などがこれに当たる。
- m) 対話においては現実を志向する必要はない。
- n) すなわち「幻聴は病気のせいだ」などと言うべきではない。
- o) 病的な発言に関心を示しつつ会話を生成する。
- p) ほかの出席者も、患者の発言を理解できたかどうか尋ねられる。
- q) こうやってメンバー全員の間で、病的であろうとなかろうと、どんな発言も重要であるという雰囲気が共有される。
- r) こうした対話を通じて、患者もその家族も、修復的で復元的な新しい物語を構築するプロセスに参加することになる。
- s) 病的な発話が出現したときは、ちょっとブレイクして、そうした発話にも場所を与えたほうがよい。全体のいろいろな声が響きあうなかの1つの声として、クライエントの声を対話の中で響かせるようにする。

以下は、Seikkula（1995）による、オープンダイアログの哲学と手法の説明である（青柳（2014）訳）。

- ①即時に手助けをすること
- ②ソーシャル・ネットワークの観点からものごとをみること
- ③柔軟性と機動性を兼ね備えたチームであること

- ④チームとしての責任性
- ⑤心理的な継続性
- ⑥あいまいな不確実性に耐性をもつこと
- ⑦対話（“ポリフォニー”）

■2-2. オープンダイアログと家族療法との関係

1980年代、ケロプダス病院のファミリーセラピストたちはミラノ派の家族療法を使用していたが、すぐに壁に突き当たったとの報告がある（seikkula, 2003）。理論は立派であるが、そもそも家族療法に参加する家族が少なかったことが要因として挙げられている。とくに様々な文化的なシステムや私的な医療機関以外ではうまくいかなかったという。また、同時代には「専門家」が家族と関係をもつことが難しいという報告も多く挙がっていたとのことである。

ミラノ派の手法ではクライアントは「治療対象」であり、オープンダイアログのように「パートナー」ではなかった。しかし1984年に、ケロプダス病院のファミリーセラピストたちは、「家族」を客観視、治療対象とする方法には否定的な効果があると認識しはじめたという。その後、セラピストたちはあらゆる治療の前にミーティングを行うようになったとのことである。ケロプダス病院はファミリーセラピー専門の病院ではなく国立病院であった。そのため、ファミリーセラピーを受けたクライアントだけでなくあらゆるクライアントが来院した。こうした背景もあり、家族療法に、より実践的なアイデアが加えられ、オープンダイアログのようなシステムが確立したと推測する。

また、オープンダイアログのシステムの中

にいるファミリーセラピストたちは、呼称こそ「ファミリーセラピスト（家族療法家）」であるが、上述したように、日本の家族療法家とは大きく異なっている。この呼称は、元々、ファミリーセラピーを軸としていたことによる名残りであると推察される。

■2-3. 日本における家族療法家の役割

日本における心理職の代表は「臨床心理士」である。実際に、医療機関などに勤務しているのは、大学院での専門教育を受けた臨床心理士資格保持者である。よって、日本における家族療法家とは「家族療法を得意とする臨床心理士」のことを指すことがほとんどである。日本臨床心理士会のウェブページ¹⁾では、家族療法を次のように説明している。

1) 日本臨床心理士会「家族療法 夫婦療法」
<http://www.jsccp.jp/near/interview15.php>

ご本人とともに、そのような家族の方たちの相談にもりながら、家族ぐるみで、適切な対処法を工夫することによって、症状や問題行動の解決を図ろうという方法です。日本には1984年頃紹介された比較的新しい方法で、まま見られる家族を問題の原因とみる方法とは異なっています。不登校や引きこもり、食の問題、性格上の問題、非行等々広い問題に適用され、成果を収めています。

日本のファミリーセラピストは「本人だけでなく家族も『治療対象』とする」のにたいして、オープンダイアログのなかにいるファミリーセラピストは「本人だけでなく家族も『パートナー』として、ともに回復を目指す」「表出した症状を『危機』であるとは考えるが『問題』とは捉えない」ところに大きな違いがある。

■第三章 日本におけるケアへの応用 —「べてるの家」の実践から

筆者は「べてるの家」で働くソーシャルワーカーが、オープンダイアログにおけるファミリーセラピストに近いことを行っているのではないかと感じた。べてるの家での参与観察を行った際、ソーシャルワーカーが、当事者そのものに寄り添う姿を何度も目撃したからである。本章では、筆者がべてるの家への訪問を通して感じた「オープンダイアログとの共通点」などを、エスノグラフィー的に記述できればと思う。

■3-1. べてるの家におけるソーシャルワーカーの役割

べてるの家とは、北海道浦河町にある、精神障害などをかかえた当事者の地域活動拠点である。当事者たちが、ともに暮らしたり仕事をしたり、時には講演活動なども行う。なかでも「当事者研究」と呼ばれる、べてるの家で開発された自助のためのプログラムは画期的である。べてるの家を創設した向谷地生良は、当事者研究について「統合失調症などをかかえた当事者活動や暮らしの中から生まれ育ってきたエンパワメント・アプローチであり、当事者の生活経験の蓄積から生まれた自助—自分を助け、励まし、活かす—と自治（自己治療・自己統治）のツールである」（向谷地，2013）と述べている。集団で行う当事者研究では、ホワイトボードが必須アイテムである。そこに自らの苦悩を書き出していくうちに、自分の感じていることを整理し、理解していくことを目的とする。興味深いのは「孤立を深めるため、ひとりでは行わない」

というところである。こういったつながり—プログラムをささえているのは、べてるの家のソーシャルワーカーなのだ。

こうして、ささえられながらも当事者研究を続ける彼、彼女らの姿は、医療に奪われてきた「苦勞」を、自らの手に取り戻しているかのようにも映った。こういった思いもあり、筆者は「教科書でみた『精神病患者』」と「べてるの家の風景」があまりに違うことに驚きながら、毎年べてるの家を訪れることとなった。オープンダイアログに出会った時と同じように、惹かれるものがあったからである。

精神疾患を抱えるひとが多く暮らしているまちがあると聞けば、さぞかし多くの精神科医や心理士などがいなければ「手が回らない」のではないかと想像するのではないだろうか。筆者はこの夏、べてるの家のある浦河町に10日間滞在したが、まちを歩けど診療所に行けど、心理士をみつけることができなかった。精神科医は一人いたが、わいわいと楽しそうに談笑する当事者たちの輪には入らず、片隅で佇んでいた。日本における精神科医療では「医療者が主役」になりがちであるが、そういった風景は皆無であり、完全に「医療者は脇役」となっていた。

筆者が、べてるの家の近くにあるクリニックを訪れると、ソーシャルワーカーと看護師が、当事者たちとおなじ大きなテーブルを囲んで楽しそうに昼食をとっていた。浦河赤十字病院を退職した川村敏明医師が、医療関係者や当事者たちの意見を聞きながらつくったというクリニックは、木をふんだんに使った、落ち着く空間だった。筆者は、緊張しながらも、空いていた椅子に座った。するとソーシャルワーカーが筆者に「お昼、食べていたら」

と声をかけた。まるで友人の家に来たかのような対応に驚いたのだが、机の前に置いてあるホワイトボードに「夏まつりをやります。場所：川村家（精神科医の自宅）の庭」と書かれていたことには、さらに驚いた。その後、昼食を食べながら会話に耳をすませていると、そこにいるソーシャルワーカーたちは、当事者に対して必要以上に傾聴したり励ましたりしていないことに気づいた。こういったやり取りは「対等性がある」という点で、オープンダイアログの哲学に近いのではないか。べてるの家とオープンダイアログ双方の研究を行っている石原孝二は「両者の共通点を一言で言うならば、当事者が『語ること』を取り戻すために、精神科医療の常識に反する実践を行っているということに集約されるだろう」（石原，2014）と述べている。今回のクリニック訪問で感じた「精神科医療の常識に反する実践」とは、「精神科医の自宅で夏祭りをする」ことや「必要以上に傾聴したり励ましたりしない」ことにあたる。こういった些細にみえることは、ひととしての対等な関係性のもとに成り立っている。言い換えれば、対等な関係性なしでは考えられないことである。

筆者は、今回の訪問を通して、べてるの家のような「当事者が主人公」の場では「ここを治したい」と考えている医療者は役に立つことができないのではないかと感じた。先述した、このクリニックの精神科医である川村敏明は、自分のことを「治せない医者」とであると語っていた。また、べてるの家が発刊する雑誌『ベテルモンド』で、川村は「精神病が軽くなって健常者や病気じゃない人に近づいていけば、問題は解決するのか。そんな

に事は単純ではないでしょう。精神病の人が良くなるために薬や医者の方に期待しすぎて、精神障害者の生きにくさは何も変わらなかった」（川村，2012）と語っている。これは、1984年にフィンランドのファミリーセラピストたちが感じた「家族を客観視したり治療対象とする方法には否定的な効果がある」という絶望と共通するのではないだろうか。結果として、当事者を変えようとしたり、安易に「社会的な回復」に近づけようとしないというアプローチが可能となっていたことも、オープンダイアログの共通点である。これらから読み取れるように、医療者側の、既存の体制への「絶望感」は、治療方針における重要なターニングポイントになりえると言えるだろう。

■3-2. オープンダイアログがもたらす新たな急性期ケアの可能性—べてるの家との比較

先述したように、フィンランドにおけるオープンダイアログは、精神疾患への救急対応である。日本の救急現場に精神疾患をもつ患者が搬送されてきた場合、一般的には身体的な治療を行った後に退院となるが、オープンダイアログでは、急性期の状態から安定した生活に戻れるようになるまで、ひとつのチームが継続的にサポートを行う。オープンダイアログは、地域や自宅でなければできないというわけではない。哲学をもってすれば、たとえ搬送先の救急病棟であっても行うことができる。オープンダイアログは、自宅に「訪問」することではなく「はじめから家族とパートナーになる」ことが主な目的だからである。オープンダイアログを日本で応用するにあ

たつては、制度の問題や人員の問題など、数々の批判があがるのが容易に予測される。日本とフィンランドでは制度が異なることは事実であるが、たとえば「はじめから家族とパートナーになる」ことは、制度に依拠した話ではないだろう。先述した「べてるの家」では、極めてオープンダイアログに近いアプローチが実現していたが、西ラップランド地方と浦河町の共通点はどこにあるのだろうか。石原(2014)の指摘をもとに、共通点をあげた表を作成した。

表1 浦河町と西ラップランド地方の共通点

1, 地域で30年ほどの実践を積み重ねている
2, 失業率が高く、経済状況がよくない
3, 面積あたりの人口比率
4, 当事者にとって最もよい方法は何か試行錯誤してきた
5, クライアントの経験そのものに向き合おうとする
6, スタッフ間のヒエラルキーを排除してきた

備考) 石原, 2014を参照して筆者が作成

筆者は、4の「当事者にとって最もよい方法は何か試行錯誤してきた」という点が、両者に共通する、特に大きなポイントであると考えている。そもそも「治す」とはなにか、などといった、根源的な問いを繰り返して編み出された哲学をもっているという点において、べてるの家とオープンダイアログは共通している。先述したが、石原孝二は「両者の共通点を一言で言うならば、当事者が『語ること』を取り戻すために、精神科医療の常識に反する実践を行っているということに集約されるだろう」(石原, 2014)と述べている。

筆者が実際にべてるの家へ出向いた際も、当事者が自身のことを語っている場面に多々遭遇した。オープンダイアログを取り上げたドキュメンタリー映画「Open Dialogue 開かれた対話」(Mackler, 2013)でも、援助者が、困難を抱える当事者との対話を重視していることを示す発言が多く聞かれた。

繰り返すが、オープンダイアログは決して「手法」ではない。地域での30年間にもわたる治療経験の蓄積と、既存の医療体制への絶望などをもって生まれた「哲学」である。よって、日本においての応用を考える上で危惧しなければならないことは、オープンダイアログの哲学を、安易に「手法」として取り入れようとすることである。オープンダイアログは、夢の治療法ではない。先述したが、1980年代、ケロプダス病院のファミリーセラピストたちはミラノ派の家族療法を使用していたが、すぐに壁に突き当たったとの報告がある(seikkula, 2003)。手法のみを安易に広めようと、日本でもこれと同様の「壁」に突き当たる可能性がある。オープンダイアログにおけるミーティングと同様に時間はかかるかもしれないが、手法を浸透させるのではなく、哲学を慎重に共有するところからはじめなければならない。それが成功すれば、オープンダイアログの哲学が日本の治療風景を変え、苦悩をささえる役に立つ(応用できる)可能性は大いにあるのではないだろうか。

■第4章 おわりに

—本研究の限界と今後の課題

本研究では、フィンランドにおけるファミリーセラピストがどのような哲学をもって活動を行っているのかを文献研究によってまとめた。日本で近い実践を行っていると考えられる「べてるの家」へも実際に訪問し、比較した。しかし、日本においての今後の展望についてあまり触れることができなかつたことが本研究の限界として挙げられる。オープンダイアログに関する文献の多くが英語であったこと、そのすべてに目を通すことがかなわなかつたことが本研究における限界の二点目である。また、三点目の限界として、筆者自身の問題意識と本研究との結びつけ方に甘さがあったことが挙げられる。今後は、ソーシャルキャピタル（地域絆力）やコミュニティヘルスケアの概念とも結びつけながら、個だけではなく地域を元気にする心理士について考察したい。課題は多く残る本研究であったが、今後も継続して研究を行っていったらと思う。

■謝辞

本研究へのご指導を頂きました、和光大学の杉浦郁子先生に深謝いたします。また、未熟な論文にもかかわらず快く目を通してくだ

さり、多くのご指摘をくださった、和光大学の伊藤武彦先生、自治医科大学の斎藤慎之介先生、そしてべてるの家のみなさまに心より感謝いたします。

■引用・参考文献

- 石原孝二. “オープンダイアログとべてる – Open Dialogue UKセミナー参加報告”医学書院. 2014
- 齋藤環. “オープンダイアログ（開かれた対話）が統合失調症の治療風景を変える可能性について”医学書院. 2014
- 川村敏明. “ベテルモンド”. 2012
- 向谷地生良. “当事者研究とは – 当事者研究の理念と構成”当事者研究ネットワーク. 2013
- Olson, M, Seikkula, J. & Ziedonis, D. (2014). The key elements of dialogic practice in Open Dialogue. 2014
- Jaakko Seikkula and Mary Eorson. “2003”. The Open Dialogue Approach to Acute Psychosis: Its Poetics and Micropolitics
- Jaakko Seikkula. “Open Dialogue Approach: Treatment Principles and Preliminary Results of a Two-year Follow-up on First Episode Schizophrenia” Ethical and Human Sciences and Services. 2003
- Jaakko Seikkula and Tom Erik Arnkil. “Dialogical Meetings in Social Networks” KARNAC. 2011

指導教員のコメント

杉浦 郁子（現代人間学部）

松田青那さんは、「摂食障害における〈回復-Recovery〉とはなにか」という2013年度学生研究助成金論文において、医療の回復モデルとは異なる〈回復〉のあり方について論じました。今年度の研究でもその関心を引き継ぎ、精神的な病を得た人々の〈回復〉をサポートする手法について検討を行いました。

「こころ」の調子を崩したとき、入院や投薬などの医学的治療を経ずに日常生活のなかで良くなっていくことがある、ということ私たちは経験的に知っています。たとえば、友だちや家族と話をしたり、軽い運動をしたり、休息をとったりすることは〈回復〉に有効です。松田さんの論文は、薬や医者に頼らないようなオルタナティブな〈回復〉過程に関心を寄せています。

とりわけ誰かと話をすることで自らの困難を言語化することは〈回復〉への第一歩になります。このような、人々が当たり前に行っていて日常的にやっていることがらを、急性期の治療的介入の手法として位置づけたものが「オープンダイアログ」なのではないかと私は理解しています。それは、「対話（ダイアログ）」の力を借りて「困っているいまの自分」を脱構築するやり方の備忘録のように見えます。備忘録の存在は、自分の経験を語り、他者の経験をそのままに受け止めるとい

うシンプルな行為の難しさを示しているのでしょう。

オープンダイアログは、フィンランドの統合失調症の治療チームによって実践されているものですが、松田さんは、かねてより参与観察をしていた「べてるの家」が独自に開発したセルフヘルププログラムに、オープンダイアログの手法と哲学を見て取ります。「べてる」を記述するエスノグラフィにもう少し厚みがあるとよかったですと思いますが、「べてる」が急性期に限定せず行ってきたプログラムとオープンダイアログとの共通点を示し得ていると思います。「べてる」のある浦河町では、「開かれた対話」を支える理念や方法が医療現場だけでなく地域の暮らしにも染み出ているように見えました。松田さんの論文を読んで、病や障がいへのアプローチを活かした地域づくりの可能性を感じることができました。

「かわ道楽」体験と自然の関わり方

和光大学・かわ道楽研究班 代表者／12W033 土谷 杏季
12T018 伊藤 純一・12E050 小城 将平・12B051 榮田 隼
12P028 鈴木 一正・12B115 松浦 信允・13T033 金子 昌樹
13E132 宮田 和也・13U036 深澤 祐太・13B152 森 雄一郎

1 はじめに

我々が所属している、和光大学・かわ道楽（以下、かわ道楽）は和光大学のある川崎市麻生区岡上を主に活動拠点にし、広く鶴見川流域にわたって環境保全活動をしているサークルである。サークルの発足は2002年の秋であり、2002年度の間関係学部人間学科講義「フィールドワークを学ぶⅠ」で、鬼ノ窪川の生物調査・清掃活動を行ったメンバーを中心に結成された。

かわ道楽は、定例活動として月に2回、岡上で活動している。この定例活動は岡上の「自然環境の保全」と「生物多様性の復活」を目指している。定例活動以外にも日頃から岡上で行なっている調査活動や、保全活動を円滑に行なうために地域との関わりを持つことも重要と考え、岡上西町会の納涼祭やどんど焼き等の地域行事に毎年参加している。かわ道楽の活動は、環境保全の側面と、地域交流の側面の2つによって構成されている。

今年度で12年目となるかわ道楽には、近年、10人前後の新生者が加入し、現時点で1から3学年を合わせると30人を超える。さらには新年度開始以降にも、途中参加をする学生も

多くいる。環境保全が第一の特徴であり、一見地味で人の集まることのなさそうなサークルに、なぜ学生が集まってくるのか疑問に思うこともあるだろう。活動に参加する学生のすべてが環境保全に興味があるのだろうか。地域交流に興味があるのだろうか。疑問は尽きない。

本論文では、以前から継続している動植物の調査結果の報告と考察に加え、なぜかわ道楽に学生が集まるのかという疑問を解明したいと思い行なったアンケート調査の結果から、かわ道楽の本質を究明していきたいと思う。

2 かわ道楽の活動

2-1 活動場所、活動内容について

まずかわ道楽の活動拠点である、岡上について少しばかり記述する。岡上は川崎市麻生区の飛び地であり、東京都町田市、横浜市青葉区に囲まれている。宅地開発が急速に行なわれたものの、森林や田畑が多く存在し、川崎市の中でも多くの自然が残された場所といえる。

岡上の中でのかわ道楽の活動場所は、山や川、住宅地まで多岐にわたる。様々な活動場

所のなかで様々な活動をしている。今年1月～11月に行なった活動内容を図2-1に示した。

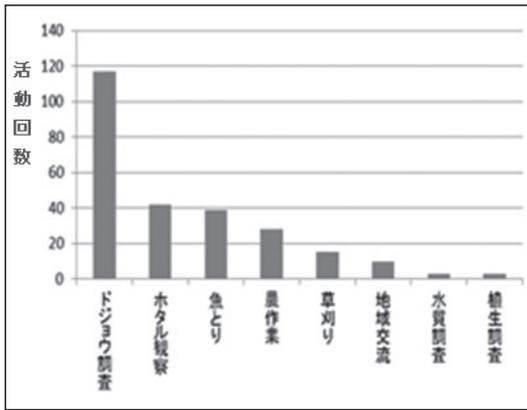


図2-1 2014年1月～11月の活動内容

活動内容として一番多く活動しているものはホトケドジョウ調査である。活動が多くなった要因としては、個体数の計測やエサやりが調査に含まれているため週3回と頻繁に行われているからである。次に多いのがゲンジボタル調査で、期間は限られているがその期間は毎日行われているからである。例年より今年特に多かった活動が、魚とりと呼んでいる鶴見川大正橋付近での魚類調査である。本来、魚とりは月1回の生物調査を行うときに実施しているが、今年、学外の団体から川遊びの支援の依頼を受けたことでイベントとしての魚とりを夏季休業中に多く開催した結果である。

2-2 研究対象におけるかわ道楽の活動経緯

我々の各調査の対象と実施場所は以下の通りである。

- ・植生調査（キンラン、タマノカンアオイ）：逢坂山、お伊勢山
- ・ゲンジボタル調査：鬼ノ窪川
- ・水質調査（項目が多いため、後述）：鬼ノ

窪川

- ・ホトケドジョウ調査：和光大学パレストラ屋上池、三又水田沼
- ・大正橋生物調査：鶴見川大正橋付近

かわ道楽の活動拠点である岡上には、多くの生き物が生息している。しかし、現在調査を行なっている調査対象である、ゲンジボタルは岡上では一度絶滅している経緯があり、キンラン (*Cephalanthera falcata*)、タマノカンアオイ (*Asarum tamaense*)、ホトケドジョウ (*Lefua echigonia*) においては絶滅危惧種に指定され、岡上のみならず希少な生物である。

キンラン、タマノカンアオイ等の背の低い植物は、雑木林において背の高いアズマネザサや常緑広葉樹林等の植物が繁茂することで、日光が遮られ、十分な日照を得ることが出来ず減少したと考えられる。背の低い植物の繁殖を妨げるほか、管理者の不在により人手が加わらなくなり、その結果、雑木林は極相林に向かって遷移している問題もある。これらの問題を解決すべく、かわ道楽は植物の保護・繁殖、植生遷移の極相化を防ぐために2003年より逢坂山、お伊勢山の二カ所で選択的下草刈りの活動を開始した。

ゲンジボタル (*Luciola cruciata*) は岡上において1980年頃まで確認されていたが、それ以降姿を確認することが出来なかったと地域の方々から聞かされていた。これは生活排水の流入や、粗大ごみの不法投棄が原因とされている。2002年度の和光大学人間関係学科講義「フィールドワークを学ぶⅠ」において、学生たちが鬼ノ窪川の清掃活動を行なった。その後の2003年5月までの期間にフィールド

ワークで行った調査によると、動物相はアメリカザリガニ (*Procambar usclarkii*) の侵入はあるものの、サワガニ (*Geothelphusa dehaani*) やシマアメンボ (*Metrocoris histrio*)、カワニナ (*Semisulcospira libertina*) など、谷戸の清流の特徴的な動物がいることも確認されたことで、ホタルの生息できる環境がまだ残っていて繁殖可能である事が判明した。そして、かねてより地域の人々からホタル復活を望む声があったことと、元々鬼ノ窪川にゲンジボタルが生息していたこと、またゲンジボタルの生息・繁殖が環境指標になりえることなどといった点から、かわ道楽はゲンジボタルを復活するための活動に着手し、復活後は保護を開始した。

ホトケドジョウ (*Lefua echigonia*) は宅地開発による生息場所の減少を主な要因とし一度は2000年の調査を最後に岡上では確認出来なくなった。しかし2005年に和光大学生が大学近辺の沼地にて稚魚を確認し、かわ道楽で保護、繁殖を開始した。

大正橋での生物調査は2007年度からイベント展示用の鶴見川の生物を捕っていたことに端を発する。2009年度から、堂前雅史和光大学教授からの指導もあり生物調査の記録を開始した。

これらの調査対象に関するその後の経過等詳細は各章で後述する。

3 植生調査

3-1 調査目的

和光大学の周辺には逢坂山とお伊勢山という二つの斜面林が存在する。逢坂山は和光大学の敷地の一部で「岡上和光山緑の保全地域」

として川崎市の緑の保全地域に指定されている。なぜ川崎市なのか。和光大学のキャンパスの半分以上が神奈川県川崎市にまたがっており、この逢坂山は川崎市に属している。その逢坂山の南側に位置するのがお伊勢山で、双方ともに、コナラやクスギなどの、雑木林に典型的な樹種が多く、カブトムシやクワガタの幼虫はそれらの腐葉土や朽木を糧とし、その成虫などはそれらの樹液を頼りに生活している。また、林床に目を転じれば、キンラン (*Cephalanthera falcata*) (図3-1)、タマノカンアオイ (*Asarum tamaense*) (図3-2) などの環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類に指定されている植物や、同じく環境省レッドデータブック準絶滅危惧種に指定されているエビネ (*Calanthe discolor*) が確認されている。また、近年野生ランブームによる乱獲により、減少しているギンラン (*Cephalanthera erecta*) も確認されている。ギンランは環境省のレッドデータブックではないが、都道府県が出しているレッドデータブックに、栃木県、埼玉県、長野県など47都道府県の内36都道府県が準絶滅危惧種、絶滅危惧種Ⅰ類、絶滅危惧種Ⅱ類に指定されている。

このように貴重な植物が確認されている和光大学周辺の雑木林を中心とした環境を保全し、より良い自然環境にするため、かわ道楽では月二回の定例活動を行っている。具体的な定例の内容は、山を覆い日当たりを悪くし、他の植物の発育を阻害するアズマネザサ (*Pleioblastus chino*) を中心とした林床植物の選択的下草刈りや、春季に新しい芽を出し成長する植物にとって必要な落ち葉かきを行っている。特にタマノカンアオイは林床植物の選択的下草刈りを行っていないと調査の

際に発見が困難になり、発見個体数にも影響が出てしまう。

3-2 調査対象



図3-1 キンラン



図3-2 タマノカンアオイ

3-3 調査時期

キンラン（図3-1）の調査回数は年に一回、キンランが花を付ける五月上旬に調査をし

た。2013年度は5月8日（水）（天候：晴れ）に調査した。2014年度は5月2日（金）（天候：晴れ）に調査を行った。

タマノカンアオイ（図3-2）の調査回数は年に二回であった。2013年度は6月26日（水）（天候：晴れ）2014年度は7月4日（金）に逢坂山で調査した。7月6日（日）にお伊勢山にて調査を行った。両日ともに天気は晴れであった。

3-4 調査方法

キンランは範囲を決めて調査者が直線状に横に並び、歩きながら視認し杭を刺して数える。2008年から盗掘防止とダブルカウントを防ぐために番号の書いた杭をキンランの近くに刺すようになった。これは今年度も同様の方法で行った。

タマノカンアオイはキンランと同様に歩きながら視認し、こちらは発見個体数をカウンターで合計していく。隣同士でカウントした株を確認し合うことでダブルカウントを防ぐ。

3-5 調査結果

今年度のキンラン調査では、前年度のキンランの個体数調査で逢坂山は83本、お伊勢山で93本（合計176本）という結果だったのに対して、今年の調査では逢坂山で96本、お伊勢山140本（合計236本）であった。全体的に増加しており、お伊勢山に関してはかなり増加していると考えられる。お伊勢山では、横に流れる鬼ノ窪川の岸辺にも自生が確認された。この場所は以前、自生していない場所で、お伊勢山での定例活動そのものが荒天の為、中止になることが多く、その為、減少の傾向にあるものと考えていたが、調査結果は増加

という結果だった。手を加えない方がキンランの自生には良いのかと思えば、逢坂山では、あまり手入れをしていない場所でのキンランは、去年まで生えていた場所の殆どが、今年は確認出来ず手入れの必要性を感じさせる結果になってしまった。このことから手入れの仕方に何か問題があったのではないかと考えられる。またキンランの切り取られた跡や、掘り起こした跡などが確認されていて、盗掘と思われる被害が出ているので対策が必要と考えられる。

タマノカンアオイの調査では、前年度は逢坂山にて361株、お伊勢山にて180株（合計541株）確認された。今年度は逢坂山にて728株、お伊勢山にて237株（合計965株）と大幅な増加という結果になった。大雪等の荒天により、行うことが出来なかった落ち葉掻き等の活動が、落ち葉や枯れ木を好む、タマノカンアオイの受粉の際に必要なキノコバエの活動を活発にさせ、かえて自生には良かったのではと推測される。また今年度の定例活動で、前年度出来なかった部分の選択的草刈りを行ったので、更なる増加に期待出来ると考えられる。

3-6 植生調査10年間の比較と考察

今年度の植生調査により、キンラン、タマノカンアオイ共に増殖しているという結果になった。キンランは去年確認できなかった場所に多数自生を確認した。タマノカンアオイに至っては前年度に比べて逢坂山では2倍近い728株もの生息を確認できた。その原因を特定するために、10年間の比較をグラフに表してみた。（図3-3、図3-4）2005年の調査は調査法が異なり小規模だった為に、いずれも

小さな数字になっている。

10年間で比較をしてみた当初の理由は、キンラン、タマノカンアオイ共に発芽に周期性があるのではないかと疑ったからだ。だが両者共に10年分の結果では周期性が見られないことが分かった。このことから発芽に周期性が無い、又は10年以上の周期がある可能性もある。また今年度の調査で、タマノカンアオイは小さいサイズの株が多数確認されている。発芽の多い年というものがあるのなら、それが今年度である可能性も考えられる。

一方で、お伊勢山のキンラン、逢坂山のタマノカンアオイには、10年間を通じた増加傾向が見て取れる。長い保全活動の成果といって良いだろう。今年度の結果を踏まえ、両種が生えやすいように、来年度も選択的草刈り、落ち葉掻き等を継続的に行い、調査を続けていきたい。

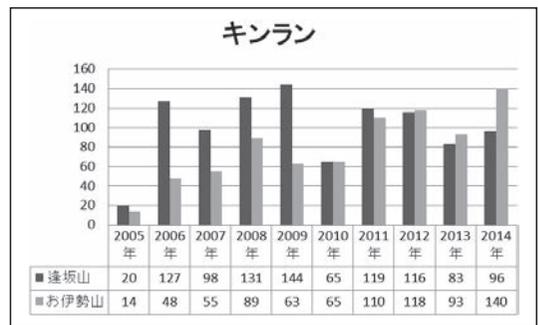


図3-3 キンラン10年分比較

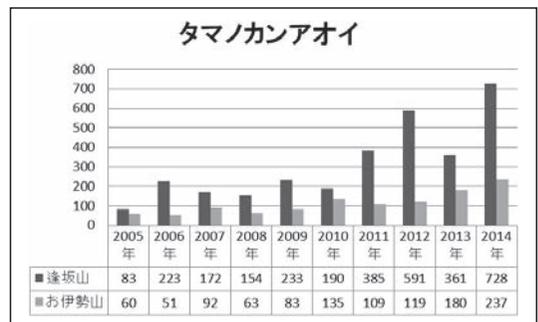


図3-4 タマノカンアオイの10年分比較

4 ゲンジボタル調査

4-1 ホタル調査の背景

川崎市麻生区岡上にある和光大学の裏手を流れる小川がある。それがホタル調査を行っている「鬼ノ窪川」である。鬼ノ窪川という名前の由来は岡上の川井田谷戸奥地の低地がかつて「鬼ノ窪」と呼ばれていたことから、その土地を流れる小川なので「鬼ノ窪川」とかわ道楽の学生によって名付けられた。

この鬼ノ窪川では1980年頃まではゲンジボタルが生息していたが、後に姿を消してしまったといわれている。原因としては生活排水の流入による周辺環境の悪化と考えられる。しかし現在ではゲンジボタルがまた復活し、生息をしている。2002年春より鬼ノ窪川とそれに隣接するお伊勢山の雑木林の整備と調査活動を開始した。活動を始めた当初はお伊勢山の斜面と鬼ノ窪川の中には不法投棄された粗大ゴミなどが多くあったが、和光大学人間関係学科のフィールドワークの講義で鬼ノ窪川の粗大ゴミの撤去、整備や環境調査が行われた。ゲンジボタルの幼虫のエサとなるカワニナが講義の中の生物調査で800匹以上発見され、この鬼ノ窪川がゲンジボタルの生息にとって恵まれた条件を持ち合わせる場所だということが判明した。その後2002年11月に結成されたかわ道楽はかねてからの地域の方からの強いホタル復活の要望とかつては鬼ノ窪川にゲンジボタルが生息していたこと、ゲンジボタルが生息するにあたって恵まれた条件であることといったいくつかの点から、鬼ノ窪川での調査、整備保全活動を行う際に管理目標として、「ゲンジボタルの復活と自生」を目標として選択し、その活動に着手した。

ゲンジボタルを復活させるにあたり、他の地域からホタルを持ってくるのは遺伝子攪乱の観点から問題があるためできなかった。岡上のゲンジボタルの子孫は絶滅してしまったがさいわい、同じ鶴見川流域の麻生区由来のゲンジボタルの子孫を東京都板橋区ホタル飼育施設(現：板橋区ホタル生態環境館)が維持していたことから、2003年7月、麻生区由来のゲンジボタルの卵を譲り受け、羽化させた幼虫を7月下旬から2回に分けて放流をした。

翌2004年6月2日、地域の方が鬼ノ窪川にてゲンジボタルの発光飛行を確認、そのことにより鬼ノ窪川にゲンジボタルが復活したと確認された。幼虫から成虫に育ったということから、鬼ノ窪川が自然にゲンジボタルが定着できる環境であることが裏付けられたといえる。あとは交尾、産卵、孵化が行われれば、完全な復活となる。翌2005年でもゲンジボタル成虫の発光が確認され、その後2014年の今年まで11年もの間、鬼ノ窪川でゲンジボタルが発生している。

現在では鬼ノ窪川でゲンジボタルが毎年確認されているため、ゲンジボタルが来年以降も繁殖し、減少していかないか調査、観察していく次第である。

4-2 調査方法

かわ道楽では2004年にゲンジボタルが復活し、みられるようになってから毎年ホタルパトロールというものを行っている。5月の下旬からプレホタルパトロールというものを行い、そこでゲンジボタルの発光が確認され次第、ホタルパトロールが開始となります。

プレホタルパトロールとして鬼ノ窪川でその年最初のゲンジボタルの発光を確認するた

めの調査のことで20時～20時30分までの間、ホタルパトロールと同じ場所から観察する。

ホタルパトロールはその年の発光飛翔データと取るために行う。鬼ノ窪川を4か所（上流・中流・下流上・下流下）の観測場所に分けて18：40から21：00までの間、10分毎にその瞬間に確認できたホタルの発光数を計測・記録していく。発光個体数が0の日が2日続いた時点でその年のホタルパトロールは終了とする。その他に気温、天気、その日来られた近隣住民の方々の人数も観測ポイント毎に記録している。またこのホタルパトロール（調査活動）はゲンジホタルの繁殖活動の保護とともに近隣住民の方への迷惑防止という目的も持つ。

4-3 今年度の調査結果

今年度のホタルパトロールでは5月28日に最初のホタルが確認されました。

今年度は昨年度よりも2日早くホタルの発光が確認された。これは3年連続でホタルの発光の開始日が早くなるという結果になった。

2013年は5月30日に最初のホタルの発光が確認されたため2014年はその1週間前の5月23日からプレホタルパトロールを行なった。プレホタルパトロールが始まって5日目5月28日にホタルの最初の発光が確認され、同日から本格的なホタルパトロールが開始となった。7月5日にホタルの発光が二日間0匹と確認したためホタルパトロールを終了した。

ホタルの成長発光は5月28日の発光の確認から徐々に数を増加させていき、調査開始から13日目の6月9日に今年度の最高数である84匹の発光を確認された。発光個体数については図4-2に示した通りである。

発光の確認後、6月2日から10匹代に乗り、その日を境に数を増加させていくが、6月6日に減少したのは、雨が降ったことによると考えられ、雨が上がった次の日には多くのホタルが見られ、6月9日の最高発光数の84匹が確認された。6月10日までは60匹以上のホタルが見られたが6月11日に発光数が40未満に落ち込みを見せたのも、翌日から増加したことから、降雨のせいと考えられる。6月11日から13日が多くのホタルが見られた。

6月13日以降から徐々に発光数が減っていく。6月22日から10匹前後を保ち、6月27日に0匹となるも、翌日には確認数は3匹前後となる。7月3日に上流、中流にて1匹確認したものが今年度最後の発光確認となった。

2013年度は発光確認から11日目、12日目の62匹が最高発光数となった。今年度と比べると最初の発光が5月28日と2日早く、最多発光日が13日目と1日遅くなっているがほぼ去年度と変わらない。最終発光日は7月5日と去年度と変わらない。発光期間については去年度は32日間でしたが今年は37日間と5日間と延びている。

のべ発光個体数は期間が延びたこともあり、今年度は862匹、去年度は810匹と50匹以上も多く確認された。その理由として玉川大学の鬼ノ窪川周辺の下流地点の開発が考えられる。その伐採により以前は葉や枝に隠れて見えなかったホタルが見えるようになったことから50匹以上も増えたと考えられる。去年度のホタルの発光個体数が多かったために今年も多いただろうと推測していたが、今年度は50匹以上も多く確認され、来年度も多く確認されるだろうと期待が持てる。

去年度と今年から1回のホタルのピークが

あると考えられる。去年度は6月9日から6月11日と6月14日から6月18日の1つのピークである。今年度は6月7日から6月10日、6月12日、13日であり、去年今年どちらにも1日、2日と極端に減っている日がある。この日は去年今年どちらとも雨が降っている。この雨によって1回のピーク分断されていることが引き起こされているのではないかと考えられる。来年も1回の周期が雨で分断されているかも調査していく次第である。

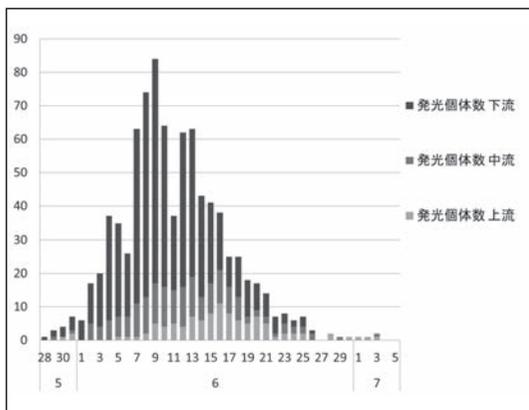


図4-1 2014年のゲンジホタル発光確認個体数

図4-2は2004年度からの今年度までの経年発光個体数の変化を示したグラフである。これは（その年の積算目撃数×3÷3.9＝推定総羽化個体数）を割出したものである。推定方法は遊磨（1993）の推定式を活用したものである。

図4-2のグラフを見ての通り、2012年から急激に増え、今年度は昨年度以上の個体数が確認された。

昨年度よりも50匹以上も多かったというのは鬼ノ窪川でホタルの繁殖が順当に行われている証拠である。今年度は玉川学園の開発伐採もあり、見やすくなったという点もあり、増えたというより見えなかったところが見え

るようになったため多く確認された可能性があるが、多く一昨年、去年度同様の個体数が生息していることがうかがえる。

現在の状況が続けばホタルの繁殖は引き続き続いていくだろうと推測できる。

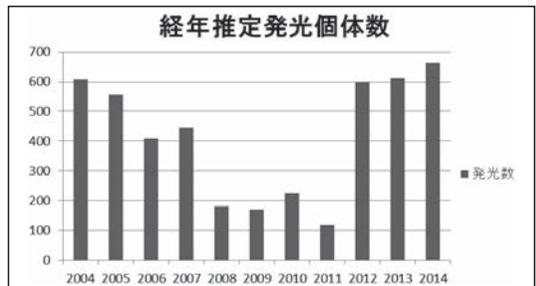


図4-2 鬼ノ窪川のゲンジホタルの推定総羽化個体数

5-4 ゲンジホタルの生息条件

ゲンジホタルは様々な自然環境がそろっていないと発生できない。ゲンジホタルが生息するということは鬼ノ窪川の環境条件が適しているということになる。それゆえに鬼ノ窪川の条件が指標ともなりうる。条件としては以下のとおりである。

- i) ゲンジホタルの幼虫にとって川の水の水質も重要な条件となる（詳しくは水質の項で述べる）他にはホタルの幼虫にとっては川底に浮石があることも重要である。
- ii) ゲンジホタルが幼虫からサナギになるために20～50匹のカワニナを捕食しなければならない。川にはそのエサとなるカワニナが多く生息していなければならない。前述で述べた水質はカワニナが多く生息することについてもつながる。
- iii) 成虫は植物の表面についている水滴を飲むため、川べりが植物に覆われている部分が必要となる。
- iv) 成虫は交尾の際に雄が光を発しながら飛

翔し、雌にアピールするため飛翔や光の見え方が植物によって妨げられないように川面が適度に開放的でなければならない。

- v) 産卵する場所として、川面につきだしたコケを選ぶ。羽化した幼虫は水中ですが、サナギになるために陸に上がらなくてはならない。しかし幼虫は土を掘る能力が低いため柔らかい腐葉土を選び、体をもぐりこませるため柔らかい土が出ていることも重要である。
- vi) ゲンジホタルの発光の光が見えるために夜間、照明がないこと
- vii) カワニナの餌であるケイ藻が育つためには、日照が川に入らねばならず、草刈りされた川面が必要である。

東京ゲンジホタル研究所（2004年）から抜粋。

以上の条件がそろっているためゲンジホタルが生息していると考えられるためこれからも環境整備や水質調査を行う必要がある。

5-5 ホタルの観察者

図4-3はホタルパトロールの時間でホタルを鑑賞しにきた人のグラフである。

前述のホタルパトロールでも触れたようにホタル以外にもホタルを鑑賞しに来た人の数も記録している。今年度はのべ261人もの人がホタルを鑑賞しに鬼ノ窪川を訪れた。岡上地域に住んでいる人や遠くから来ている人と様々であったが多くは鬼ノ窪川周辺に住んでいる岡上の方々であった。今年度も去年度と同様発光が確認された5月28日からホタルを鑑賞しに地域の方が訪れていた。お話を聞くと1週間前から来ている人もいて、改めて地域の方々にとってホタルが待ち遠しく、喜ば

しいものであることかがうかがえる。

鑑賞者が最も多かった日は6月12日であった。この日は平日の木曜日であるにもかかわらず多くの方がホタルの鑑賞に訪れた。理由としてはホタルを鑑賞しに訪れた方々が周りの地域の方々に「ホタルが出ている」と口コミが広がり、そこからまた他に地域の方々に広がり多くの方が訪れることとなったと考えられる。また後述でするアンケートでも知人に誘われてという方が多く回答しており、ここからも口コミから広がったということが考えられます。

地域の方がホタルを鑑賞しに訪れることについていくつかの特徴がうかがえる。1つ目に雨の日であっても人数は減るものの、何人かの地域の方が訪れていることからうかがえます。「ホタルが大丈夫かな心配して」と言って訪れる方もおり、晴れの日や曇りの日は多くの方が訪れる。雨の日にも訪れる方がいるというのは地域の方々にとってホタルが大事にされているかがうかがえる。2つ目に、継続してホタルの鑑賞に訪れている地域の方が多くいたということです。ホタルを鑑賞しに訪れた方は何度か訪れる方は多いのですがほぼ毎日訪れる地域の方が多くおり、ホタルが地域の方に生活の中に組み込まれた楽しみであることかがうかがえる。3つ目にホタルの発光が確認されなくなった7月3日の後も地域の方が鑑賞に訪れていたということである。前述の調査方法でも述べたようにホタルの発光が確認されなくなって2日続いたらホタルパトロール終了となる。7月3日も過ぎた後も2日間調査を続ける中で鑑賞者の確認はできた。まだホタルを少しでも見たいと鬼ノ窪川に鑑賞しに訪れる方がいるということ

が確認できた。これら三つから鬼ノ窪川周辺に住んでいる方々にとってどれだけホテルが大事に思われ、夏の楽しみなことかがうかがえる。

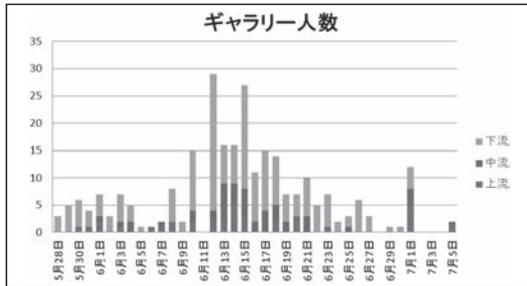


図4-3 ホテルパトロールの時間でホテルを觀賞しに訪れた人数

5-6 岡上西町会納涼祭に訪れていた人を対象にしたアンケート

今年度は一昨年、去年度とはアンケートを変更し、ホテルパトロールの時にではなく、岡上地域で行われる岡上西町会納涼大会でアンケートを行った。昨年度とは違う場所で行う理由として今回はホテル鑑賞に訪れている方だけでなく、訪れてみたことがない人や知っているが訪れたことがない人にアンケートしてホテル觀賞に訪れたことがない方々がホテルについてどう思っているのかを知るためである。今回は24名の方から回答を得ることができた。

アンケート項目も一部変更し、見たことのないひとにも答えてもらうような設問になっている。

アンケート項目は以下のようなものである。

Q 1 岡上にホテルがあることを知っていますか

(はいの人はQ 2～Q10 いいえの人はQ 8～Q10)

Q 2 ホテルの見学に初めて訪れたのはいつ

ですか

Q 3 ホテル見学をしていた期間はいつからいつまでですか

Q 4 ホテル見学に訪れたきっかけはなんですか

Q 5 ホテル觀賞の楽しみはなんですか

Q 6 今後もホテル見学に訪れたいですか

Q 7 ホテル見学をパトロールしている学生についてどう思いますか

Q 8 ホテル見学に行きたいですか

Q 9 ホテルにどのようなイメージを持っていますか

Q10 ホテルのいる環境についてどう思いますか

以下、アンケート結果を報告する。

図4-4のグラフから3分の2以上の人が岡上にホテルがあることを知っていることがわかった。あらためて岡上の方々にとって鬼ノ窪川のホテルが多く知られているということが分かる。

また昨年度ではわからなかったホテルの認知度について知ることができた。

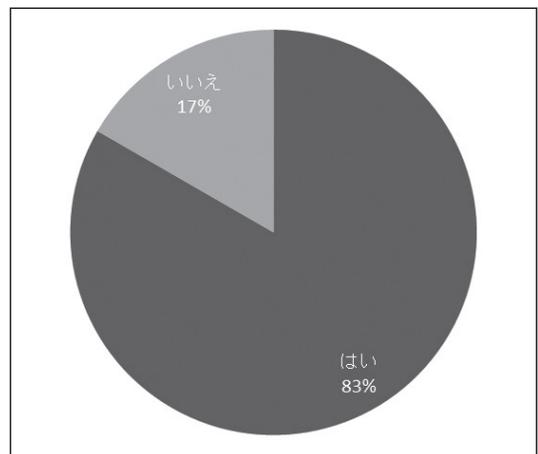


図4-4 「Q 1 岡上にホテルがあることを知っていますか」という質問への回答

このグラフの見方としては最初の2014年だと黒い部分のところが訪れている期間となるので6月中旬から7月の上旬まで訪れていることがわかる。

ここから6月中旬から6月下旬が多くの方が訪れていることがわかる。ゲンジホテルの発光のピークである6月上旬よりも後に多くの人 coming いることになる。

また5月上旬からホテル観賞に訪れている人がいることもわかり、ますます岡上の人にとってホテルが期待されているものかがうかがえる。

いつから	5月			6月			7月	
	上	中	下	上	中	下	上	中
2014年								
2010年以前								
2013年								
2012年								
2012年								
2011年								
2010年以前								
2014年								
2010年								

図4-5 「Q 2 ホテル観賞に来ていた期間について」への回答

図4-6のグラフからまだないという人が4分の1を占めている。岡上の方でもまだいたことがないという人がいるということが判明した。また2010年が20%と多少多いがその他はまんべんなくいるということが判明した。しかし一般的に地元意識の低いベッドタウンで4分の3もの方が鬼ノ窪川のホテルを見ているというのは驚異的と考えられる。2014年今年から見に来たという方が15%もいるということは常連の方々だけでなく、新たな方がホテルを鑑賞しに訪れているということである。だが今回は納涼大会という大勢の人がいた中で24の方にアンケートを取ったので断言はできない。

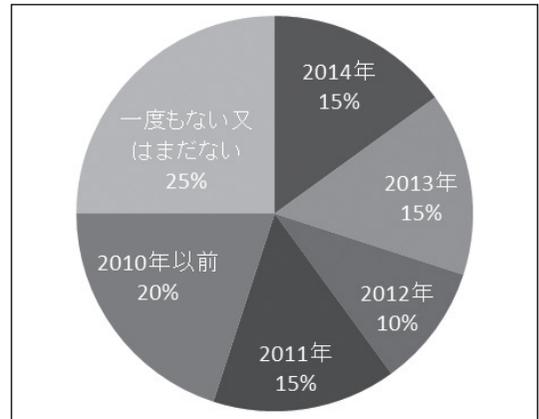


図4-6 「Q 2 ホテル見学に来たことがある人から初めてホテル観賞に訪れたのはいつか」への回答

図4-7から見ても知人に誘われてという回答の3分の1を占めている。次に自分の家からホテルが見えるという回答が多かった。ここからやはり地域の方が自分の家から見えたりするとホテルを鑑賞しに訪れるということがうかがえる。また地域の人から口コミで広がっていくという面でもホテルが見えたという情報が広まっていった知人を誘ってホテル観賞に訪れるということから地域住民の交流の強い結びつきが見て取れる。

他にも「学生がパトロールしていたから」や「かわ道楽主催の夜の自然観察会に参加したから」という回答もあった。ここからかわ道楽が地域と人との関わりを強めているのではないかと考えられる。

その他としては孫に見せるためという回答もあった。ここから新たなホテル観賞にくる地域の方々が増えていくのではないかと考えられる。

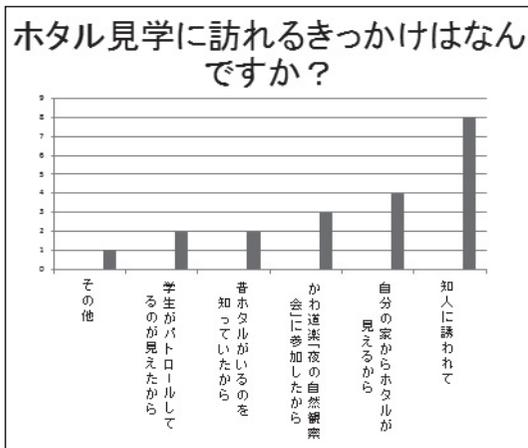


図4-7 「ホテル見学に訪れたきっかけはなんですか」への回答

Q5では「ホテル観賞の楽しみとはなんですか」と聞いた。ホテルの観賞について4つの項目に分け「ホテルの観賞」「ご家族やお連れの方とのお話」「地域の方との交流」「学生との会話」とわけ質問をきいている。

ホテルの観賞に関してはアンケートを取った20人中20人全員が楽しめたと答えている。これはホテルを見ることに対し、見に訪れた方々が喜んでくれたということがわかる。またほかの3つの項目に対しても3分の2以上の方が楽しめたという回答している。ここからホテル観賞によってホテルはもちろんのこと家族や地域の方、ホテルパトロールをしている学生との会話がホテル観賞に訪れた人にとって楽しみの場となっていることがうかがえる。

またこの結果からホテル観賞が地域の方と学生にとっての交流の場となっていると考えられる。

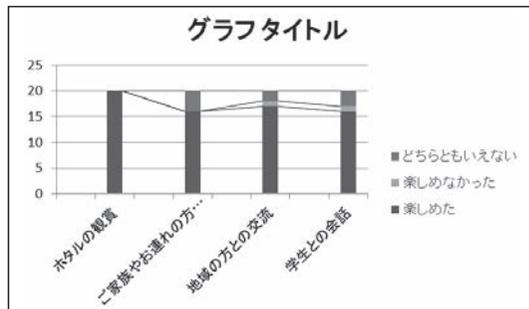


図4-8 「Q5 ホテルの観賞の楽しみはなんですか」への回答

Q6では3つの選択肢を選ぶ設問となっており、「いいと思う」「どちらともいえない」「よくないと思う」の中から回答してもらう形となっている。

ほぼ全員がぜひ来たいと回答している。ホテル観賞が岡上住民の方々にとって楽しみに思われているということが前述で述べたように裏付けられた。

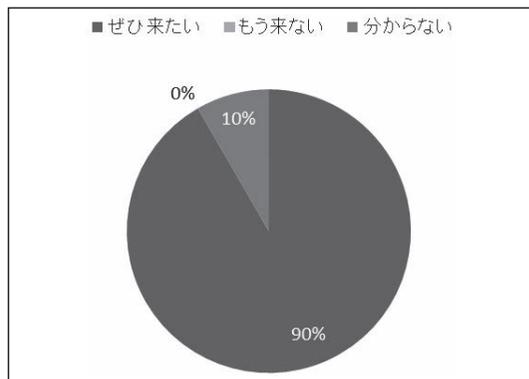


図4-9 「Q6 今後もホテル見学に訪れたいですか」への回答

Q7ではホテル見学をパトロールしている学生についてどう思うか聞いている。Q6と同じように質問に対し、3つの選択肢を選ぶ設問となっており、「いいと思う」「どちらともいえない」「よくないと思う」の中から回答してもらう形となっている。

ほぼ全員が3つの選択肢の内「いいと思う」

と回答しており、学生がパトロールしていることについては良く思われていると考えられる。またアンケートに答えてくださった人の意見では自然が守れるからや安心という意見が寄せられた。ここからパトロールしている学生について地域の方々にとってよく思われているということが裏付けられる。居住地における自然保護活動が理解されているといえよう。

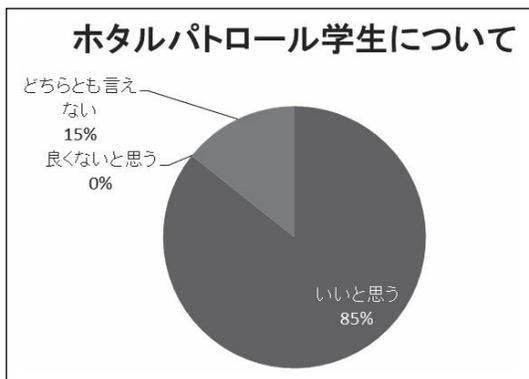


図4-10 「Q7 ホタル見学をパトロールしている学生についてどう思いますか」への回答

Q8はホタル観賞に訪れたことがあると回答した人にもないと回答した人にも回答してもらっている。

ホタル見学については結果として八割近い方がホタルの見学に来たいと思っているということがうかがえた。ホタル見学については訪れたいという方が多くいらっしゃるため来年度以降も多くの方が来てくれることが考えられる。意見としては見てみたいや、かわいからなどが挙げられている。

いいえと挙げた方々はいたがその理由はホタルが嫌いと言うわけではなく、「歳だから」や「遠い」という理由が寄せられました。

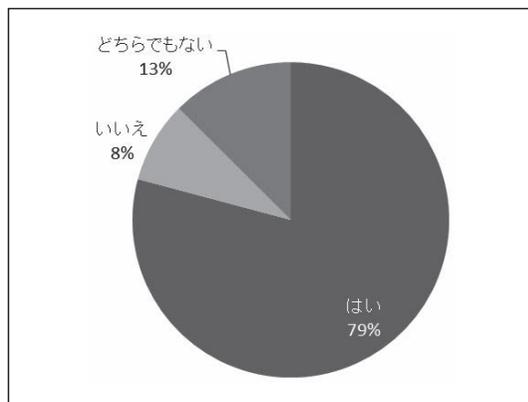


図4-11 「Q8 ホタル見学にいきたいですか」という質問への回答

Q9については自由回答で書いてもらった。意見としては「かわいい」や「光がキレイ」や「自然が残っていないとこない」や「子どもの頃たくさん飛んでいたな」、「住む川がキレイ」などが挙げられた。この結果からホタルに対し、光がキレイやかわいいなどの好印象を持たれていることがいえるだろう。また環境についても「自然がないと住めない」や「川がキレイ」などの環境についてのイメージも「ホタル=自然が残っている」というイメージを持たれているということが考えられる。

Q10は環境についてきいた質問なのだがほぼ全員の方が「いいと思う」や「素晴らしい」と思うなどの意見が寄せられている。やはりホタルがいる環境について地元住民はもちろんのこと、納涼大会にきていた方々もそう思ってくれているようだ。他の意見として「心を和ませてくれていいなと思います」という意見も寄せられた。やはりホタルがいる環境についてはアンケートをとった中ではいいことである認識されていると言えるだろう。

4-7 今後の調査、観点

今年度の調査からホタルの発生個体数が増えてきたことが見受けられる。この結果から来年度以降ホタルの発生個体数の変化などにも注目していきたいと考えている。

また今年度は玉川大学による下流部の開発伐採があったため、今年度のホタルには影響はなかったようだが、来年度以降ホタルの発生個体数に変化などがある可能性があるため今後とも調査を続けていく必要があると考える。環境の変化によってどのような変化が見えるのか、この先も観察、調査を継続していく所存である。

昨年度、今年度からホタルには1回のピークがあったことが考えられる。それが本当に雨で分断されているか来年度もあるのかという点でも注目すべき点でもある。雨によって引き起こされるのかそれとも別の理由なのかという点でも調査すべき点である。

今年度はアンケートも場所や内容を一部変更したため来年度以降も続けていき、年にまたがってどういう結果が得られるかなども調査していく必要があると考える。

5 水質調査

5-1 水質調査 経緯

水質調査は、ゲンジボタルがどれだけ住みやすい環境にいるのかを測るために行った。ゲンジボタルの幼虫が水中に生息しているので、水中の環境を知るために鬼ノ窪川の水質調査を行った。この調査では全て共立理化学研究所のバックテストを使用した。昨年までは年4回行ったが、今年度は雨の影響などにより今年度は7、10、11月の3回行った。

今年調査した項目は、水温、気温、水素イオン濃度、リン酸イオン濃度、硝酸イオン濃度、亜硝酸イオン濃度、溶存酸素要求量、科学的酸素消費量、マグネシウム硬度、カルシウムイオン濃度、全硬度、鉄、硫化水素の計12項目を調査した。調査方法は鬼ノ窪川の上流から下流まで10m間隔で区切り、10箇所ですべて計測を行った。

水素イオン濃度以外の単位はmg/lである。グラフの黒い線は参考適正值（板橋区ホタル生態環境館の阿部宣男氏から）を表す。

5-2 今年度の調査結果

・水温

ゲンジボタルの幼虫が生存できる水温の範囲は2℃～28℃とされている。2014年度は、昨年と同じくゲンジボタルが生息しやすい環境であることが言え、問題のない数値と言える（図5-1）。

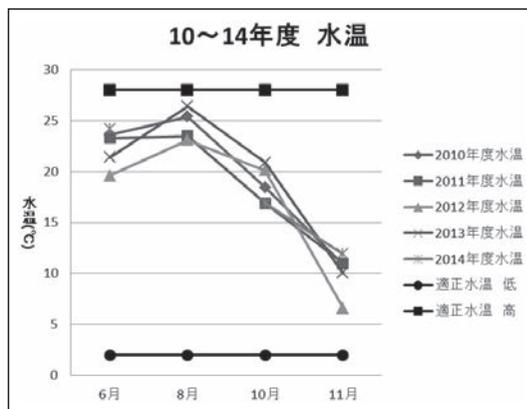


図5-1 鬼ノ窪川の水温

・水素イオン濃度 (pH)

水質の指標として、酸性、アルカリ性とおよそ中性～弱アルカリ性どちらであるかを測るために測定している。ゲンジボタルが生息するためには6.5～8.3が適しているとされて

いる。今年（2014年度）は6月、11月は適正数値であったが、10月は数値が上がっているため、来年度は注意する必要があると言える（図5-2）。

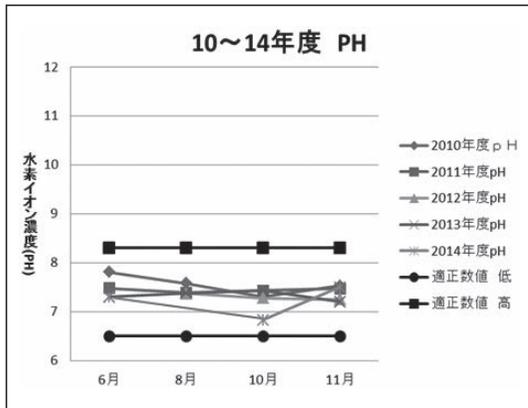


図5-2 鬼ノ窪川の水素イオン

• リン酸イオン濃度 (PO_4^{3-})

リン酸は、水中生物の死骸や糞から出るものであり、水中に有機的な汚れをもたらす。また、富栄養化の指標でもあるため、調査を行った。ホタルの生息には、リン酸イオンの濃度が0に近いほど良いとされている。鬼ノ窪川のリン酸の数値は、2011年から3年間は0.15mg/l以下であり、問題はなかったが、今年度の10月のみ数値が上がっていた。しかし、11月には元の数値に戻っているため、問題はないと言える（図5-3）。

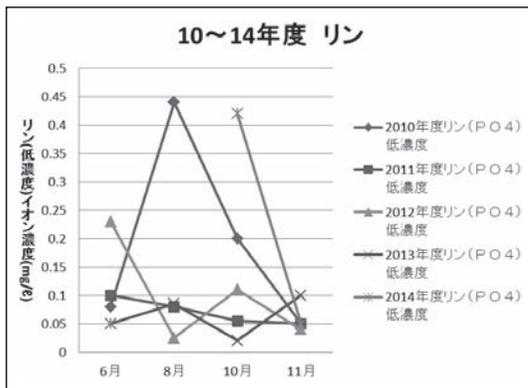


図5-3 鬼ノ窪川のリン酸イオン濃度

• 硝酸イオン (NO_3^-) 濃度、亜硝酸イオン (NO_2^-) 濃度

硝酸、亜硝酸もリン酸と同じく、水中生物の死骸などから水中に溶出する。亜硝酸、硝酸、リン酸は水中に有機的な汚れをもたらす、富栄養化にも繋がるため、この2つの項目も調査した。

硝酸は0.44mg/l、亜硝酸は0mg/lに近いほどホタルの生息に適しているとされている。

硝酸は今年も約2.2mg/lと高く、特に10月には3.8mg/lまで上がっているため今後とも注意が必要かもしれない。亜硝酸は今年も数値が低く、11月には0mg/lでホタルにとっては一層住みやすい数値になり、問題ない数値と言える（図5-4、図5-5）。

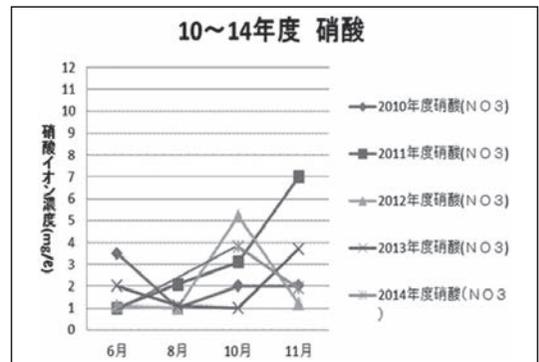


図5-4 鬼ノ窪川の硝酸イオン濃度

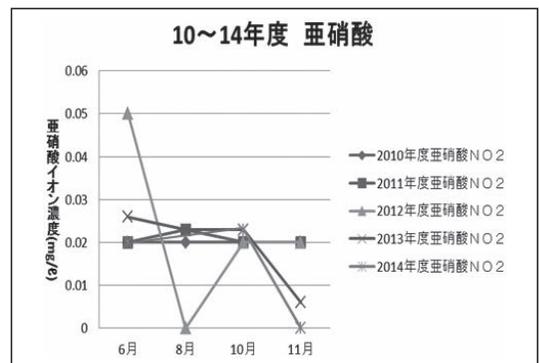


図5-5 鬼ノ窪川の亜硝酸イオン濃度

• 溶存酸素濃度 (DO)

溶存酸素量は、水生生物が使うことのできる酸素がどれくらいあるかを測定するためにを行った。

ホタルの生息には、6.8以上が好ましいとされていて、鬼ノ窪川では2011年から6.8以上を計測していることが多いため、鬼ノ窪川の溶存酸素量はホタルにとって良好な数値と言える (図5-6)。

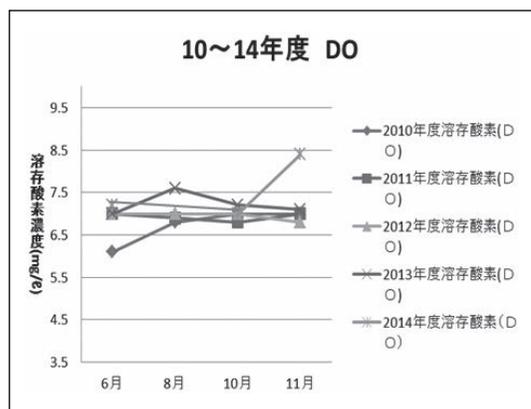


図5-6 鬼ノ窪川の溶存酸素量

• カルシウムイオン濃度 (Ca²⁺)

カルシウムイオンはゲンジボタルの餌であるカワニナの栄養分であり、ホタルの生息には50以上が好ましいとされている。

昨年度の11月と今年度の6月にかなり数値が下がったが、10月、11月には適正値の50mg/lに上がっているため、ホタルの生息には一層住みやすい環境になったと言える (図5-7)。

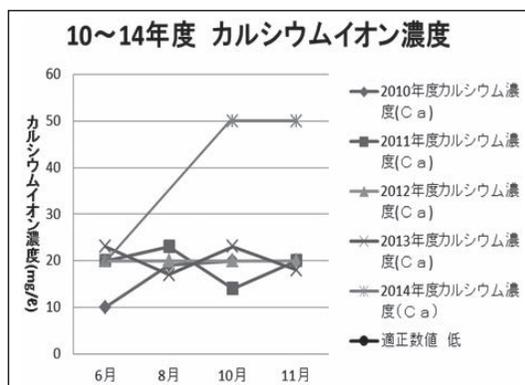


図5-7 鬼ノ窪川カルシウムイオン濃度

• 化学的酸素要求量 (COD)

人工的な化学物質による水の汚れを調査する時の指標とすることが多い (板橋区ホタル生態研究館の阿部宣男から)。CODは止水の水質調査指標であるため、ゲンジホタルの生態に多大な影響がある可能性もある。

今年は7mg/lで例年よりも低い数値であり。ホタルの生息には良好な数値に近づいたと言える (図5-8)。

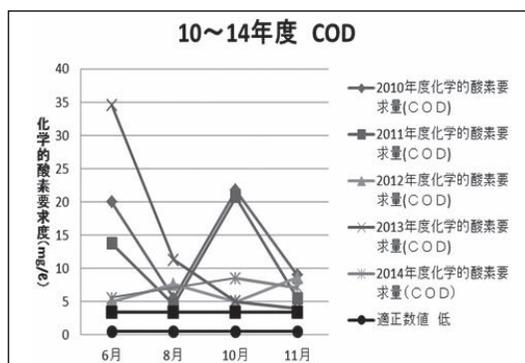


図5-8 鬼ノ窪川の化学的酸素要求量

• マグネシウムイオン濃度 (Mg²⁺)

ホタル環境館の阿部宣男氏によると、ゲンジボタルはマグネシウムを摂取したカワニナを幼虫期に摂食しマグネシウムを吸収することで発光が強くなると言われている。5~15mg/lが適しているとされていて、今年

は15mg/ℓであったので、ゲンジホタルの発光が強くなるのに向いている濃度であったと言える（図5-9）。

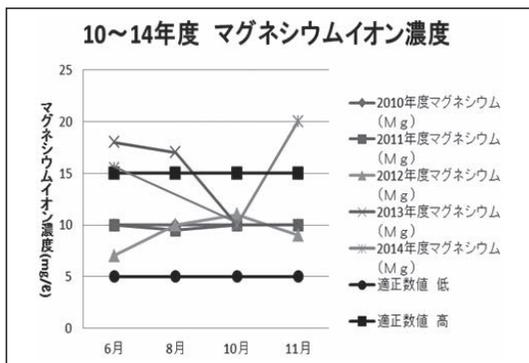


図5-9 鬼ノ窪川のマグネシウムイオン濃度

・全硬度 (TH)

ゲンジボタルは全硬度100以下の軟水を好むと言われている。今年は11月以外は適正数値を超えているが、11月には適正地に戻っているの、あまり問題はないと言える（図5-10）。

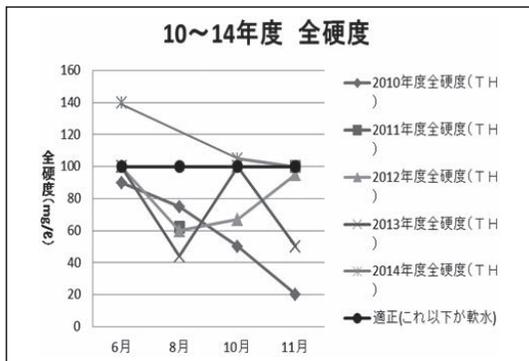


図5-10 鬼ノ窪川的全硬度

・鉄イオン濃度 (Fe²⁺、Fe³⁺)

鉄イオンは、ゲンジホタルの餌であるカワニナのマグネシウムやカルシウムの吸収を助けるとされている。鉄が不足するとカワニナはマグネシウムやカルシウムを吸収できないとされているが、今年度は例年よりも数値が

高く、カワニナの成長には良好な環境であったと考えられる（図5-11）。

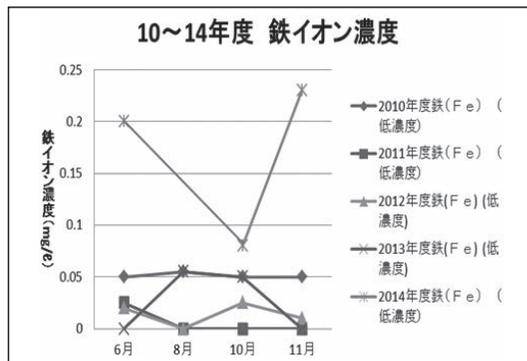


図5-11 鬼ノ窪川の鉄イオン濃度

・硫化水素濃度 (H₂S)

硫化水素は川にある腐葉土などの量を測る指標となる。0mg/ℓに近いほどゲンジボタルの生息に適しているとされている。昨年の11月の計測で硫化水素濃度が上がっていたが、今年は下がっているので問題ないと言える。（図5-12）

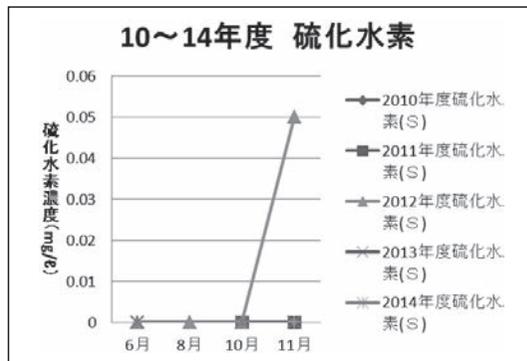


図5-12 鬼ノ窪川硫化水素濃度

5-3 考察

今回の水質調査で特に変化が大きかったのは、リン酸イオン濃度、カルシウムイオン濃度、鉄イオン濃度の3種類で、水質調査の結果からいえるのは、カルシウムイオン (Ca²⁺)、リン酸 (PO₄³⁻)、鉄 (Fe) が倍以

上に増えている月があり、原因は判明していないが、ゲンジボタルの主食であるカワニナの殻が変化して増えた。また鬼ノ窪川源流の玉川学園の圃場から肥料が雨で流れてきた可能性もある可能性があると考えられている。

来年以降も、今年の変化を踏まえて、水質の変化が来年の成虫個体数の生態に影響が出るのか調査をしていきたい。

また、来季の課題として、カワニナの調査（生物調査と同じ方法で行う）も行い、カワニナの生息数も新しく調査していきたいと考える。

6 和光大学パレストラ屋上池・三又水田沼ホトケドジョウ調査

我々かわ道楽は、毎月第二水曜日と毎週月水金曜日にホトケドジョウの生息状況の調査をおり、繁殖・保護、自然個体群の確認もしている。これからこの調査を通して、我々とホトケドジョウとの関係を論じていく。

そもそも、ホトケドジョウという動物種はいったいどんなものなのだろうか、まずはそれを明らかにしていく。

川那部ら（1989）によると、ホトケドジョウ（*Lefua echigonia*）は、成体での体長が6 cm程度の淡水魚である。中国地方西部を除く本州や四国東部に分布しており、流れの緩やかな細流の砂底や砂泥底に生息している。関東地方では、主に湧水がある水田用水路に多く生息している。また、近縁種が中国大陸や朝鮮半島にいとされているが、ホトケドジョウは日本の固有種とされる。体長は5 cm～6 cmとドジョウよりも短く、比較的太い体をしている。頭部はほぼ扁平で、口は下側に

ついており、口髭はその上と下に4本ずつある。また、体色は全体的に茶色で黒い斑点があり、雌雄の差はあまり目立たず、判別が付きにくい。ドジョウとは異なり、浮き袋が発達しており、水草の間など中層を単独で泳いでいることが多い。産卵期は6月から9月であり、水草などに粘着卵を産み付ける。

ホトケドジョウの分布域は上記にある通り広範囲に及ぶが、その個体数は現在減少傾向にある。この原因は、開発による水田の宅地化が激化したことや、乱獲・水田等への農薬散布の影響による生息域の減少とされる。それ故に、環境省のレッドデータブック（生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を科学的・客観的に評価し、その結果をまとめたもの）に絶滅危惧 I B類「近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの」として登録されている。また神奈川県レッドリストにも絶滅危惧 I B類に指定されている（環境省レッドデータブック 平成25年）。

では次に、その絶滅危惧種であるホトケドジョウを我々が保護・観察することになったいきさつを述べていく。

和光大学のある岡上地域では、2000年の鶴見川流域ネットワーク（TRネット）の調査を皮切りに見られなくなったので、ホトケドジョウは絶滅したと思われていた。しかし、2005年6月7日に行われた同校の講義「フィールドワークで学ぶA」でホトケドジョウの稚魚が三又水田にて確認された。稚魚だったため判別が困難だったが、当時の慶応大学教授岸由二氏に後日、確認を依頼しホトケドジョウと断定された。この稚魚が発見された三又水田沼は和光大学近くに位置する。川井田谷戸が分岐する場所で、一方は小田急

電鉄小田原線線路の反対側へ、もう一方は和光大学下の道沿いに杉山下、鬼ノ窪川方面へ伸びている。用水路の水は水田に供給され、水田からあふれ出た水は下流で再び用水に戻りコンクリート張りの暗渠を経て鶴見川に流れ込んでいる。その他に二か所の湧水があり、非灌漑期のホトケドジョウは湧水点とその周辺で生息していると考えられている。

このことをきっかけに、和光大学堂前研究室の水槽でのホトケドジョウの飼育を開始した。しかし、水槽では伝染病のリスクがあり、繁殖も困難であるという理由から別に飼育する場所が必要になった。そこで、2006年に新たに設置された同校の新体育館、パレストラの屋上にある溜め池(屋上池)にホトケドジョウを放流した。さらに、より自然に近い状態で生息させるため、2007年、三又水田沼に放流した。この沼は、三又水田の地権者の方にお願ひし、水田の一部をお借りして作ったものである。水の容積を増やすことでホトケドジョウの生息域を拡大した。これにより、屋上池での個体密度が高くなり繁殖が困難とみられた場合には稚魚のみを堂前研究室の水槽に移し、また水槽の個体の中で6cm以上に成長した成体を三又水田沼に放流している。つまり、ビオトープ環境と管理された環境の両方の状況のホトケドジョウを比較観察できるのである。

6-1 調査方法

毎週月・火・水に行う調査は、屋上池と三又水田の図6-1の地点⑬と⑭で行われる。調査内容は、それぞれの天気・気温・水温および確認したホトケドジョウの個体数である。この週三回の調査はかわ道楽全員で協力して

分担で行っていて、ここからかわ道楽の活動およびホトケドジョウに興味を持ってくれる人も少なくない。

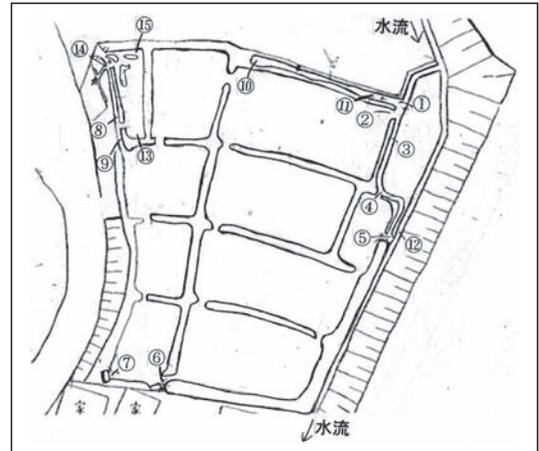


図6-1 三又水田沼地図

毎月第二水曜日に行う三又水田沼の調査は、朝の9時から図6-1の地点①から地点⑮までの全ての地点で行われる。調査内容は、毎週のものとはほとんど変わらないが、目視だけでなく網による生物調査も行っている。これに加え、年に3回、この調査と一緒に水質調査も行っている。初めは、水素イオン濃度、リンイオン濃度、アンモニウムイオン濃度、硝酸イオン濃度、亜硝酸イオン濃度、カルシウムイオン濃度、化学的酸素消費量も調査していたが、これらの項目はホトケドジョウの有無による大きな変化が見られなかったため、また、岸由二氏の助言もあり省略された。現在は溶存酸素濃度(DO)のみを見ている。

また、調査をする際、タモ網を使い足で生き物を追い込む「ガサガサ」という手法と一緒に網にかかった水生生物の調査も行っている。その中には、外来種であるアメリカザリガニがかかることもある。アメリカザリガニはホトケドジョウの繁殖の妨げにもなるの

で、度々駆除することもある。水田沼の周りにはキショウブも生えているが、これも外来種であるとされる。キショウブがある事で景観がよくなっているものの、キショウブが必要以上に群生してしまうことによって、農作業の妨げになることがある。そういった点も考慮し、我々はホトケドジョウの世話および調査を行っている。

6-2 パレストラ屋上池と三又水田沼の個体数の経過

2006年、屋上池に初めてホトケドジョウを放流した個体数は成魚8匹であった。また酸素供給や温度調節のための水草としてアサザ、マツモを一緒に入れた結果、100匹以上の稚魚が誕生した。翌年はホトケドジョウの繁殖を確認することはできなかったが、更に翌年の2008年には稚魚が30匹近く確認された。これは夏季の水温を下げるために浮草を浮かばせた結果だと考えられる。

2009年、環境収容力に基づき屋上池の成魚個体数を13匹に調整するようになった。これにより、例年かなりの数の稚魚が発見されるようになったのである。その年の稚魚は86匹確認され、その内59匹を研究室の水槽に移動させた。2010年には55匹の稚魚を確認し、2011年は34匹を研究室に移動した。しかし翌年である2012年に研究室の稚魚が全滅してしまう。原因は伝染病だと考えられる。2013年7月15日に屋上池にて、稚魚28匹、成魚20匹確認され、稚魚28匹を全て研究室に、成魚7匹を水田沼に移動した。結果、2014年6月20日に確認されたホトケドジョウは、計44匹確認された。成魚12匹、稚魚32匹である。そのうちの稚魚、31匹を堂前研究室水槽に持って

いき、もともと水槽にいた成魚24匹のホトケドジョウは水田沼へ放流した。

6-3 三又水田沼調査結果

今年度の三又水田沼ホトケドジョウ調査は以下の通りになった（図6-2）。昨年度も今年度も8月から10月にかけてホトケドジョウが多く確認されている。これは8月以降の三又水田の土用干しが関係しているだろう。水田の水が少なくなりホトケドジョウの生息域が狭まったことにより、ホトケドジョウが多く密集したのである。

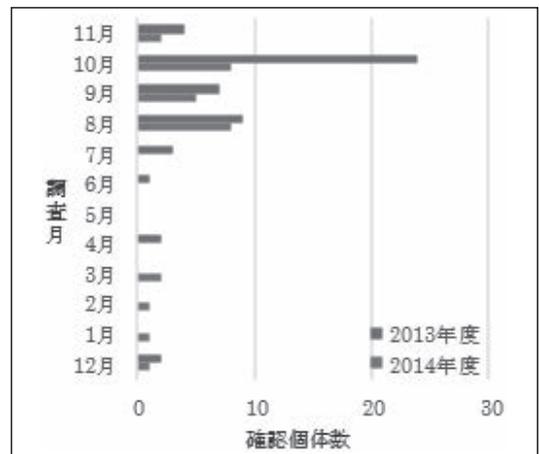


図6-2 三又水田沼月別確認個体数

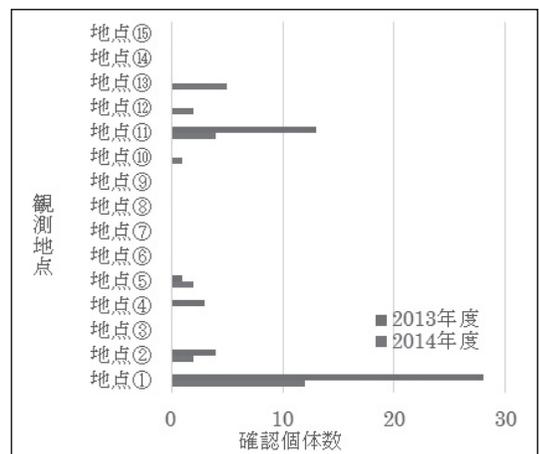


図6-3 三又水田沼地点別確認個体数

また、この時期は夏が終わり、水温がホトケドジョウの好む20℃～25℃の範囲であったことから、繁殖が多く行われたとも考えられる。しかしながら、昨年度は6、7月から10月にかけて一気に数が増えているのに対し、今年度は繁殖が始まるとされる6、7月には全く確認されてなく、8月から10月にかけての伸び幅も緩やか、というよりはむしろほぼ変わっていない。また逆に、まだ寒いころから温かくなり始めのころの1月から3月にかけて、わずかであるがホトケドジョウが確認されている。考えられる理由としては、何らかの要因で生息域が広がった可能性があるということだ。地点別でみると、去年は確認できなかった地点⑩⑫⑬においてホトケドジョウが確認されているのが分かる(図6-3)。地点⑩⑫⑬はそれぞれ水量が豊富な場所に位置している。

次にDOの値も見ていこう(図6-4、図6-5)。全体的に7mg/l前後あるため、数値上はどの地点であってもホトケドジョウは活動できることになる。ホトケドジョウが確認された地点では4mg/l以上ある。

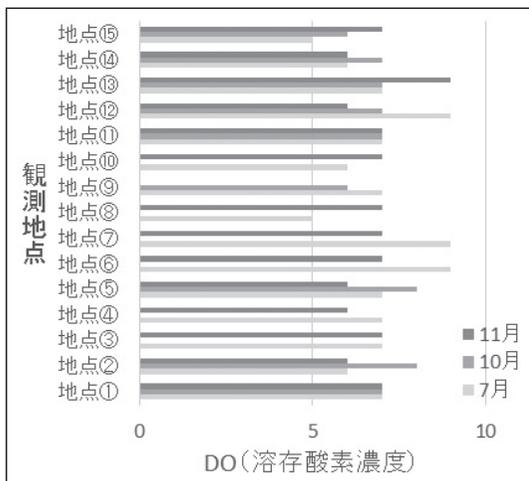


図6-4 三又水田沼溶存酸素濃度

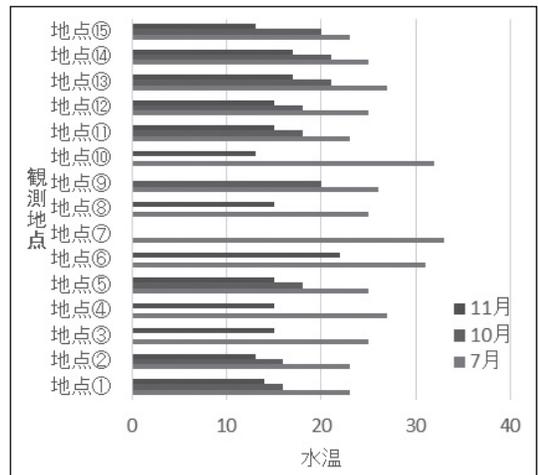


図6-5 三又水田沼地点別水温

6-3 パレストラ屋上池調査結果

屋上池の確認個体数は以下のとおりである(図6-6)。昨年度と比較すると、全体的に確認されている個体数が増加している。それに加え、池の底に溜まっていたヘドロも取り除いたことで、屋上池内の水質が改善されたと考えられる。それにより、ホトケドジョウが棲みやすい池になったので、繁殖がうまくいったのである。

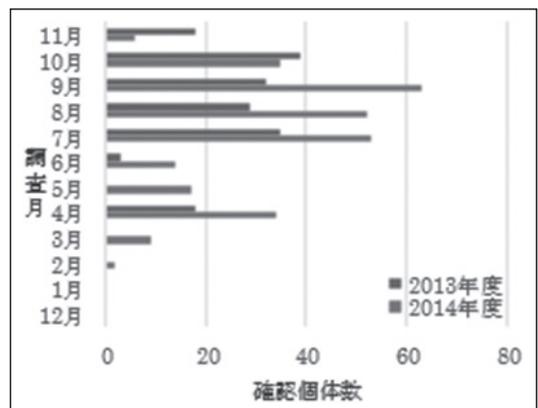


図6-6 屋上池月別確認個体数

また、屋上池および水田沼の最高最低水温のグラフ(図6-7、図6-8)を比較すると、季節変動の仕方がほぼ一致するが、屋上池では

10月に30℃以上が記録され、6月に三又水田沼で30℃以上を記録しているのに、屋上池は高温になっていない。この違いは水田は湧水に依存し、屋上池は雨水だからであるかも知れない。6月から8月にかけての最低水温は屋上池の方が高く、ホトケドジョウが繁殖する20～25℃の範囲に近くなっている。

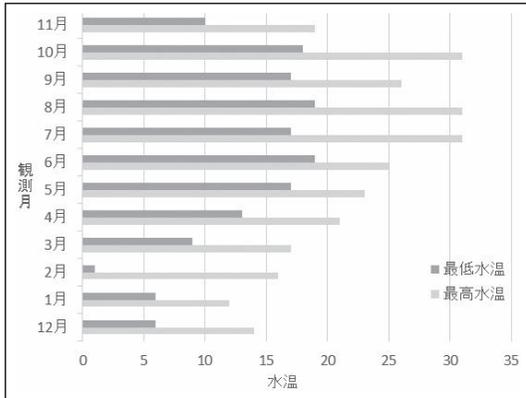


図6-7 三又水田沼月別最低最高水温

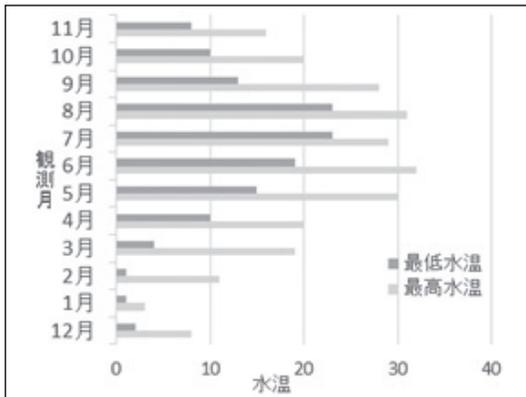


図6-8 屋上池月別最低最高水温

また、それぞれの月別確認個体数のグラフと比較すると、20～25℃に近い最低最高水温を記録した月では、ホトケドジョウが増えていく事が分かる。水田沼と屋上池で僅かながら、ホトケドジョウの繁殖期のずれが生じたことは明白である。グラフを見る限り、屋上池が6月ごろ、水田沼は7月に行われたと考

えられる。このことから、外環境によってホトケドジョウは繁殖期が変わるという事が言えるのではないかな。

6-4 今後について

三又水田沼は度々地域の子供たちの遊び場にもなっているが、ザリガニなどに紛れてホトケドジョウを捕ってしまう可能性があり、地域の人たちとさらに協力しホトケドジョウを守る必要がある。また、ただ研究のためにお借りしている場ではなく、岡上地区の一角という事を考え、地域の人にとってもホトケドジョウにも、よりよい環境を模索し、研究を進めることが大切だと考えている。

7 大正橋生物調査

7-1 調査目的・概要

鶴見川は、鶴見駅から和光大学間にまたがる大正橋の真下を流れる一級河川であり、町田市小山田を源流として横浜市鶴見で東京湾に流れ込んでいる。大正橋はこの川の源流地域に当たる。この大正橋は小田急線高架下と川井田人道橋の間に位置しており、和光大学生は日々、通学路の真横を流れる鶴見川を眺めながら大正橋を渡り和光大学へと登校していく。我々かわ道楽はこの大正橋付近にて「大正橋クリーンアップ作戦」や毎月の定例活動等、様々な活動をしている。

この大正橋付近での生物調査は2012年度より本格的に始動したもので、我々の通学路に位置するこの川にどのような動物が生息しているのか、一年を通して調査している。

7-2 調査方法

年間を通して定点観測を行う。ポイントとしては実施時間は1時間とし、同じ10時半～11時半頃の時間帯で調査を行う。調査に使用する器具はタモ網と投網。タモ網は「ガサガサ」という足を使ってタモ網に動物を追い込むような方法で使用し、投網による採取は努力量を同じにするため、決まった6ヶ所でそれぞれ1回ずつ投げ調査を行った。

採取した生物は魚類なら最大体長と最小体長を含めた5匹の体長を計測し、残りは匹数のみをカウントする。その他の甲殻類や貝類、水生昆虫等の体長は計測せず、匹数のみをカウントしている。

また、普段行っている定点観測の他に、環境教育イベントとして「さがまちカレッジ夏期講座」「麻生区文化教会夏休み親子教室」「鶴見川流域クリーンアップ作戦」等のイベントでも生物の採取を参加者と一緒に行い、採取した生物の説明と共に同様の記録を行っている。

7-3 今年度確認できた動物種

大正橋付近で今年度確認できた水生動物種は、以下の通りである。

I 脊椎動物（魚類）

キュウリウオ科

アユ (*Plecoglossus altivelis*)

コイ科

オイカワ (*Zacco platypus*)

カマツカ (*Pseudogobio esocinus*)

タモロコ (*Gnathopogon elongatus*)

モツゴ (*Pseudorasbora*)

アブラハヤ

(*Rhynchocypris logowskii steindachneri*)

ドジョウ科

ドジョウ (*Misgurnus anguillicaudatus*)

ハゼ科

カワヨシノボリ (*Rhinogobius kurodai*)

トウヨシノボリ (*Rhinogobius kurodai*)

ナマズ科

ナマズ (*Silurus asotus*)

メダカ科

メダカ (*Oryzias latipes*)

II 節足動物（昆虫）

アメンボ科

シマアメンボ (*Metrocoris histrio*)

アメンボ (*Aquarius paludum paludum*)

カワトンボ科

ハグロトンボのヤゴ (*Calopteryx atrata*)

サナエトンボ科

コオニヤンマのヤゴ (*Sieboldius albardae*)

オニヤンマのヤゴ (*Anotogaster sieboldii*)

ヤマサナエのヤゴ (*Asiagomphus melaenops*)

ミヤマサナエのヤゴ (*Anisogomphus maackii*)

エゾトンボ科

コヤマトンボのヤゴ (*Macromia amphigena*)

ヤンマ科

ミルンヤンマのヤゴ (*Planaeschna milnei*)

カワトビゲラ科

クロヒゲカワトビゲラの幼虫 (*Trichoptera*)

ガガンボ科

ガガンボの幼虫 (*Tipulidae*)

III 節足動物（甲殻類）

ヌマエビ科

ミズレヌマエビ (*Caridina leucosticta*)

アメリカザリガニ科

アメリカザリガニ (*Procambarus clarkii*)

Ⅳ軟体動物類

シジミ科

タイワンシジミ (*Corbicula fluminea*)

モノアラガイ科

モノアラガイ (*Radix auricularia japonica*)

Ⅴ環形動物類

イシビル科

シマイシビル (*Erpobdella lineata*)

今年度はカワムツやアブラハヤ、モクズガニ等、昨年度確認できたいくつかの生物は確認できなかったものの、タモロコやトウシノボリなど中々確認できない水生動物種に加えて、凡そ4年ぶりに大正橋付近にてアユが確認された。鶴見川でアユが確認された場所としては、この小田急線線路下から川井田人道橋の間が最上流域である。

7-4 気温・水温の変化

採取場所における気温・水温の変化は図7-1のとおりである。今年は昨年、一昨年に比べ急激な気温の変化もなく、水温も常に気温より2～3℃低い温度を保ち続けている。

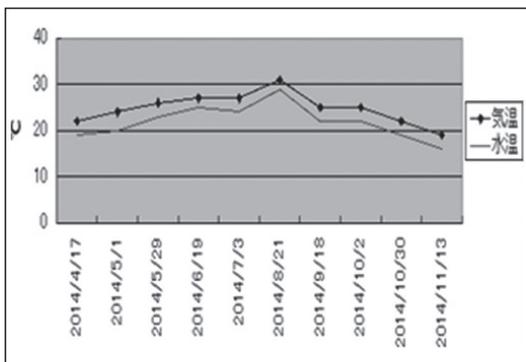


図7-1 2014年度の鶴見川大正橋付近における気温と水温の変化

7-5 オイカワとカワヨシノボリの体長と個体数の変化

調査場所で確認される魚類の中でも数の多いオイカワとカワヨシノボリについては、年間における個体数や体調の変化を計測している。

・オイカワ

年間を通してのオイカワの変化は図7-2に示したとおりである。5月1日、8月21日、11月13日の調査に、確認個体数の上昇と最小体長の落ち込みが見られる。特に8/21は顕著で、20mmに満たない大きさの稚魚が多く確認されている。

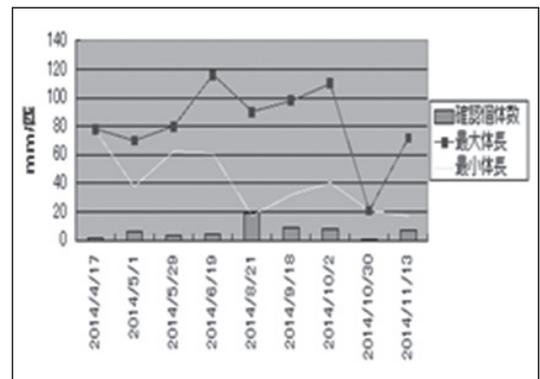


図7-2 鶴見川大正橋付近におけるオイカワの個体数と体長分析

・カワヨシノボリ

年間を通してのカワヨシノボリの体長変化は図7-3のとおりである。カワヨシノボリに関しては個体数は比較せず、最大体長と最小体長のみを記録し比較した。これは日によって調査人数が異なり、努力量が一定しないため個体数を比較し辛かったためである。

最大体長と最小体長が一致している部分は採取したカワヨシノボリが1匹のみの日である。

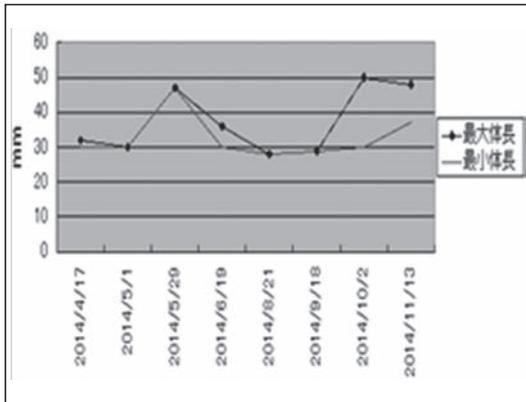


図7-3 鶴見川大正橋付近におけるカワヨシノボリの体長分布

7-6 考察

オイカワについて昨年度の調査結果からたてた仮説は「オイカワの繁殖期は5月頃と7月後半頃の二回」であった。しかし、今年度のオイカワの体長変化と発生個体数をグラフにあらわしてみると、5月1日、8月21日、そして11月13日の三度にわたって確認個体数の上昇とそれに伴う最小体長の落ち込み、即ち稚魚の発生が見て取れる。このことから、「オイカワは5月、8月、11月に産卵・繁殖しているのではないか」という仮説が成り立った。

一方、カワヨシノボリは昨年度たてた仮説通り、約3ヶ月で稚魚から成魚になっていると考えられる。グラフを見ると、5月の頭まで小さかった個体が終わりごろになると大きく育っているのが分る。そこから8月頃にかけて体長が落ち込んでいることから、夏の間世代交代が行われていることを示しているようである。そこから再び体長の変化が上昇を示し、10、11月頃には5月の終わりと殆ど変わらない体長にまで成長しているのが確認できた。

今年で調査をはじめて3年目になるが、ま

だまだ不確定要素も多く今後の調査が必要。これからも調査を続けていこうと思う。

8 アンケート調査

『「かわ道楽」自然と体験の関わり方』

8-1 アンケート調査 経緯

1章で述べたように、環境保全サークルである「かわ道楽」には数多くの学生が集まり、活動をしている。かわ道楽が加盟している鶴見川流域ネットワークのなかでは、我々かわ道楽は若さと人数を誇っている。他団体にとっては参加人数の少なさは重大な問題である。そして、一見地味な印象のある環境保全を行なっているサークルになぜ学生が集まるのかという疑問が残る。我々自身も持っている。そこで学生が集まる要因として一つの仮説を立てた。「かわ道楽に集まる学生は、幼少時代（小学生時代）に自然の中での体験を多く経験していたのではないか」そして「自然の中での経験が多かった人が自然環境に興味があり、環境保全活動に参加しようと思うのではないか」という仮説をもとに疑問を究明したく、アンケート調査を試みることにした。そのうえで、体験の差で現在の自然への関わり方が変化するかを検証するために対照群として他サークルにも同様にアンケート調査を実施した。アンケート調査を協力してもらった学生は野球サークルのRISEや空手部といった運動系団体に所属している学生である。

8-2 アンケート概要

被験者はかわ道楽所属学生29名（男24名、女5名）、運動系団体所属学生33名（男26名、女7名）

アンケートは記号選択式で回答する形をとり、かわ道楽と運動系団体に共通して小学校時代の経験を問1～問6において質問し、現在の思考について問8、9で質問をした。さらにかわ道楽のみで問10～問13の質問を設けた。

問1. 小学校時代の遊び場

外と中で遊び場に違いがあるのか

問2. 野生生物の採取経験

採取経験がある方が自然に入っているのではないのか

問3. 自宅から自然のある場所への所要時間

自然が近くにあるのか

問4. 自然に関わりそうな項目の経験の割合

多く経験している方が自然に関わっているのではないのか

問5. 野生生物を採取し食した経験の割合

食べる経験は知識を持っているのではないのか

問6. 栽培・飼育した物を食した経験の割合

手間をかけてまで食べることは

問8. 生物・場所についての嗜好

現在の嗜好は幼少期と関連があるか

問9. 環境配慮を心がけているか

環境をどう意識しているか

問10. かわ道楽参加のきっかけ

かわ道楽の魅力は何か

問11. 現活動で好むもの

どの活動が人気なのか

問12. 活動をして良かった時

問13. 活動をして良かった点

かわ道楽の良さは何か (問12. 13)

以上の質問でアンケートを実施した。

8-3 アンケート結果：かわ道楽と他の学生との比較

問1の小学生時代の遊び場について、「屋外・どちらかといえば屋外・どちらかといえば屋内・屋内」と選択肢を準備した。かわ道楽、運動系団体のどちらも共に、どちらかといえばという回答を含めると屋外が多いことに変わり無く、小学生時代の遊びの場には差ほど違いは無いことが分かった。

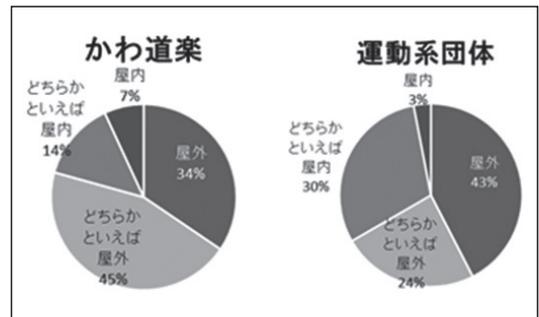


図8-1 問1 「小学校時代の遊び場」への回答

問2の野生生物の採取経験については違いがあり、その差は有意であった(相関分析、 $P < 0.05$)。かわ道楽では86%の人が採取経験があると回答しているのに対し、運動系団体では61%に留まっている。どちらも多い回答は「ある」という回答だったが、二番目に多い回答に差が表れたように思える。かわ道楽は「よくある」で、運動系団体は「あまりない」という結果から、かわ道楽に所属している学生は日常的に野生生物の採取をしていたのではないかと考えた。採取していた生物については、両者に違いは見られず、バッタやセミ、カブトムシといった昆虫が多く、女子学生の回答では植物が多かった。

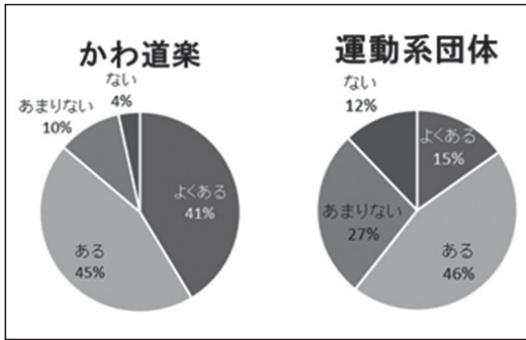


図8-2 問2「野生動物の採取経験」への回答

問3では自宅から自然に関われる場所への所要時間を選択してもらった。

我々が挙げた自然に関われる場所は山・川・海・公園・野原・森林である。山、川、公園の回答では両者共に同様の回答結果になった。山への所要時間が60分以上が一番多かったものの、次に多いのは30分未満で山の存在が近い人と遠い人の両極端であると考えられる。川が10分未満にあった人はおよそ50%で、公園が10分未満にあった人はおよそ90%と多く、川や公園は比較的誰にとっても近くにある自然に関われる場所だったのではないかと考えられる。

両者で違いが表れたのは野原と森林の所要時間である。特に野原は有意差（相関分析、 $P < 0.05$ ）が見られた。運動系団体では野原まで60分以上かかるという回答が一番多く48.5%なのに対してかわ道楽では17.2%と二番目に少ない回答で、かわ道楽では10分未満の37.9%が一番多く、運動系団体では18.2%と二番目に少ない回答である。川道楽のメンバーの方が野原に近い所に居住していたと考えられる。

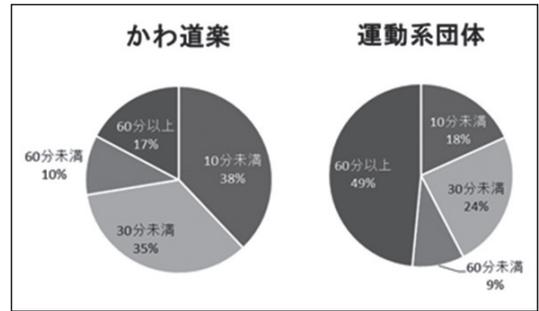


図8-3 問3「自宅から野原までの所要時間」への回答

また、森林についてもかわ道楽の学生にとって森林は近くにあるが、運動系団体の学生には近い場所ではないという傾向はあるものの有意な差は見られなかった。以上より、野原が自宅からどのような位置関係に存在しているかによって、野生動物に触れる機会の差につながり、さらに問2の野生動物の採取経験にも差が表れたのではないだろうか。

問4の小学生時代に体験したことでは川遊びとキャンプの二つの項目で有意な差が表れた（相関分析、川遊び $P < 0.05$ 、キャンプ $P < 0.05$ ）。川遊びでは、運動系団体の85%が「よくある」又は「ある」と回答していて、川遊びは多くの人が頻繁に体験するものかと思いきや、かわ道楽では55.3%と体験者は少ない。問3の回答から考えて川への所要時間は差が生じていないが、体験には差が生じたことになる。このことから、かわ道楽の学生の近くにあった川は、川遊びが出来るような川ではなく、汚かったり、川に近づけない都市型の川だったのではないかと推測できる。

また、キャンプについては川遊び以上に有意な差があり、かわ道楽ではキャンプの体験をしていない人が28%で運動系団体の6%と比べると4倍と高い。「あまりない」もかわ道楽は41%と、運動系団体の15%と比べると

高い。川遊びとキャンプが一緒に行なわれてイメージがあるから、川遊び体験が少ないかわ道楽がキャンプの体験も少ないことは腑に落ちる。

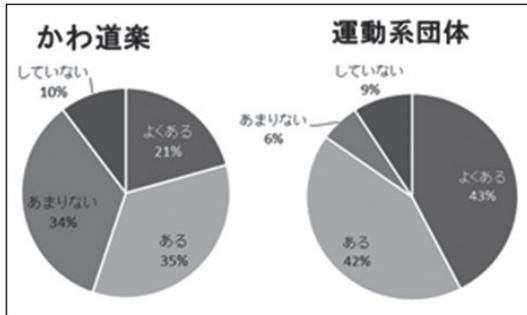


図8-4 問4「川遊びの経験」への回答

他の13項目（野菜作り、田植え、動物の飼育、山登り、木登り、釣り、雪遊び、ピオトープ作り、虫取り、動物園に行った、水族館に行った、植物園に行った、自然公園に行った）については、両者で有意な差はない。しかし、虫取りについて、運動系団体で体験したことがない学生が9.4%いるが、かわ道楽で体験したことがない学生はいない。こうした体験の差から問2の野生生物の採取の頻度に差が表れたと考えられる。

問5野生生物を採取し食したことの経験を尋ねたところ、あまり経験に差は無かった。食したものとしては、ツツジの蜜、ドングリ、木の実といった植物性のものが多いなか、かわ道楽では、動物を食べた経験がある人もおり、数値的にはあまり差異はないが、内容的な違いは見受けられる

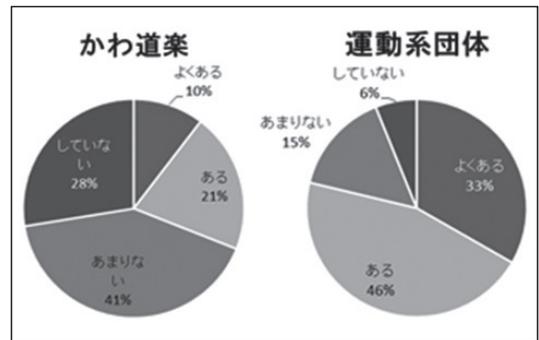


図8-5 問4「キャンプの経験」への回答

問6では採取ではなく、栽培・飼育をした物を食した経験について尋ねたところ、あまり差異はないものの、かわ道楽の方がどちらかといえば経験が多い。食べた物のなかでは、飼育して食べた経験はなく栽培した物のみとなっていた。栽培したものはトマトやキュウリといった夏野菜や米が多く、小学校の授業の一環で育てた物を食していると推測できる。

問8からは現在の自分の価値観で回答してもらった。

問8では、生物や場所に対する思考を回答してもらった。有意な差が生まれたのは「魚」についてのみで、その差は顕著に表れた（相関分析、 $P < 0.05$ ）。かわ道楽では「大好き」「好き」と回答したのは96%でほとんどの学生が魚が好きという回答になった。好きという回答は同等の割合で両者にあるものの、運動系団体は大好きだという回答が少なく、あまり好きではないが多い。好きな活動で魚とりが多かったことは、魚が好きという回答が多いことから妥当な結果だったと考えられる。

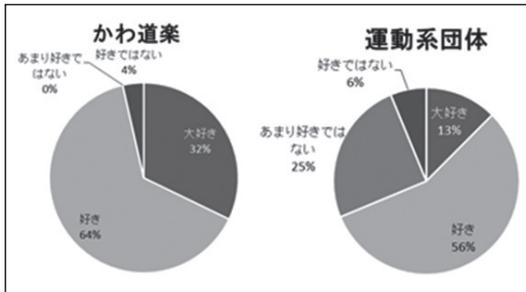


図8-6 問8「魚の好み」への回答

7項目中、動物、植物、山、川、海の5項目では、かわ道楽内であまり好きではないと答える人はいるものの、好きではないと答える人はいなかったが、運動系団体では好きではないと答える人が必ずいたため、その点においては意識的な差異が少しではあるが表れていると考えられる。虫についても有意な差は見られなかった。

問9では信州大学の小島が長野市で行なった2013年のアンケート調査の項目の中から、環境配慮をした生活を心がけているかのアンケート項目を使用した。以下の3項目「イ. 環境に関する情報を入手したり、主体的に学習するようにしている」「エ. 環境問題のことを友人や知人に伝えたり、広げたりするようにしている」「キ. 環境問題の原因を分析し、自分がとるべき行動を考えるようにしている」は両者ともにほとんど回答に違いはなく、この3項目の回答は全て「どちらともいえない」が全体の半数近くを占めていた。有意な差とまでは言えないが、「ウ. 経済的なコストや手間がかかっても、できるだけ環境配慮を優先するようにしている」の項目では両者またしても「どちらともいえない」が多い割合を誇っているものの、3番目に票を集めた回答として、かわ道楽では「そうではない」が21.4%、運動系団体では「どちらかといえ

ばそうである」が18.8%と異なった回答になっていた。このことから、かわ道楽の学生は特に環境に配慮することを重視しているわけではなさそうだとことが判明した。

8-4 アンケート結果：かわ道楽の学生への調査

問10からはかわ道楽の学生のみの質問。問10、12、13は選択肢の中から1位2位の順位づけを1位に2ポイント、2位に1ポイントとポイント換算し集計している。

問10「かわ道楽に入ろうと思ったきっかけ」を尋ねた結果、「先輩の雰囲気良かったから」が一番高いポイントを獲得し、我々の考えていた「環境活動に興味があった」という回答が大半を占めている訳ではなく、先輩の雰囲気や飲み会が楽しかったといった人との関わりがきっかけとなっている。我々としては、参加した活動が楽しかったという回答が多いことが望ましかった。参加した活動が楽しかったから活動したという回答が多ければ、更なるかわ道楽の活動が活発になる見込みがある。

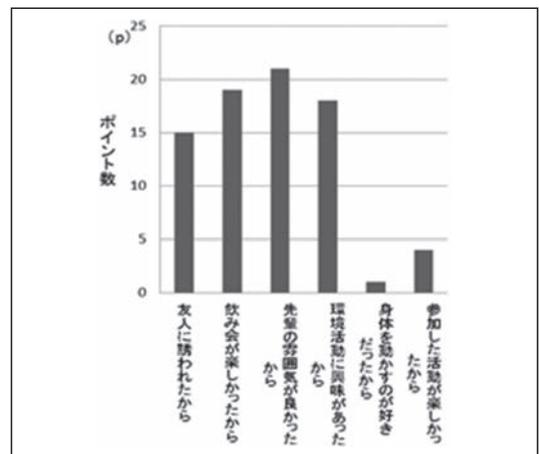


図8-7 問10「かわ道楽参加のきっかけ」への回答

問11「現在の活動で好きなもの」は、「魚とり」と「飲み会」が同ポイントで多く、次いでイベントスタッフも含め、あまり環境保全をする活動ではない。むしろ、外来種駆除や草刈り、植樹等の環境保全の活動内容として当てはまるものを好む学生が少ないことが判明した。その他と回答では、畑仕事や木の伐採だった。

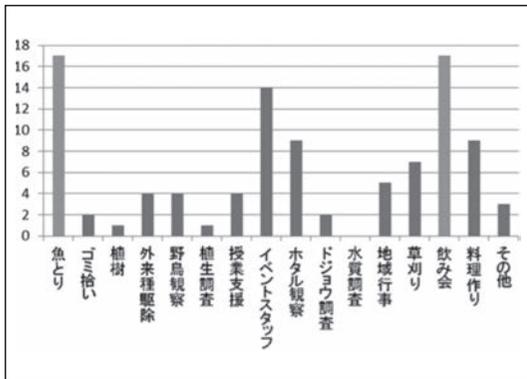


図8-8 問11「現在の活動で好きなもの」への回答

問12「活動をしていて良かったと思う時」では「皆で協力している時」を選んでいる学生が多い。やはり、人との関わりを持つことが良かったと思う時なのだと考えられる。また、問11で好きな活動が飲み会と言う回答が多かったことから想像ができたが、活動後の一杯を楽しみにしていることも判明した。大学近くで体を動かし活動をして、汗を流した後すぐにお酒を飲める環境があることが活動をする起動力になる。

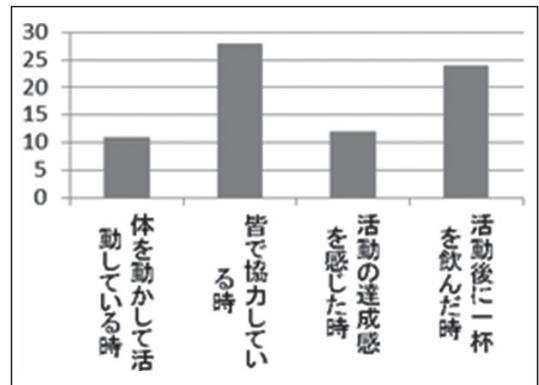


図8-9 問12「活動して良かった時」への回答

問13「活動をしていて良かったと思うこと」の回答では、「サークルの仲間ができたこと」の回答が群を抜いて多く、ここでもやはり、学生同士の人との関わりができて良かったと思っている人が多い事が顕著に表れた。環境活動の知識を得られることが良かったと答える人が多かったことから、事前に環境活動の知識を持っている学生が少なかったとも考えられる。

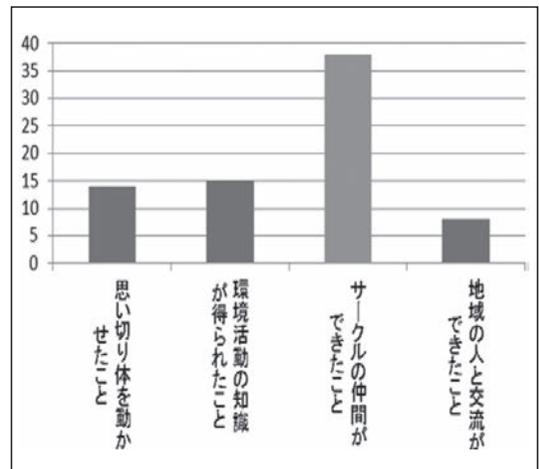


図8-10 問13「活動をして良かったこと」への回答

8-5 考察

かわ道楽に学生が集まる要因として我々が立てた仮説は、「かわ道楽に集まる学生は、幼少時代（小学生時代）に自然の中での体験を多く経験していたのではないか」であったが、かわ道楽に所属している学生と、運動系団体に所属している学生とでは、アンケート調査から小学生時代に自然の中で遊んだ経験はあまり変化が見られなかった。しかし、野原の近さや野生生物の採取経験等の回答から、かわ道楽の学生が日常的に自然に関わる環境に暮らしていたのではないかと推測する。キャンプや川遊びといったイベント的に自然の中に入る体験は対照群よりも少なかった。これは、遠出しての自然体験活動が少ない一方で、身近には自然があったと考えられる。そうした周辺環境の中でどのようにして意識の変化が起こるかはわからないが、自然と関わることに懐かしさを感じ参加していると推測できる。そして自然物は誰でも多くが好んでいるが、かわ道楽は魚を運動系団体の学生よりも好んでいる。

自然体験の重要性は、環境保全をする人間になるということ以前に、幼児教育や学校教育において重要性が求められている。亀山・嶋崎（2011）では、「原体験（protoexperience）は触・嗅・味の基本感覚を少なくとも1つでも含む体験であり、継続的に体験しないと忘れてしまう視・聴覚と違い、1度でも体験すれば一生残る長期記憶になるものである。」と述べられている。環境教育辞典によれば、原体験とは、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（感）で知覚したもので、その他の

事物・事象の認識に影響を及ぼす体験」と定義されている。自然の中での遊びは、視覚や聴覚を多く使うが、生物を触ること、花の香りを嗅ぐこと、木の実を食べること等で、様々な触覚、嗅覚、味覚も使っている。幼少期に自然の中で体験したことは、常に思い返すような記憶には無かったとしても、記憶の片隅に残っているとされているのだ。かわ道楽の学生はその自然の中で体験した記憶が引き出しやすい所にあり、その延長を現在続けようとしているとも考えられる。また、幼少時代に川遊びの経験が少なかったが、現在のかわ道楽の活動で好きな活動で魚とりが多かった結果は、幼少期に川遊びをしたくても出来なかった人が、大学生で出来るようになり、魚とりの楽しさに目覚めたと推測できる。また魚を好む理由として、かわ道楽に参加したことで、魚取りをして魚を好きになった可能性もある。

かわ道楽の学生がサークル活動に参加する理由は、かわ道楽本来の活動の特徴である環境保全活動ではなく、人との関わりから始まり、継続し、かわ道楽の活動は成立し、活動を通してさらにかわ道楽内の仲間意識が向上している。しかし、最近の傾向では地域行事等の環境保全活動以外の活動には学生が多く集まるが、環境保全活動をする定例活動では学生があまり集まらない状況が見られる。地域行事等に楽しく活動に参加できることは良い事であるが、残された貴重な自然を守っていくには環境保全活動は必要であり、人の力が必要である。我々のような学生が環境保全活動を継続して行なうには、楽しむことが必要不可欠だと考えられる。

9 謝辞

本研究および我々の活動は、学生の力のみで行なえてきたものではありません。キャンパス内における調査や環境整備を見守って頂いた資産管理系の皆様。ホトケドジョウ調査の度に、パレストラ屋上池の開錠をして頂いた警備員の皆様。様々なご協力により研究を続けられています。

キャンパス外でも、地権者である宮野薫氏、宮野憲明氏から我々の活動における多大なご理解とご協力を頂いている。さらに岡上西町会の皆様には、岡上における定例活動や調査へのご理解、アンケート調査へのご協力頂き、我々の地域行事に参加にもお誘い頂き、楽しい時間を過ごしている。

本研究8章におけるアンケート調査では、現代社会学科の米田幸弘教授にアンケート作成のアドバイスを頂き、また統計学の知識のない我々にご指導頂いた。

他にも多大なる協力の下、我々は活動を続けている。この場を借りて、かわ道楽に関わる全ての皆様に御礼申し上げます。

【参考文献】

- ・遊磨正秀 (1993) 『ホタルの水、人の水』新評論
- ・東京ゲンジボタル研究所 (2004) 『ホタル百科』丸善
- ・阿部宣男 (2012) 「ホタルよ、福島にふたたび ホタルの輝きは希望の光」アспект
- ・和光大学・かわ道楽研究班 (2012) 『山、川、大学 ―岡上という遊び場を見直そう―』学生研究助成金論文集 (20), 57-84
- ・環境省 生物多様性情報システム『レッドリスト・レッドデータブック』
www.biodic.go.jp/rdb_f.html
(2015年1月23日閲覧)
- ・神奈川県 生命の星・地球博物館『神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006』
nh.kanagawa-museum.jp/kenkyu/reddata2006/2006_07.html
(2015年1月23日閲覧)
- ・川那部治哉、水野信彦、細谷和海『日本の淡水魚』山と溪谷社 1989年
- ・信州大学イノベーション研究・支援センター (2013) 『長野市における環境に配慮した暮らしに関する住民アンケート調査単純集計表 (集計結果報告)』
- ・亀山秀郎、嶋崎博嗣 (2011) 『幼児の原体験と両親の子どもの遊びに対する養育態度との関連性』教育実践学論集 (12), 93-98
- ・東京学芸大学野外教育実習施設 (1992) 『環境教育辞典』東京堂出版75-78

指導教員のコメント

堂前 雅史（現代人間学部）

本論文の前半は、2003年以来、和光大学・かわ道楽の学生たちが代々引き継ぎながら行ってきた一連の環境調査報告である。こうした自分たちが保全している自然環境における動植物相の調査結果報告を受けて、後半では自分たち学生がなぜ地域の自然と深い関係を結ぶのかと問うている。

前半では、絶滅危惧動物ホトケドジョウや絶滅危惧植物タマノカンアオイとキンランの自然個体群の調査、ゲンジボタルの羽化数調査、生息環境水質調査、鶴見川の魚類相調査などの結果が出ている。特に絶滅危惧植物2種の過去10年分の生息数調査のデータをまとめたことはきわめて重要な知見を生み出している。毎年、個体数の年変動や下草繁茂の状況からくる見つけやすさの変化などによる影響を受けるので、これら2種の増減について確かなことは言いづらかったが、10年間の長期データから、逢坂山のタマノカンアオイとお伊勢山のキンランが着実に増加している可能性が高いことが分かった。一方で、同じような管理をしているのに場所の違いや種の違いが生じる要因が今後の研究課題のひとつとなろう。

ゲンジボタルはこの3年間は2004年の復活以来最大数の羽化が続いていることも明らかになった。元・板橋区ホテル生態環境館館長の阿部宣男博士のアドバイスによるところが

大きいと思われるが、どのような管理が有効であるかについてさらに要因を科学的に絞って研究する必要がある。

後半は、従来のかかわ道楽にはない社会教育的視点を取り入れた研究となっている。もともと自分たちがそれほど環境問題に関心があったわけではなかったのに、なぜ環境保全活動をやっているのかという疑問に始まり、幼少時の体験を調査し対照群と比較している。その結果、環境への関心や野外活動の体験よりも、身近なところに小さくとも自然環境があること、そこで野生動植物の採集を経験していることなどが、かわ道楽の学生たちの特色といえるようである。現在は、魚採りの楽しみと共に他者との協働作業の魅力が彼らの活動を支えていることが読み取れることも面白い。今後の日本社会の自然保護の主流になるとと思われる市民活動のあり方について重要な示唆を与えるものと思われる。

最後に、本研究でお世話になった教員、地域の皆様に心から感謝申し上げたい。今年度12周年を迎えたかわ道楽は、まさに皆様に育てていただいたものである。

高田瞽女語りの世界－『山椒太夫－舟別れの段』を読む

山本 ひろ子（表現学部）

本研究は、日本の民間信仰史・芸能史においても社会史においても、あまり光を当てられてこなかった盲目の女芸能者・瞽女が考察の対象である。男性の盲目芸能者・琵琶法師は、平家語りはもちろん、地神経の読誦による籠ざらえや当道座の形成・仕組みなど早くから関心を集め、諸本を含めた研究・解明にはめざましいものがある。それに対して瞽女の研究は、資料も少なく、研究成果も数えるほどといってよい。

きっかけは、本学生が古本屋でふと手にした本に描かれていた瞽女の絵だった。また高田瞽女の語りを今に継承しようという語り手のライブ活動に出掛けた体験もそれを後押ししたらしい。（後日のフィールドワークで本学生は、今風の瞽女語り＝歌者への聞き取りを行なっているが、論考にその成果を紹介されなかったのは惜しまれる。）

各地の有力な瞽女集団の中で本学生が取上げたのは、高田藩の庇護と支配圏にあった高田瞽女である。先行研究によって高田瞽女の歴史はある程度辿れるし、その活動振りも少しく確認できるが、本学生の関心は、高田瞽女のみが持ち伝えてきた『山椒太夫－舟別れの段』の独自テキストにあった。その読みを通して、瞽女の段物の土壌をなす信仰や伝承を抽出し、それがどのように語

りのプロット・詞章・科白に現われているかに挑んだ。具体的には「舟別れの段」を二つのシークエンスに分けて、一語一句にまでこだわり、息遣いや感情の起伏までも読みほぐそうとした努力は評価できる。だがこの種のテキストは、語り物であり、「本文」と言われるものではなく、一回性をその生命とする。たとえば本学の教員でもあった山本吉左右氏のオーラル・コンポジション論なども参照して、「読み物」以前の「語り物」の身体性を学んでおくべきだったろう。また盲僧琵琶の世界への目配りや、同じ山椒太夫物「お岩木さま一代記」との比較にもふれておく余裕があったらと思う。

方法と主題に絞り込むのが遅かったため、もっとも展開するべき箇所の内容が薄くなった感はいなめない。しかし卒業後も瞽女の研究は続けてゆくことなので、幅広い学知を身に付けながら先行研究を渉猟してゆく一方、全体を見通す視座の獲得と文章力の練磨が望まれる。自分の思いや感覚をどう言葉につがえ、文章として成り立たせてゆけるかが、今後の大きな課題である。

高田瞽女は逃げはしない。本学生はその持ち味で、じつくりと取り組むだろうことを期待している。

よって持ち伝えられていた。安寿は自分にひどい仕打ちをした丹後人を嫌い、丹後船が来ると波を荒れさせるといふ。これについて岩崎氏は、恐らくこの種の伝説は日本海を航行する船乗りたちによって持ち伝えられたものであろうと述べている。

25 岩崎武夫『続さんせう太夫考』四六ページ

がら教え諭しており、より情景が浮かびやすく涙を誘うものとなっている。山椒大夫でもこの子別れの場面は二段にまたがるほどの長さを持っており、やはりこの段物の聞き所であったといえる。

武智鉄二氏は竹田出雲の『蘆屋道満大内鑑』（一七三四年初演）と高田瞽女伝承の『葛の葉子別れ』の詞章を比較し、「蘆屋道満」の子別れの場面に出てくるセリフ、「成人の後までも、小鳥一つ虫一つ、無益の殺生ばしすなえ」に着目した。そして瞽女の伝承した「葛の葉」同場面の詞章に「でんでん太鼓もねだるなよ、喋喋、とんぼも殺すなよ、露地の植木もちぎるなよ、近所の子供も泣かすなよ、行燈障子も舐め切るな」とより具体的に羅列されていることから、「竹田出雲が（瞽女の段物の影響を受けつつ）レトリックを整えて書き直した後出性がある」と示唆している。そこから、瞽女の段物が近世芸能の影響を受けつつ他の近世芸能に影響を与えていたこと、そして瞽女がただ周りの語り芸を取り込んで再演していたのではなく、「瞽女の段物が近世芸能の影響を受けながらも、本来の瞽女伝承の要素を保持している」のではないかと論及している。

17 子別れのシーンがない明暦本をのぞいた、他の説経節正本には御台が扇で招く様子が記されている。一例として(3)寛永本をあげる。

（宮崎の方を打ち眺め、（御台）やあやあ、いかに姉弟よ。さて売られたとよ、買われたぞ。命を惜へ姉弟よ。又も御世には出づまいか。姉が膚にかけたるは、地藏菩薩であり

けるが、自然姉弟が身の上に、自然大事があるならば、身代わりにお立ちある、地藏菩薩でありけるぞ。よきに信じて掛けさいよ。又弟が膚に掛けたるは、志田・玉造りの系図のもの。死して冥土へゆく折も、閻魔の前のみやげにもなるとやれ。それ落さいな、つし王丸と、声の届く所では、とかくの御物語を御申しある。次第に帆影は遠うなる。声の届かぬ所では、腰の扇取り出だし、ひらりひらりと招くに、舟も寄らばこそ。

18 ①寛永本の乳母の入水は定型句のみで表現され、②正徳本には入水のみで乳母の心象を表わすような詞章は無い。

19 「比丘尼石の話」柳田国男

20 『説経節 山椒大夫・小栗判官他』東洋文庫

21 「驚き清水」柳田国男より。文は分かりやすいように直した。

22 柳田国男は、乳母が子供を水の中に落とし自分も飛び込んだ、というような乳母と稚児と水辺というモチーフが登場する伝説と、水辺に声をかけると何かしらの反応を示すという場所が、全国に多数存在することに着目した。これらの伝承が、水の中に女の霊がいることを前提としていること、そして水に呼びかけるとその女の霊が反応を示すということから、今度はこちらまた日本全国に点在する念仏池との繋がりを見出すのである。

23 乳母嶽神社の伝説は具体的に波の荒れる場所を「郷津の二見岩」と指している。

24 同様の伝説は津軽にもある。当地では『お岩木様一代記』と称して安寿姫が岩木山の神になるまでの苦難がイタコたちに

- 5 瞽女の持ち伝えた山椒太夫が詞章として残っているのは高田瞽女のみである。同じ越後でも刈羽瞽女も山椒太夫を語っていたと記録されているが詞章は残されていない。長岡瞽女の小林ハルも習おうとしたがついに叶わずじまいだったという。
- 6 齊藤真一『瞽女―盲目の旅芸人』
- 7 佐久間惇一『瞽女の民俗』
- 8 ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究』
- 9 人の世や人の一生の栄枯盛衰が夢のようにほかないことのとえ。
- 昔、盧生という少年が邯鄲で同士kら借りた枕で寝たところ、一刻の間に一生の栄華を夢見たという中国の故事。
- 10 朝恵比寿：朝に恵比寿様を拝みに行くこと。秋田県では、朝の最初の客が女だとその日一日店が繁盛するといい、これをアサエンビシ、オナゴエビスなどと言って喜ぶ。おそらく朝、恵比寿を祝うとその日は繁盛するという俗信があったものか。『説経節』東洋文庫注より
- 11 舩：舟と舟とを繋ぎとめていた綱。
- ちなみに(4)正徳本では左記のように書かれており、親子の別れを許す船頭の姿が見える。
- 船頭きいて、御身兩人は。某が買^{そがし}取りて、佐渡嶋へ下るとあれば。御台此よしこきしめし。それはまことかかなしやと。まつさめ。さめと。なき給ふ。おつる泪のひまよりも。そのきにてあるならば。あの舟と此舟を、一つ所によせてたべ。今の名残をおしむべし。船頭きいて、愚なりとよ女郎。それ
- 12
- 13 出船と申せしは、とふ鳥たにもおいつかぬと申すに。間の近きうちに、互いの名残、おしませ給えと。
- 14 『未刊謡曲集』
- 15 直江津は中世の十大港、三津七湊のひとつで、日本海交易の拠点として重要な位置にあり、また陸路においても東西の要衝として人の往来が盛んな場所であった。例えば直江の浦に実際に建設された橋についての資料には「天文十八年（一五五〇年）四月、府中大橋の制を立て、通行税を定め、僧侶、遊人、無職、盲人、非人乞食の徒に橋銭を免じ¹⁴。」と記されており、このような無縁の者たちが当地に集まっていたことを示している。『続さんせう太夫考』
- 16 岩崎武夫氏の『続さんせう太夫考』では、直江津で実際に人身売買されていた可能性を示す資料があげられている。例えば『選集抄』巻一の第六には、直江津から程近い寺泊^{てらどまり}の様子が記されており、「貴賤集まりて朝の市のごとし：絹布のたぐひを売り買ふのみにあらず、人馬のやからを売買せり。」と記されている。『婆相天』でも謡曲中に人売りの証文を読み上げるシーンがあり、人身売買の様子が大変リアルに残されている。
- こうした親子の別れのシーンが瞽女の間では「子別れ」と称されている。これが示すように、彼女たちの段物には親子の別離を見せ場とする物語が多い。例えば「葛の葉」では、母・葛の葉狐が別離する自分の子供に向かって「父の言うことよききいて 路地の植木もちぎるなよ 蝶々とんばも殺すなよ 行灯障子も舐め切るな」と、してはいけない行動を挙げな

母嶽明神の伝説と瞽女の段物の内容が重なり合っている点は興味深い。琵琶法師の平曲が昔話の「耳なし芳一」のように、平家の怨霊を鎮めるために語られていたが鈴木昭英氏は瞽女の唄や語り物もまた、「亡霊の慰撫・救済」が本来の目的であったと述べている。とはいえ瞽女本の山椒太夫は、船頭の豪胆なやり取りしかり、涙を誘う親子の別れしかり、聴衆の情念にうったえる叙事的な語りが主眼で、信仰的な機能を果たしていたかどうかは不明である。

直江津は海路、陸路どちらで行っても境となる地として人々から認識されており、それを象徴するように船が東西へ分かれてゆく話が生まれた。また港を拠点に活躍した問丸や人買いたち、各地の乳母伝承とも直江津を物語る際に重要なモチーフであったと察せられる。山椒太夫のうば竹は直江津に数多ある物語の中から示現し、北海擁護の信仰を伴って伝説化した。瞽女本の古態や細かい伝承関係を探ることは叶わなかったが、瞽女本独自の特色をいくばくでも示せたのではないかと思う。

参考文献

- 五十嵐富夫『瞽女―旅芸人の記録』
板垣俊一『越後瞽女唄集―研究と資料―』
岩崎武夫『続さんせう太夫考』
小山直嗣『新潟県伝説集成上越編』
斉藤真一『瞽女―盲目の旅芸人』
佐久間惇一『瞽女の民俗』
鈴木孝庸『越後瞽女うた文藝談義』

ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究』
中山太郎『日本盲人史』

『説経節正本集第一』大岡山書店刊行

『説経節 山椒太夫・小栗判官』東洋文庫

『定本柳田国男全集第9巻』

『直江津町史』

『末刊謡曲集』

岩瀬博「瞽女の語り物―(景清)を通して」

鈴木昭英「瞽女の語り」

1 鈴木孝庸著『越後瞽女うた文藝談義』より、『看聞御記』原文を書き下したものを引用。左記が原文である。

夜盲女兩人愛寿菊寿参。愛寿日来参。菊寿初参愛寿弟子云々。
召前施芸能。五六句申。聴衆濟々候。芝殿以下参。歌了賜引物。

薰物。本結。壇紙十帖。其後於臺所一兩又歌。

2 同著

3 『曾我物語』は曾我兄弟の仇討を題材にした軍記物である。兄・十郎と恋仲であった大磯の虎御前は兄弟の死後尼になり、二人の回向のため回国修行に出、実際の遺跡ともなったようである。虎御前が建てた供養塔と言われる跡や出生地、死没した地などと呼ばれる場所が福島から鹿児島まで日本各地にある。これらの伝説や遺跡は、女性の芸能者が『曾我物語』を語りながら遊行していったからこそ成立したものである。

4 鈴木昭英「瞽女の語り」

さて、乳母嶽明神は直江津からほど近い「居多神社」と、そこから海岸沿いを西へ一〇キロ程の茶屋ヶ原にある「乳母嶽神社」に現在も祀られており、同じ内容の伝説が両神社に伝えられている。

岩城判官正氏の妻と、乳母の姥竹が人買いの山岡太夫にだまされて佐渡二郎の舟にのせられて沖へ出たとき、姥竹が海へとび込んで死んだ。それから丹後の船が来ると必ず天候がにわかに変化し難破した。²³死んだ姥竹の亡霊が船に取り付いて恨みを晴らすのだといわれた。このため村人は、その霊を慰めるため祠を建てて供養した。²⁴

居多神社は元来「居多明神」を祀る社であり、神祇資料には次のようにその歴史が記されている。

居多明神、今、居多浜村岩戸浦山の半腹にあり、居多明神といふ。伝へて北海擁護の神也とす。蓋大己貴神を祭る。清和天皇の貞観三年八月甲辰（八六一）従五位上居多明神に従四位下を授く。²⁵

年号を見ても、居多神社が古来からの由緒ある社であることがわかる。なぜこの神社に山椒太夫の乳母を祀る石塔があるのか。岩崎氏は「うば竹の恨みで波が荒れるのを鎮める」という伝説の内容と、居多明神が元々「北海擁護」の神である点に着目し「直江の海を荒らして祟りをなす霊を祀ることによって嶽嶽の神性が

逆転して、海の守護神として里俗に信仰されてゆく必然性はある得るわけで、近世以降、居多明神と嶽嶽明神が同じ直江の海の守護神と同一視される余地は極めて高かった」と述べている。

さらに同氏は乳母嶽明神を「ミサキ神」とも見ている。茶屋ヶ原の乳母嶽神社には、御神体である不動尊像が海中から現れたとの伝説がある。「海上の道標として船乗りには信仰されていた事実や、水死人の霊が岬に集まるといふ信仰から、漂着神や海中出現仏が祀られる海浜の聖地として岬が崇拜されていた」ことから、両神社の位置する地形や伝説を鑑みても乳母嶽明神は直江の海を守る守護神であったと岩崎氏は考察している。

おわりにかえて

柳田国男は「ミサキ」という言葉には地形を意味する「岬」の他にも意味があると論じている。例えば山を歩いていて急に頭痛がしたり寒気を感じたりすることを「トオリミサキ」や「ミサキの行き逢い」、「ミサキ風」などと言う。この点に関して、ミサキが「御先」「御前」とも書き、貴人の行列の先払いを行う者のことをさすことから、神の使いである眷族たちのことを「ミサキ」と称し、その小さな神や神霊に行き逢ったときに「トオリミサキ」などと言いつつ慣わしていたと述べている。この言い慣わしのようになりに頭痛や寒さをもたらすものたちを、主神の管轄を逸脱した荒ぶる神や、非業の死を遂げ祀り手もない凶魂などに重ねるようになった。

うば竹もまた、成仏せずに海中を彷徨う恐ろしい霊であり、乳

かかる所へ うば竹が
たちまち舟へ 追いついで
半段ばかりも 引き戻し
宙へ引き上げこのときに、七重八重と巻き締めて、
板子の上へと頭を上げ

(詞)

おんこれ憎き山岡太夫権当め。

よつくも、われわれ四人を謀りしぞえ。女でこそあれ、
うば竹が、いまこそ思い知らせんと

山岡それと 聞くよりも

うば竹様えの 大蛇様

いたてお腹が 立つならば

十二貫はこれに 有りまする

取り返して あげましょう

命をお許し たまわれと

両手を摺りて 詫びにける

なにがうば竹 聞き入れず

宙へ引き上げ 引きおろし

ぎりりぎりりと 絡みつき

舟を微塵に 巻きこわし

ずんだずんだに 引き裂いて

底の水屑と なりにける

小気味よくこそ 見えにける

太夫が板子の下で震えていると、目の前に大きな大蛇のしっぽが海中から現れたではないか。板子の下から「半段」ばかり太夫を引き出し、宙へ引き上げて、ギリギリと体を締め付けてゆく。「おんこれ憎き山岡太夫権当め。よつくも、われわれ四人を謀りしぞえ。女でこそあれ、うば竹が、いまこそ思い知らせん」との台詞で、山岡はやつと大蛇の正体を知るが、すでに遅し。太夫の必死の命乞いもうば竹は聞き入れず、「ずんだずんだに」引き裂いて、復讐を遂げるのである。

瞽女の「舟別れの段」は、このうば竹の復讐で幕を閉じる。一般的な山椒太夫のお話を知っている者としては、この後の姉弟の活躍を聞かないまま終わってしまうのは、少々物足りない感じを受けるが、高田瞽女は実は元は全六段の山椒太夫譚を持ち伝えていた。昭和五二年の採録時にはすでに今回取り上げた「舟別れの段」のみであり、この涙を誘う子別れと大蛇に変化した乳母のすさまじい様相は、この段物の一番の聞かせどころであり、最後まで生き残り続けたわけである。それでは瞽女本はなぜかくもうば竹を大きく登場させるようになったのか。

北海擁護の神になるうば竹

直江津は説経節山椒太夫の舞台であるため、安寿・厨子王を祀った石塔や山椒太夫の墓と称される場所が散見している。その中でもとりわけ「乳母嶽明神」なる神が、山椒太夫の伝承と絡められて祀られていることは注目される。この問題について鋭い考察を行っているのが岩崎武夫氏であり、本稿でもそれを参考に進めてゆく。

乳母が主人への申し訳なきから入水するという伝説が同地に残されているという点で、「ウバの入水」というモチーフが越後の風土に息付いていたと考えられる。柳田は越後のこの伝説の背景に、水中にいる女の霊を慰撫する念仏行があったと見ている。²²しかし瞽女は段物の中に、念仏によって救われる乳母を取り入れることはなかった。単に伝承が抜け落ちただけなのか、はたまた意図があつたのか。段物の続きに耳を傾けてみたい。

段物におけるうば竹の造型②—うば竹の変身

山岡太夫への恨みを抱え、海へ飛び込んだうば竹。説経節では乳母の入水が終わると物語は直江津を離れてしまいが、瞽女の段物はいかがであろうか。

遙か沖を 見渡せば

大風がさつと 吹き来る

震動ないりに 鳴り渡る

白浪だつて あれ出だす

たちまち今は うば竹が

額にかぶくと 角を振り

総身は

九万九千の うろこ逆立ち

眼は日月の如く 光り輝いて

げに紅の 舌を巻き

口より火焰を 吹き出だし

逆巻く浪を 押したて蹴たて

浮いつ沈みつ 沈みつ浮いつ

ばらばらばつと 水煙り

逆巻く浪を掻き分け 掻き分けて

直江へ帰る 山岡を

後を慕うて追っかけ行く

山岡それと 見るよりも

うば竹大蛇と 夢知らず

こは不思議なる 荒れごとと

板子の下へと もぐり込み

万歳楽 桑原桑原と

がながな震えて 居たりける

どこからか大きな風が吹いて波がうねり出した。あたりが震え、波が白く立ったかと思うとその波間に角が見える。「額にかぶく」と波の中から現れた角、らんらんと光る目、口から炎を噴出す大蛇となつたうば竹の姿があつた。「逆巻く波を押ししたて蹴りたて」と、大きな波をうば竹が操っているかのような語り口に、「浮いつ沈みつ 沈みつ浮いつ」と消えては現れるうば竹大蛇の姿や、海上の船の揺れが目に見えようである。「逆巻く」波と、その波のうねりから瞬間現れるようなうば竹の姿は、まさしく波を荒れ狂わせる御霊の姿である。四人を騙したあの太夫は「こは不思議なる 荒れごと」と異変に気付きながらも、板子の下で「万歳楽、桑原桑原」と雷除けのまじないを唱えながら震えている始末である。そんな山岡太夫の後をうば竹が追つてゆく。

舟のこべりに 立ち上がり
海へざんぶと 身を投げる

「祖父の代から恩を受けている御台様と、佐渡が島で同じ境遇となつて、苦勞している姿を見るのは道理から外れることですので、耐えられませんか」。そう言つて、四人を騙した山岡太夫のいる直江の方を睨みつけるうば竹は、「いまにも思い知らせん」と恨みを胸に直江の海へ入水する。

瞽女の段物に見るうば竹は、よりはつきりと入水の覚悟が語られる。御台と朋輩の身となること、忠義を果たせないことからくる罪悪感、主人への忠節という倫理観である。説経節(3)寛文本を見てみると「同朋輩と言われなば、御台様さぞや心くるしくおぼすらん¹⁸」とあり、自分と同じ身分への落ちぶれを申し訳ないと思う心情であるが、瞽女本では「法^{のり}ならず」といっそうその倫理観がきわだつた。

乳母の入水は説経節でも瞽女本でも同様に語られる。瞽女本に顕著なように乳母は主人への忠節、また厨子王は親への孝に報いるため御家再興を行うという、「忠と孝」の物語として近世以降受け入れられ人気を博したと考えられる。入水を決意させたのは乳母の忠節と山岡太夫への恨みだったが、そもそも乳母が登場する下地となったものはなんであるか。柳田国男は示唆的な一文を書き残している。

奇妙な事には浄瑠璃の方でも、やはり安寿姫等の乳母と言

う女性が、格別用もないのに出て、そうして死んで居る。寛永版の翻刻かと言う正本には、「御めのとうば竹」御供をしてと唄つて居り、他の書物にはその名を宇加竹とも伝え、この女ばかりに特に注意をして居るのは、何か仔細があるらしい。¹⁹

柳田のいうように、たしかに「うば竹」は物語上でなんの役割も果たさぬまま入水してしまうように見える。それでも説経節で乳母を登場させた何らかの狙いがなくてはならない。それを探ることは、同時に高田瞽女の段物がなぜ乳母を活躍させるのかを考へることもあるだろう。従つて「乳母の入水」の伝承基盤を考察してみる価値はありそうだ。

実は越後、特に上越から中越には、「ウバ」と称される女性の登場する伝承、そして山椒太夫の乳母が祀られている場所が多数存在する。それでは山椒太夫を離れて越後のウバ伝承を見てみたい。²⁰

三島郡蓮華寺村の奥に姨ヶ井という古井戸がある。その井戸の側に寄つて「ヨバ」と大声で呼ぶと泡が浮かび、これを疑う人が試みに「アニ」や「アネ」などと呼んでみても応えない。これは昔、この村の某家の女中が主人の子守りをしていて、誤つてこの井戸へ落とし、自分も申し訳なく思つて井戸へ身を投げたため「ヨバ」という言葉に今でも答えるのである。²¹

母によくよく 見せてたべ
のう姉弟と

言わんとせしが 胸迫り

声より涙が 先に立つ

その座へどうと 泣き沈み

うば竹局が 見るよりも

年端もゆかぬ きょうだいご姉弟

いづくへ離して やらりようと

共に涙に 伏し沈み

佐渡の次郎が 見るよりも

(詞) おおい宮崎。こんなことを長と見ている事ではない。

俺もどうやら、うつ泣きになった。

もういい加減にして引き分けようじゃあるまいか。

成るほど、次郎どんの言わるる通り、

こんなことを長と見ておる事ではない。

俺もどうやら涙が出てならぬ。もういい加減にして引き

分けよう

興味本位で見物していた舟長たちであったが、別れのさまが余りにも悲しく、とても見ていられないと涙を流しながら引き離す。冷酷な商売人ながら、この場面では、人買いの人情が垣間見え、哀れさの引き立つ描写となっている。

山椒太夫伝承のうち母子の別れのシーンを比較してみた。瞽女本では「船頭が御台に情けをかけ親子の対面が叶う」場面が、直江津の境界性を描いた謡曲『婆相天』と共通することを指摘した。

人売りの感情や様子がより細やかに描かれている点はこの地を拠点とする瞽女ならではの語りだと言える。親子の対面のシーンでも、うば竹の手に引かれながら姉弟の舟に乗り移り、より子供の近くで語りかけるさまは、説経節とは違う味わいを呈している。高田は直江津との距離も大変近く、この地に拠点を置く瞽女が、『婆相天』に見られるような在地の特性を語りを生かした可能性があると考えて良いだろう。

Ⅱ 乳母の入水

段物におけるうば竹の造型①—入水の理由

さて瞽女本の山椒太夫も二段目に入り、この先の展開が気になる。親子の対面も終わりを告げ、自らに降りかかった宿命に泣き崩れる御台。その横でお供の乳母うば竹が突然口を開く。

(詞)

(乳母) 申し、お御台さま。三代相恩のご主人様と、佐渡が

島へ買い取られ、ほうばい朋輩の身となって、朝夕ご苦労ご

難儀あそばすを見えまするも法ならず。長のお暇

たまわれと

直江が方を はつたと睨み

おんれの憎き 山岡が

いまにも思い 知らせんと

はつたと睨んだ 有り様は

身の毛もよだつ ばかりなり

り豊かに展開してゆき、他本にはない段物の聞かせ所となつてい
る点は大いに注目すべきであろう。¹⁶ 御台の語りはさらに続く。

懐中よりも 御台さま

何やらひと品 取り出だし

これのういかに 弟よ

これなる一巻と 申するは

岩城の家の 系図なり

これが無ければ 出世ができぬ

これがそちへの 形見ぞと

弟の衿に 掛けさせて

必ず人手に 渡すなと：

(中略)

守り袋を 取り出だし

これのういかに 安寿よ

これなる守りと 申するは

岩城代々 御守り

伽羅陀山の 地蔵様

そなたらいづくへ 行けばとも

肌には離さず 朝夕の

信心致す ものならば

もしそなたらの 身の上に

自然大事 あるときは

御身代わりに 立ちたもう

悪事災難 よけたもう

これがそちへの 形見ぞと

必ず人手に 渡すなと

姉の衿に 掛けさせて

これが親子の 生き別れ

御台が別れの品として懐から取り出したのは、「岩城の家の系
図」と。岩城家を代々守っている「伽羅陀山の地蔵様」であり、
説経節と同様である。「これが無ければ世に出ることはできませ
んよ」と厨子王の衿にかけてやり、また「よく信心していれば、
二人の身代わりに立ち悪事災難をよけてくれます」と安寿の衿に
かけてやる。無事への願いを込めてそれぞれの形見を「衿に掛け
させ」る動作が浮かぶ、印象的な場面である。

説経では御台が子供たちの舟に乗り「対面」することは叶わず、
遠ざかる子供たちに声を張り上げて教えを伝え、やがて声が届か
なくなると、扇で舟を差し招く所作を行い、親子の遠さが哀れさ
を誘う詞章となつている。¹⁷ こうした御台の動作を見ても、説経節
とは異なる味わいが瞽女本にあり、親子の対面を許すという舟長
の情けがあったからこそ生まれた展開であると言えよう。
さて瞽女本に戻り、続きを見てゆこう。

これが親子の 生き別れ

母の顔も 見置かれよ

そなたら二人の その顔も

さらにもう一点瞽女本と似通っている展開が次の通りである。子供たちと束の間見えることは叶ったとしても、ふたたび別れることには変わりがない。依然として嘆き続ける母。すると情にほだされたのか、問の左衛門は「母子共に逢い候うて泣きなげき候事、近比哀れなる事に候、此上は母にも暇を取らせ、よろこばせばやと思ひ候、いかに母、汝が欺くところ尤にて候程に母にも暇をとらずべし、姉弟の子供に付き添い、いづくへも行き候へ。」と、母子の対面ばかりでなく、母がそのどちらかの舟に乗ることをも許してしまうのである。

山椒太夫ではとりわけ「人買い」の描写が印象深くされていることから、実際にもこうした商売が当地で行われていたであろうと先学は想定している¹⁵。

舟長の描写がリアルに行われ、親子の対面が許される瞽女の段物には、こうした在地性を反映していよう。

母子の対面―御台の語りからみる瞽女本の特異性

ふたたび瞽女の段物に戻ろう。姉弟の舟に乗り込んだ御台はどのような別れの言葉を繰り出すのだろうか。

のう姉弟と

言わんとせしが 胸せまり

声より涙が先に立つ

またも涙の 顔あげて

これのういかに 姉弟よ

そなたらいづくへ 行けばとも

鳥の鳴く音が 同じこと

人に出過ぎを 申すなよ

短慮の心も 起こすなよ

姉弟仲良く 睦まじく

姉は弟 あわれみて

弟は姉を 敬うて

姉に短慮の あるときは

歳はゆかねど 弟の若

父上様に 成り代わり

姉に意見を 致すべし

弟に短慮の あるときは

姉が母に 成り代わり

弟に意見を 致すべし

「のう姉弟」と呼びかけようとするが、涙が溢れるばかりで言葉の出ない御台。それでもぐつとこらえて顔をあげ言葉を掛けてやる。「のう姉弟よ。あなたたちはどこへ行つても、どんなに訴えても、周りの人たちは鳥が鳴いているようにしか感じないのです。だから人に出過ぎを言つたり、浅はかな行動を取つてはなりませんよ」。離れゆく子供たちへ向けて、哀切に語り続ける。

このパートでは「短慮の心」という言葉が三回登場する。この語をめぐって語りを展開されるのも、瞽女本だけの特色である。説経節正本では「短慮の心」が登場するのは④正徳本のみで、「縦うられたさき」にても、短慮心を持つなとよ」と一回登場する。成立の前後関係は不明だが、ひとつの語を契機に御台の語りによ

船に乗せて仏前へ送る。

直江津を舞台にした『婆相天』は、人身売買や母子の別れを見ても山椒太夫と似通う点が多く、比較の上で重要なテキストである。

さて、山椒太夫で四人を謀ったのは人売りであつたが、一方『婆相天』に登場する「問の左衛門」は中世に渡船や商品の運送や販売を手がけた「問丸」である。このほか関銭の徴収や舟宿の運営、莊園への年貢の管理など手広く行い、湊の商人などを包摂しながら一切の商業を独占していたものもあるという。問の左衛門も同様な仕事を請け負っていたのだろう。

問の左衛門しかり、さまざまな職種・身分の人々が当地を往来していたことが伺われる様子は、岩崎武夫氏の『続さんせう太夫考』¹⁴で見事に論じられている。例えば『義経記』には「越後国直江津は北陸道の中途にて候へば、それより此方にては羽黒山伏の熊野へ参りえ下向するぞと申すべき、それより彼方にては熊野山伏の羽黒に参ると申すべきと申しければ……」と直江津の名が見える。弁慶が義経を伴い、北陸道から奥州平泉へ逃れるとき、直江津の東方に入ったときは熊野山伏が羽黒に参ると偽り、直江津の西側では逆に羽黒山伏が熊野へ参詣して下向するところと欺いて通ろうと画策する場面である。直江津を軸に山伏の名を変えるところをみると、やはりこの地が東西の境として人々に認識されていたことが伺える。山椒太夫と『婆相天』で船が東西に分かれてしまうのも、こうした「境の地」としての直江津が歴史的にも深く根付いていたからだとし、『義経記』が陸の境界としての直江

津を描いていたのに対し、『婆相天』は海の境界としての直江津の特異性を描いた物語だとしている。港を境として左右に別れてゆく舟は、親子の悲しい別れだけでなく、直江津という土地自体の特徴をもはらんでいるのである。

さて直江津を舞台とした物語に印象深く登場するのが「人商い」の人々である。この人商いにたずさわる者たちは、境の地直江津でどのように描かれるのであろう。

(母) のう何と姉弟の子供をば。東国西国へ売り渡し給いたれば。此世の対面は叶うまじきと仰せ候か。あら悲しや候。たとい自らこそ科ある身にて候共、久しく馴れし老の身に。我子を見せてたび給へ。そもやいつの世に、又逢うべきぞかなしやな

(問の左衛門) 心強く売ては候へ共。母にくどき立られそぞろに落涙仕候。此上は汝を浜へ連れてさがり。今一度子供に对面させふするにて候。心易く思ひ候へ。
(母) あら嬉しや頓て参らふするにて候

首尾よく姉弟を売り分けた問の左衛門であつたが、残された母の口説きごとに涙を流し、もう一度子供たちに会わせてやろうと浜へ連れてゆこうとする場面である。ところで「我子を見せてたび給へ。そもやいつの世に、又逢うべきぞかなしやな」との文言は、説経諸本には見受けられないが、瞽女本の「あれなるふたりの姉弟に、ここで別れていつが世に、また逢うことは知れがたし」と類似しており、瞽女の詞章との思いがけない照応を見せている。

これのういかに 姉弟よ

たつたいま直江へ 戻りし

山岡太夫 権当が

あれ情けの人と 思いしが

人かどわかしてあつたとや…

「そのくらしいのことを厭う次郎」ではないから暇乞いの時間をやろうと持ちかけた次郎に対し、「親子一世の生き別れとやらの愁嘆」に興味津々の宮崎。別離する親子の前で艫とこにあぐらをかき煙草をふかす「情けも知らない」舟長たちである。ともあれ、この二人の気まぐれによって親子の最後の別れが果たされることとなった。御台はうば竹に手を引かれ、子供たちの待つ船に乗り移る。そして両脇に子を抱いて別れの言葉を伝える。

このように、「御台が姉弟の舟に乗り移る」というプロットはどの説経節正本にも見られない、瞽女特有のものである。この脚色にはどのような背景があるのだろうか。

先に見たように、説経節では御台の願いは冷たく断られてしまう。ただし説経節のテキストの中には、舟を近づけての対面こそできないが、船頭の人情が語り込まれている点で瞽女本に近い伝承もある。¹²(3)寛文本では「扱は上臈様は。御存知なきかいたわしや。此舟と申すは、宮崎へ買うてゆく。今生の暇乞い。今と覚えたり。よきに名残おしみ給へ。」と船頭が丁寧な口調で御台を諭すのだ。

説経正本のある記録では、船頭が暇乞いを許していないので人買いが情を見せる瞽女本の事例は後世の変化と考えそうにもなる

が、そう簡単にはゆかない。直江津が舞台となっている、十六世紀初頭成立とされる謡曲『婆相天』¹³にはこの場面と同様のモチーフが登場しているのである。まずは『婆相天』のストーリーを簡単に確認してから詞章をみてゆきたい。

①直江の津へやってきた東国と西国の船は、どちらも内密に人買いを行っていた。二人の人商いの申し出を直江津で働く「問とこの左衛門」は聞き入れ、自分の下で働いている貧しい母とその子供（姉弟）を東国、西国へ売り分けようと画策する。左衛門は根芹摘みから帰ってきた三人に近づき、母を臥所で休ませ、何も知らない姉弟には文と称して人商いの証文を手渡し、「これを港の舟人に渡して欲しい」と頼むのである。

②左衛門の言いつけ通り舟人に証文を見せた姉弟は、証文を手にしていたという理由で人商いの品とされてしまう。一方母は左衛門から事の次第をきき嘆く。「もう此の世で二度と逢えないのだから子供と最後の対面をさせてください」と訴え続けた。左衛門は母の悲しむ姿を見て、両船の者たちと交渉し親子の対面を果たさせる。つかの間喜ぶ親子だったが、どのみちまた別れなければならないと三人は再び悲しむ。

③その様子を見た左衛門は、母親に暇を出し、子供と一緒に船に乗ることをすすめる。しかし東国船に乗れば弟と離れ、西国船に乗れば姉と離れてしまう。どちらへ乗ろうか迷っているうちに船は港を離れはじめた。身の置き所のない母は、ついに直江の津へと飛び込むのである。母の入水後は観音の使いである婆相天が影向し、姉弟を富貴の家へ生まれ変わらせ、母を弘誓の

これのういかに 舟長どの
売られ買わるる われわれが
定まる前世の 悪縁と

あきらめも 致そうが

あれなるふたりの 姉弟きょうだい

ここで別れて いつが世に

また逢うことは 知れがたし

ただこの上の 情けには

親子一世の 生き別れを

名残り惜しませ：

(詞)

(次郎) なんとやな、老いぼれ。

売られ買わるるわれわれが、定まる前世の悪縁と

諦めも致そうが、

あれなるふたりの餓鬼どもに、ここで別れていつが世に、

また逢うことかは知れがたし。

ただこの上の情けには、

親子一世の生き別れをさせてくれいなとな。

おりゃ、そのくらいの休みをうってくりよう。

泣かずにそれに居やがれと

いぼれ」と一貫して強い口調の次郎である。セリフの中で母の嘆願の言葉を繰り返して、聴衆をはらはらさせるが、「おりゃ、そのくらいの休みをうってくりよう」と思いがけない快い返事。「泣かないで待っていな」と言い残し、丹後の宮崎に声をかける。

(詞)

(次郎) 親子一世の生き別れをさせてくれえとぬかすゆえ、

おりゃ、そのくらいのことを厭う次郎ではないが、おぬし

とおれで一服やらかし。

こいつら親子一世の生き別れを、見物しようじゃあるまい

か。

(丹後の宮崎) なるほど、次郎どの言わるる通り、おら

もこの年月まで、

親子一世の生き別れとやらの愁嘆しゅうたんを、ついにいっぺんも見

たことがない。

さらば見物いたさんと

情けも知らない 舟長が

まずは艫しとまのまに 高あぐら

火打ち取り出し 打ち点けて

空へ煙を くゆらせて

そらうそぶいて 見物す

ものの哀れや 御台さん

うば竹局に 手を引かれ

丹後の舟へと 乗り移り

安寿の姫に ちし玉丸

右と左に抱き寄せ

「私たちが売られ買われてゆくのは、前世の悪縁とあきらめられます。けどここで別れては二人の姉弟にいつ再会できるか知れません。せめて別れを惜しむ時間だけでも頂けないでしょうか」。逆らえない運命に身を置く母の悲しい姿に、「なんとやな老

佐渡と丹後の 人買いが

沖の方へと 急がるる

はや沖中にも なりぬれば

佐渡の次郎が 声をかけ

(詞)

(次郎) おおい宮崎。いつまで漕いでもはてしがない。

もういい加減にして引き分けようじゃあるまいか。

(丹後の宮崎) なるほど、次郎どんの言わるる通り、

いつまで漕いでも果てしがない。

もういい加減にして引き分けようと

舳むねをすっぱと 切り離し

舟は左右へ 別れける

御台ははつと 驚いて

これのういかに 舟長どの

あの姉弟きょうだいの 乗る舟と

妾めかけが乗りし この舟と

ひとつ湊へ 着く舟が

なぜに左右へ 分かれます

あの舟これへ

この舟あれへと 馳せらるる

それでも末には 舟長どの

ひとつ湊へ 着くかえの

佐渡の次郎が 聞くよりも

(詞)

(次郎) なんとやな、老いぼれ。うぬれら何も知りおらんな。

たつたいま直江へ戻りし、山岡太夫権当、あれ情けの人と
思ひしか。ありや人かどわかしの大名人。

うぬれら老いぼれ二人を、この佐渡の次郎が買い取つて、

佐渡が島へ連れて行く。

あれなるふたりの餓鬼どもが、丹後の宮崎が買い取つて、

丹後の国へ連れて行く。

佐渡が島へ行く舟と、丹後の国へ行く船と、どうしてひと

つに漕がりようと

腕にまかせて漕ぎいだす：

姉弟は宮崎の三郎の舟へ、御台と乳母は佐渡の次郎の舟に乗り

込む。四人は人買いの舟とは夢にも思わぬまま沖へ沖へと進んで

ゆくが、しばらくすると舟を繋ぐ舳綱は「すっぱと」切り離され、

二艘の舟は離ればなれに。その異変にはつと気付いたのは御台

所であった。「なぜ同じ港へ着く舟が、左右へ別れてしまうのです」

と尋ねるが、舟長は「なんとやな、老いぼれ。うぬれら何も知り

おらんな」と強い口調で応じる。

瞽女の段物に特徴的なのは舟長二人の会話である。この語りは

説経節にはなく、三味線の手を止めて語り口調で発せられるところ

にも芸能的な面白みがある。人買いの非情さ、剛胆さがリアル

に表現されており、実際の直江津で活躍した人買いや船乗りたち

の姿が彷彿としようか。

さて自分たちが売られてしまったと知った御台は、舟長の次郎

に取りすがり、次のように嘆く。

て、静かに押さいよ船頭殿。

(次郎) なにを申すぞ。けさ朝恵比寿を祝い損ひ、買い負けたるだにも腹の立つのに。上臈二人は買うてあるぞ。舟底に乗れ」とばかりなり。

舟が十町ばかり進んだ頃、二艘の舟が北と南に離れてゆくことに気づき、舟を漕ぎ戻すよう嘆願する母であったが、船頭の対応は冷たい。四人は人買いに売られたことで、武士の家柄から奴隷の身へと転落してしまったのだ。そして何より悲しいのは姉弟二人は宮崎へ、御台と乳母は佐渡(諸本によつては蝦夷)へと買い取られ、親子が生き別れてしまうこと。御台は船頭に「舟こぎもどいて、今生にての対面を、も一度とさせて給われの」と懇願するが、「一度出いたる船を、あとへはもどさぬが法ぞかし。船底に乗れ」と船頭に突き放され、そのまま親子は別れてしまうのである。遠くなる二人の子の船、非情な船頭と悲嘆に暮れる御台を横に、乳母(うわたき)が口を開く。

うわたきの女房、「承つてござある」と、「賢臣二君に仕えず、貞女両夫に見えず。二張の弓は引くまい」と、船梁に突つ立ち上がり、しゅへんの数珠を取り出し、西に向かつて手を合わせ、高声高に念仏と十遍ばかりお唱へあつて、直江の浦へ身を投げて、底の藻屑とおなりある。

乳母うわたきは突如、御台の他に仕えることはないと言ひし、念仏を唱えながら直江の浦へ身を投げてしまうのである。

以上、説経「山椒太夫」の直江津の場面を確認した。山椒太夫において、直江津は親子の別れや乳母の入水が印象的に描かれる悲劇の舞台として人々に記憶されたことであろう。さてこの場面を瞽女の段物はどうのように語っているのだろうか。(なお詞章中の(詞)は節の伴わないセリフ表現を示す)

I 御台所の口説きごと

さればによりては これにまた

いずれに愚かは あらねども

よき新作も なきままに

安寿の姫にちし王丸

舟別れの 哀れさを

事はこまかに 知らねども

あらあら誦み上げ たてまつる

詩句は七、五調で整えられている。この七五の一句をヒトコトと言ひ、これが集まつて一節が構成される。「さればによりては、これにまた」と、哀調のある三味線の音が響くと、瞽女特有の調子で語りがはじまる。「よき新作もなきままに」とへりくだりながら、母子の「舟別れの哀れさ」を予告することで、これから語られる悲劇への期待で場を満たしていく。

場面は直江の浦、佐渡と丹後へ二艘がそれぞれ進路を変えようとするとところから物語ははじまる。

後の山椒太夫のもとへ買い取られてしまう。

(3) 山椒太夫のもとへ売られた姉弟は、太夫から厳しい労働や、焼き金を額に当てられるなどのひどい仕打ちを受ける。しかし母から託されていた「肌の守りの地藏菩薩」の靈験で体に受けた傷は癒え、二人は太夫のもとを逃げ出そうと考える。

(4) 姉の安寿は御家再興を託して弟の厨子王を逃がし、一人太夫の屋敷に留まる。しかし山椒太夫に弟の不在を咎められ、責め苦を受け息絶えてしまう。一方厨子王はなんとか太夫のもとを逃げおおせ、国分寺のお聖様を見方に都へと向かう。

(5) 都へ出でた厨子王は、同じく母から託されていた「岩城の家の系図」のおかげで、見事岩城判官の世継ぎと認められ御家再興を果たす。それまで自分たちを苦しめてきた山岡太夫や山椒太夫たちに復讐をし、その一方で親切にしてくれたお聖たちに奉謝していく。離れ離れになっていた母とも再会し、乳母と安寿の弔いをして物語は幕を閉じる。

山椒太夫の物語は以上の筋立てだが、高田瞽女の段物はこの物語をすべて伝承しているのではなく、(2)の直江の浦のプロットと該当する「舟別れの段」のみを伝えてきた。安寿と厨子王の運命など、物語の見せ場がいくつもある中で、なぜ高田瞽女は最初の一場面にすぎない(2)のプロットのみを語っていたのか。山椒太夫についての研究はさまざまあるが、高田瞽女の段物に立脚したものは少ない。本稿ではこの「舟別れの段」に焦点を絞り、山椒太夫伝承の主流とすべき説経節や謡曲「婆相天」^{ばそうてん}、また在地の伝承にも眼を配りながら、瞽女の段物を読み解き、その特異性を探

りたい。手始めに使用するテキストを列記しておく。

高田瞽女段物『山椒太夫―舟別れの段』昭和五二年採録

説経節『さんせう太夫』正本

(1) 寛永十六年（一六三九年）頃刊行の天下一説経与七郎正本『さんせう太夫』

(2) 明暦二年（一六五六年）刊行の天下一説経佐渡七太夫正本『せつきやうさんせう太夫』

(3) 寛文七年（一六六七年）刊行の太夫未詳『さんせう太夫』

(4) 正徳三年（一七一四年）刊行の佐渡七太夫豊隆正本『山椒太夫』

謡曲『婆相天』一六世紀初頭成立

説経正本に関しては、それぞれ若干の文句の異同増減はあるが、話の筋は同一である。まずは(1)寛永本で説経節の詞章を確認し、瞽女の「舟別れの段」と比較してゆきたい。

場面は越後直江の浦で、山岡太夫の言われるままに、四人が二人の船頭「佐渡（蝦夷）の次郎」、「宮崎の三郎」の船に乗ってしまふところからはじまる。この先の運命も知らぬまま、舟はぐんぐんと沖を離れてゆく。

殊に哀れをとどめたは、二艘の舟にてとどめたり。五町ばかりは類船するが、十町ばかりもゆき過ぎて、北と南へ舟がゆく。御台はこの由御覧じて、（御台）さてあの舟とこの舟の、間の遠いは不思議やな。同じ港へ着かぬかよ。舟こぎもどい

「春の日足」

春のひあしに、遊びも長き

花ざかり

夢と思えば、五十年、

その邯鄲かんたんの仮枕

楽しみになるわいな⁸

「邯鄲の枕」という中国の故事をもとにした唄である。「春の日足も長く伸び、その分遊ぶ時間も増えた。その長い時間も、邯鄲の借りた枕で見た夢のように儚く消えてしまう。だけどその夢が楽しみになるものよね」。名替えの儀式でこの唄をうたう理由は定かではないが、栄枯盛衰を憐むのではなく、一瞬の夢を楽しむにする享乐的な歌詞が宴席の場を盛り上げそうである。

ジェラルド・グロマー氏の研究によると、江戸後期の儒者、原松洲の記録に「春の日足は）今町（現上越市直江津）のもの也、いづれの地にてもうたへども今町のごとく出来ぬ也」と記されていることから、この唄が現上越市直江津付近で隆盛した唄であり、また三味線の音・歌詞ともに都会的な雰囲気この唄は「直江津の民謡というよりは直江津の花柳界ではやっていた唄であろう」と考察している。当時の直江津には遊女宿が多数あったことや、そこに「盲女」と称された人々が資料に散見していることから、直江津で流行したこの唄を高田瞽女が取り込んだ可能性を示している。

瞽女は自ら音曲を創作することはなかったが、当時の流行歌や巡業地で人気のある唄はすぐにレパートリーに入れ、聴衆の受け

を狙い、訪れた土地の欲求に応えた。一方で瞽女集団の中でひとつの役割を果たした「春の日足」を見てみると、直江津の流行歌を自分たちの儀礼の中に取り込むという高田瞽女ならではの在地の繋がりが伺えるだろう。

高田瞽女の「山椒太夫」舟別れの段を読む

高田瞽女はさまざまな音曲を取り入れていたが、とりわけここで注目したいのは山椒太夫「舟別れの段」である。山椒太夫それ自体は瞽女のオリジナルではなく、中世から近世初期にかけて日本中に伝播された語り芸「説経節」の代表的な演目として知られている。説経節は一所不住の芸能者（説経師）によって全国に広められた。説経節の物語は義太夫や歌舞伎といった近世芸能にも取り込まれてゆく。瞽女の段物には説経節と共通する演目（説経『信太妻』に対応する段物『葛の葉』子別れの段など）がいくつも伝承されており、瞽女も他の芸能者同様その語りの影響を受けていたことが知れる。まずは瞽女の語りの題材となった説経節をもとに山椒太夫のストーリーを確認しよう。

(1) 事の起こりは岩城の国。「岩城の判官正氏」が筑紫の国へ配流されてしまう。正氏の妻とその子供「安寿姫」と「厨子王丸」は、お供の乳母を連れて父を尋ねる旅に出る。

(2) 四人は旅の途中、越後「直江の浦」に行き着き、そこで出会った「山岡太夫」に一夜の宿を借りるが、実はこの太夫は人売りであり、四人を人買いに売って儲けようと企んでいた。四人は騙され、乳母は直江の海に入水、母は佐渡へ売られ、姉弟は丹

渡世していたかが伺われる。

近世に入ると「瞽女」の名が定着してくる。永禄年中には三味線が広まり、鼓を用いる者は激減していった。三味線が庶民の間に浸透すると、目の見えない女たちは町の富裕な家の娘に音曲指南をしたり、宴席に侍したりする者が現れ、古くからの「田舎わたらい」する者と分かれてゆく。「村日待ち 膳が取れると瞽女を出し」という言葉はこの田舎わたらいする瞽女のことを指す。彼女たちは村祭りや日待ちの日を当て込んで、宴席に出て演唱する。それを行うために旅の日程や泊る宿は代々決まっており、村人たちは瞽女の来る時期になると「そろそろ瞽女さんの来る頃かな」とそわそわしだす。村人たちの待ち焦がれた瞽女の唄とはいかなるものなのか。

瞽女のレパートリーは広く、民謡から長唄、端唄、常磐津とさまざまなジャンルの唄を覚え、リクエストがあればすぐに応えていた。そうした中「段物」と呼ばれる長編の語り物は瞽女の本領が最も發揮される語り芸のひとつである。『看聞御記』の箇所で見られたように、段物は長編の物語全体を幾段かに句切って、三味線の音に合わせて語られる。その物語の素材は近世の浄瑠璃や歌舞伎で取り上げられた「八百屋お七」や「佐倉宗五郎」、そして「葛の葉子別れ」「小栗判官」「山椒太夫」など中世から近世にかけて大流行した説経節であり、それぞれのストーリーを瞽女独特の文句と節回しで語っていたのである。本稿ではこの段物の中でも、高田瞽女が持ち伝えてきた山椒太夫「舟別れの段」を取り上げるが、その前に高田瞽女について概観しておこう。

高田瞽女のあらまし―「春の日足」から

越後には十以上もの瞽女集団がある中、上越地方高田に拠点をすえたのが「高田瞽女」である。

高田城が開府した慶長十九年（一六一四年）から既に城下町には瞽女の集団が定着していたと考えられている⁶。高田を拠点として、上州番・信州番と二つの組に分かれて活動し、年始は高田近郊をまわる。そうして一年のうち三〇〇日あまりを旅まわりに費やしていた。

そのため、瞽女になるためには音曲芸のほか、旅の決まりや基本的な生活の作法、言葉遣いまで厳しく躰けられる。「めくらでも目明きと同じようにできるようにせよ」というのがまず瞽女になる第一の教えであった。

一般に瞽女になるためには幼い頃から師匠のもとで一〇年以上もの修行を要する。修行に入る時期は初潮前が良いとされ、七、八歳から弟子入りするのが普通であった。弟子入りするとそれまで生家と呼ばれていた名を改め、親方から瞽女名をもらう。それから七年、一〇年の区切りの年に修業をつづけた証としてそれぞれ親方から「出世名」を貰い、「名ぶるまい」の儀式が執り行われる。儀式では名を替える瞽女が花嫁衣裳を身にまとい、三々九度の杯を酌み交わすという、当時の結婚式のような様相を呈している。この儀式の様子は越後内の他の瞽女集団と共通しているが、儀式の終わりに高田瞽女のみが慣わしとして「春の日足」という唄をうたう。

瞽女のあらまし

◎瞽女の歴史

盲目の女性芸能者の歴史を遡ってみると、室町時代にはすでに瞽女の前身的な存在が資料に見えている。『看聞御記』^{かんもんぎよき}の応永二十五年（一四一八年）八月十七日付けに、芸能をする盲女たちの姿が書きとめられている。

夜、盲女兩人（愛寿、菊寿）参る。愛寿は日来も参る。菊寿は初参なり、愛寿の弟子なりと云々。前に召して芸能を施さしむ。五六句申す。聴衆、濟々候ふ。芝殿以下、参る。歌ひ了つて、引物、薫物、本結、檀紙十帖を賜ふ。その後、台所において一両また歌ふ¹。

夜になって盲女・愛寿と菊寿が屋敷にやって来た。二人は屋敷の人々の前に出て芸能を披露し、その後引き出物をもらう。この二人は師弟関係にあり、師匠はこの屋敷の馴染みの芸能者であるらしい。たくさんのお客の前で、二人の盲女たちはどのような芸能を行っていたのだろうか。

ここで披露された芸に関して、鈴木孝庸氏は次のように考察している。まず着目したのは彼女たちの芸能の様子を書いた「五、六句申」と「歌」という言葉だ。『看聞御記』中に「申す」という言葉が他にも出てくるが、それは琵琶法師が平家を「語る」際に「申す」という字が当てられることが多々あることから、「語り」の芸であろうと考えられる。つまりここでの「五六句申」とは、平家のような長編の物語を、「五つ六つ」に「句」切つて語つて

いたと解釈することができる。おそらくこの頃からすでに盲女たちは長編の語り物を自らの芸としていたのである。

またもう一つ鈴木氏が着目したのは、二人が歌い終わった後の台所での「歌」だ。ここでも重なるのが盲目の男性芸能者であり宗教者でもある、地神盲僧である。彼らも越後の瞽女と同様に旅をし、また毎年決まった家（壇家などと呼び習わされる）を訪れていた。彼らもまた唄や語り物を行ったが、本業は各家に祀られている竈神に地神経を奉納することであった。『看聞御記』にみる盲女たちの芸能もまた、それに通ずるものとなっているのがわかる。

また明応九年（一五〇〇年）頃成立の「七十一番職人歌合」に「女盲」の項がある。そこには目の見えない女性が鼓を打っている姿と、背景にはこの女性が語っている『曾我物語』³の詞章、脇には草履と杖を横たえている様子が描かれている。この絵から判断すると、瞽女の前身である芸能者は、はじめ鼓を打ちながら芸を行っていたと推測でき、また下駄と杖は同資料の「琵琶法師」の項にも描かれていることから、女盲も琵琶法師同様遊行をしていたことが考察されている。

「女盲」の絵に『曾我物語』の詞章が添えられていたが、謡曲『望月』に登場する「盲御前」もまた鼓の音に合わせ同じく曾我兄弟の物語を語る。職人歌合と謡曲とで盲女の語る演目が重なるところから、平家物語が琵琶法師の語り物であったように、曾我物語が瞽女の前身者たちの語り物であったのではないかと考えられている。一方で盲女たちが寺社の縁起や神仏の本地譚などを語っていたという記録も多数出ており、さまざま唄や物語を習い覚え

高田瞽女の語りの世界―『山椒太夫―舟別れの段』を読む

117060 蒲原 羽純

【目次】

はじめに

瞽女のあらまし

高田瞽女のあらまし

高田瞽女本『山椒太夫―舟別れの段』を読む

I 御台所の口説きごと

母子の対面 ―御台の語りからみる瞽女本の特異性

II 乳母の入水―うば竹の造型と伝承

段物にみるうば竹の造型①―入水の理由

段物にみるうば竹の造型②―うば竹の変身

北海擁護の神になるうば竹

おわりにかえて

はじめに

「瞽女」と呼ばれる盲目の女たちがいた。瞽女は目が見えないが、一生のほとんどを旅の空で過ごし、娯楽も通信手段もない僻陬の村々へ唄や物語を運び入れた。近代以前、盲目の女性失明者の仕事といえば、按摩か巫女、そして瞽女であった。幼少期に目の見えなくなった女の子が、十年以上も修行をし、厳しい掟に耐えながら芸を習得してゆく。その芸を携えて、農村をまわりながら喜捨を得ることが彼女たちの生業であった。

今回の助成金論文執筆に当たって、私は越後高田に拠点を置く「高田瞽女」に着目した。その理由として、まず彼女たちが昭和三七年まで巡業を行っており、近代以前の芸能や組織形態を持つ旅芸人の姿が戦後もしばらく続けられていた事実を目を見張ったからだ。盲目の女たちのみで形成された独特な組織形態や広大な巡業域など興味深い点は多々あるが、やはり瞽女の生業である唄と語り物について考えてみたいと思い、高田瞽女の持ち伝えている「段物」(語り物)「山椒太夫」に焦点を当てた。この語りの詞章を読み進めてゆくと、当地の瞽女独特のモチーフを有していることがわかる。本稿では高田瞽女の語りついで山椒太夫「舟別れの段」の詞章を紹介しながら、その特異性に迫ってみたい。

和光大学学生研究助成金規程

- 第1条 この規程は、学則第68条に基づき、和光大学学生研究助成金（以下「助成金」という）制度について定めるものである。
- 第2条 助成金は本学在学生のうち、次に定める者に対して給付し、学術研究および制作等を奨励することを目的とする。
学術的研究および制作等について顕著な成果を挙げつつあると認められる個人またはグループ。
- 第3条 助成金は、この目的のための学内外の寄付金ならびに本学の拠出金をもって充てるものとする。
- 第4条 助成金の支給額は、1件につき年額5万円以下であることを原則とする。ただし、委員会が必要と認め学長がこれを承認した場合には、増額することができる。助成金の給付を受ける者を和光大学学生研究助成金受給者（以下「受給者」という）と呼ぶ。
- 第5条 受給希望者の募集は、毎年11月に公示し、翌年の5月1日から5月31日の間に申請を受付ける。
- 第6条 受給者の採用は、本学教員の推薦による出願者のうちから、その所属する学科の意見を求めた上で別に定める和光大学学生研究助成金委員会（以下「委員会」という）が選考し、学長がこれを決定する。
- 第7条 助成金は、給付決定年度の7月に、事業室において交付する。
- 第8条 受給者は、委員会が定める研究報告会において研究成果を発表するものとする。
- 第9条 受給者は、研究報告書ならびに助成金の用途についての報告書を給付年度の1月末日までに学長に提出するものとする。
- 第10条 助成金の事務は企画室の所掌とし、その事務取扱いは別に定める学生研究助成金事務取扱要項によるものとする。
- 第11条 この規程は改正を必要とする場合は、教授会の議決を経なければならない。

付 則
この規程は昭和49年9月1日から施行する。

付 則
この規程は昭和57年4月1日から施行する。

付 則
この規程は昭和63年4月1日から施行する。

付 則
この規程は平成19年4月1日から施行する。

付 則
この規程は平成20年4月1日から施行する。

付 則
この規程は平成21年4月1日から施行する。

和光大学学生研究助成金事務取扱要項

1. (目的)

和光大学学生研究助成金規程（以下「規程」という。またこの要項の用語の略称は規程に準じる。）第10条に基づき助成金の事務取扱要項を次のとおり定める。

2. (所管)

助成金ならびに委員会に関する事務は、企画室の所掌とする。

3. (募集)

助成金の受給希望者の募集は、毎年11月に公示し、翌年の5月1日から5月31日の間に申請を受付ける。

4. (申請書類)

- (1) 和光大学学生研究助成金交付申請書。
- (2) それまでの研究に基づく、論文の草稿、ノートの写し、調査の結果、資料集等。
- (3) 中間報告書。(研究・制作にあたっての問題意識、研究・制作の過程を400字詰め原稿用紙20枚以上にまとめたもの。)
- (4) 申請時まで必要とした経費についての資料（可能であれば領収書を添付する）と、申請時以後に必要な経費の概算書。
- (5) その他委員会が必要と認めるもの。

5. (選考決定)

- (1) 委員会は、書類審査、面接、申請者の所属する学科の意見を総合して、受給候補者を選考し、学長に具申する。
- (2) 学長は、受付締切後1ヶ月以内に受給者ならびに給付額を決定し、提示によって発表する。

6. (助成金の交付)

助成金は、受給者決定の翌月以降、事業室にて交付する。

7. (研究報告、公表)

- (1) 受給者にたいしては、研究報告会での研究成果の発表を求める。
- (2) 受給者にたいしては、研究成果（別に定める「学生研究助成金に関する報告書」「研究についてのレジュメ」と「研究報告書本文」）、助成金の使途について、給付年度の1月末日までに報告を求める。研究報告書本文は、独自のものとし、卒業論文、卒業制作ならびに研究成果が掲載された雑誌等の写しの提出によってこれに代えることはできない。
- (3) 受給者が提出した研究論文は論文集にまとめ、本学図書館に保存する。

付 則

この事務取扱要項は昭和63年4月1日から施行する。

付 則

この事務取扱要項は平成19年4月1日から施行する。

付 則

この事務取扱要項は平成21年4月1日から施行する。

和光大学学生研究助成金委員会規程

1. 本学に和光大学学生研究助成金委員会（以下委員会という）を置く。
2. 委員会は、次の各項のことを審議する。
 - (1) 助成金の運営に関すること。
 - (2) 助成金受給者選考に関すること。
 - (3) 和光大学学生研究助成金規程に関すること。
3. 委員会の委員は、原則として各学部教授会から2名選出し、学長が任命する。委員の任期は2年とする。ただし再任をさまたげない。
4. 委員会に委員長および副委員長を置く。委員長および副委員長は委員の互選によって選出される。
5. 委員会は下記の場合に開催される。
 - (1) 助成金運営に関する審議をするとき
 - (2) 受給者を選考するとき
 - (3) 報告書を検討するとき
 - (4) 委員長が必要と認めたとき

付 則

この規程は昭和49年9月1日から施行する。

この規程は昭和56年11月1日から施行する。

この規程は平成11年4月1日から施行する。

2014年度
学生研究助成金委員会

委員長 星野菜穂子（経済学科）
副委員長 伊藤 武彦（心理教育学科）
委員 小林 芳文（身体環境共生学科）
山本ひろ子（総合文化学科）
佐藤 泰生（芸術学科）
井出健二郎（経営学科）

事務担当 学長事務部企画室学術振興係

和光大学同窓会から、毎年度学生研究助成金活動に対するご寄付を頂戴しております。このご寄付は、今年度も助成金の一部として活用させていただきました。この紙面をお借りして和光大学同窓会に厚く御礼申し上げます。

和光大学 学生研究助成金論文集 22

わたしたちの論文2014

発行日 2015年3月19日

発行所 和光大学 学生研究助成金委員会

〒195-8585 東京都町田市金井町2160

☎ (044) 989-7497

印刷所 アインズ株式会社

〒520-2573 滋賀県蒲生郡竜王町鏡2291-3

☎ (0748) 58-8101 (代)

